

英雄がヒーローになります！給料次第ですけど。

聖剣エクスカリ棒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エビオがヒロアカ世界でヒーローになる話の予定

作者はどのコラボも好きですが、ゴミズが一番好きです。

更新が速い時もあるれば遅い時もあります。ご了承ください。

←エクス・アルビオ

<https://www.youtube.com/channel/UCIytN>

<https://www.youtube.com/channel/UCIytN>

<https://www.youtube.com/channel/UCIytN>

2 / 5 皆様のおかげで連載になりました。ありがとうございます。

2 / 26 作者ページへのリンクを一応開けました。

しばらく更新がされていなくてもエタっている訳ではありません。

リアルが忙しかったり、次の話がいっつかない時です。

出来ればご了承ください承頂けると幸いです。

目次

ヒーローになるため雄英を受験！英雄の力を見せてやります！	1
遂に高校デビュー！陽キャなんで友達作ります！	14
勝てる自信があるならかかってこい！誰が相手でも受けて立ちます！	28
葛葉さんとタツグマッチ！師匠とレヴィさんをボコボコにします！	41
昨日は疲れたので今日は平和に過ごします。	57
1人でUSJほど虚しいものは無いですよ。僕は行きましたけど。	71

皆でヴィランと戦います！どっちが上かハッキリさせましょう。	84
ボス戦開始！コテンパンにしてやります！	100
【ヒロアカUSJ編】アルティメット対あり【僕のヒーローアカデミア】	115
お世話になった方にお詫びにいきます。師匠との特訓も出来たらやります！	132
132 体育祭開始！皆殺しにします！	147
ふざけた障害物競走を全力でクリアします！！	162
体育祭第2種目も勝ち抜きます！	

【#雄英騎馬戦】僕たちのチームが最強で

す！

193

【#雄英騎馬戦】1000万を取ります！

207

休憩時間らしいのでなにかします！弁当

食べます！

223

トーナメントらしいので殴り勝ちます！

239

社長とタイマン張ります！勝ちます！

【#雄英体育祭決勝戦】

253

超絶イカしたヒーロー名を決めます！

体育祭登場ライバー+？α？まとめ

284

今日はなんかやる〜

292

友達と遊びに行きます！全力で！

302

最強のヒーロー事務所で色んなこと教え

てもらおうぞ！

316

ヒーローになるため雄英を受験!英雄の力を見せてやります!

昔、中国辺りでなんやかんやあって大体の人が《個性》を持ったいかれた世界。

毎日のように《個性》を悪用した犯罪者が事件を起こす、死ぬほどヤバいこの世界で、《個性》を活かして犯罪者と戦うめちやくちやヒーローみたいな奴ら、《ヒーロー》がいた。

そんなこの世界じゃ、物心がついた子供達は皆ヒーローに憧れている。もちろん俺もその1人だ。だって給料が高いらしいから。

「遂に来てしまった…」

ヒーローに最も近いとされる高校、雄英高校。その門の前に金髪蒼眼の美青年、エクス・アルビオが佇んでいた。

「やべえ、死ぬほど緊張してきた。もう帰っちゃダメかなー。ダメだよなー。なんで雄英高校とか選んだんだろ、俺。もうめちやくちや人いるし。あーもうダメだ。もう落ちた。絶対落ちたわこれ。もう正直めちやくちや吐きそう」

周囲にヤバいやつを見る目で見られていることにすら気づかずにとぼとぼと歩くエクス。校舎に入り、指定された席に座る。エクスの目は既に死んでいた。

『今日は俺の入試ライブへようこそー!!? エヴィバデイセイハイ!!?』

全員が座り終えるのを確認し、プロヒーロー《プレゼント・マイク》が大声を上げた。「やばいやばい、あの人絶対陽キャだよ…。絶対タピオカとか飲んでるわ」

エクスは頭を抱えていた。

「教師が陽キャとか、生徒も陽キャって決まってるじゃん…。俺以外絶対陽キャだよこれ…。いや、違うな。この高校に入るってことは逆に俺も陽キャって事じゃん。うわ、完璧だ。俺陽キャじゃん。よっしゃ!」

小さくガッツポーズをしながら顔をあげると、周りの生徒がゾロゾロと移動を開始していた。

「やべえ、なんも聞いてなかった」

エクスは絶望した。

周りについて行き、何やら街のような場所に来たエクス。

『ハイ、スタート!!』

プレゼント・マイクの号令を聞いた瞬間、エクスは反射的に街の中心部へ向けて走り

出した。

「待って、なんも考えずに動いちやっただけどうしよう。スタートってことは競走でいいのか? いやーでも俺走るのそんな速くないしなー」

とりあえず、スタート地点の逆方向へ走るエクス。すると突然、目の前にロボットが飛び出してきた。ロボットはエクスを見つけた途端、襲いかかってくる。

「はあ!? 障害物競走なの!? 全っ然聞いてないんだだけ!? いや、全部聞いてなかったんだけど!」

ロボットの追撃を躲しながらひたすら走るエクス。走れば走るだけロボットの数は増えていく。

「いっそ、誰かに擦り付けるか?」

そう考えたその時、後ろから爆発音と共に、ロボットの破片が飛んできた。

「は!? こいつ壊していいの!? じゃあ楽勝じゃん!」

振り向きざまにロボットの顔部分を殴りつける。ロボットは吹き飛び、建物の壁に衝突して動きをとめた。

『エクス・アルビオーポイント獲得ー!』

プレゼント・マイクのアナウンスが入る。エクスはそれを聞いてロボットの群れをボロボロにしながらか考えた。

「1ポイントってなんだ…」

しばらく思考した後、はっとして顔を上げる。

「ゴールした時に持ってたポイントで勝ち負けが決まる感じか！」

そう叫んだ瞬間、進んでいた方向と反対方向（つまりスタート地点の方向）に走り出すエクス。

「じゃあ殺したもん勝ちじゃん！殺そー！」

近くにいたロボットを片っ端から殴り、蹴り、投げ飛ばす。時には他人の獲物を横取りしつつ順調にポイントを重ねていた。

「45ポイント目え！めっちゃくちゃ楽しいわこれ！」

戦いの中でエクスは気づいていた。ロボットがデカくて敵ついほどポイントが高い事に。

それに気づいてから、エクスはデカイロボットを優先的に破壊していた。

ここで、原作を知っている方々は既に察しているかもしれない。ヤツの事を。

「やべえ、逃げろー！」

そんな叫び声が辺りに響く。声に誘われそちらを見れば、沢山のひと…

それを追う、超巨大ロボの姿が。

「やっばい！あいつやばい！超でけえ！絶対1万ポイントとかあるじゃん！でもあれどう

やって倒すんだろ。なんかえげつないぐらい強い個性持った人連れてきてラストを俺が決めるか? いやーでも強い人探す間に逃げられるかもだしなー」

その辺をくるくると円を描くように歩き回りながら、ぶつぶつと呟くエクス。ふと、その頭上に影が差した。

「おい、逃げろー!!!」

「え?」

そんな誰かの叫びとともに、エクスの体はロボットの拳に押しつぶされた。

「あ、ああ…」

その光景を見た周りの人々は、皆腰を抜かした。なにせ、目の前で人が死んだのだ。中には、嘔吐する者までいた。

そんな彼らに、無慈悲にもロボットは標準を合わせた。

皆が死を覚悟する一一一

その時、ロボットが大きく傾いた。

そのまま皆が呆然と見つめる中、ロボットはその巨体を建物の中に沈めた。

「つしゃー!勝ったー!」

そう叫んでロボットから飛び降りたのは、先程潰された筈の男、エクス・アルビオだった。

「いやー、デカいだけで大したこと無かったわー」

「ど、どうやって…」

意気揚々と歩を進めるエクスに対して、近くにいた男子が問いかける。

「どうやってあいつを倒したんだ…!？」

一般人の彼の問いは至って普通のものだろう。そんな彼に対し、変なものを見る目でエクスは答えた。

「殴ってきた手を登って、そのあと顔面をめちゃくちゃ殴っただけですけど」

さも当たり前かのように答えたエクスに、周囲は驚きのあまり声が出なかった。

「じゃ、失礼します」

軽く礼をして再び走り出すエクス。再びロボット狩りをしつつゴールがありそのような方角に向かっていく。

高ポイントには狩られ尽くしたのか姿を見せず、低ポイントの雑魚しか現れない。

「はー？つまんねえー。もつとポイント高いのいなかかなー」

先に説明をさせてもらおうと、エクスは高ポイントが全く出ない事と残り時間が分からないことで少し焦っていたのだ。

「あ」

「うわあっ!」

殴り飛ばしたロボットが他の受験生に当たり、怪我をさせてしまったのだ。

「ああああああ!すんません!まじですいませんでした!許してください!」

エクスは綺麗な土下座を披露した。しかし…

「だめだぞお♡怪我したんだから責任持って一緒にいてね」

相手は既に合格を諦めており、先程から明らかに合格しそうなエクスの足を引つ張つてあわよくば同じ不合格にしてやろうと目論んでいたのだ。

「そこをなんとか…」

「だめだぞお♡」

相手が被害者な以上、こちらも強気にでることは出来ない。エクスは不合格という最悪の事態を考えた。

「どいて」

「え?」

突然身体が押しつけられる。見れば、そこには銀髪に蒼眼で、少しばかり顔の丸い少女の姿。

「《ヒーリング》」

少女が傷口に手をかざして何かを呟くと、淡い光と共に傷が治った。

「これで大丈夫でしょ？もう動けるはずだから」

「い、いわいわいわ……」

少女がそう言い放つと、元怪我人はそそくさと去っていった。

その光景を見たエクスは思わず少女の手を掴む。

「ありがとうございます！ございました！俺を舎弟にしてください！もう、一生尊敬します！もう師匠ですあなたは！」

「え、嫌だ」

だが、少女の拒否の言葉も耳に入らないほどエクスはテンションが上がっていた。なにせ、自分の危機を救ってくれたのだ。これは恩返しをするしかないだろう。

「ちよつとまつててください！」

そう言うつてすぐに、エクスはその場から一瞬で走り去った。訳が分からないまま取り残され、とりあえず待つ少女。どうやら、お人好らしい。

そして待つこと数分、エクスは大量の1ポイントロボットを落ちていたらしい電線で縛って持ってきた。

「全部で15ポイントあります！動けない1歩手前なんで、師匠がやつちやつてくださいー！」

笑顔で言ったエク스에、少女は目を丸くする。

「え、この短時間でこんな捕まえてきたの?」

「そうですけど」

少女は驚愕した。このアホそうな雰囲気のことだが、まさかこれほど強いなんて思わなかった。

少女の個性は《魔法》であり、多種多様な魔法を使うことができるのだ。しかし、少女には決定的な弱点があった。

それは、近接戦闘である。いくら肉体強化をしたとしても、元が弱ければなんの意味もない。100に5をかけたら500だが、1に5をかけたところで5だ。

そこで少女は考えた。

「もしも、ボクが英雄高校に受かってキミも受かったら、ボクに戦い方を教えてよ」

「あ、了解です（脊髄反射）」

適当なエクスの返答に若干、本当に少しだけいらつとしながらも、少女はロボット達を得意な雷の魔法で消し飛ばした。

「じゃあ、ボクはこれで。絶対受かってね、先輩!」

「はい」

歩いていく少女を見送りながら、エクスは呟いた。

「俺同い年だから先輩じゃないと思うんだけどなー。あの子チビだから俺が年上に見えるのかな？」

そして、エクスは再び走り出した。

『試験終了ー！』

少女と別れてまもなく、終了を知らせるアナウンスが鳴った。皆が脱力する中、エクスが突然膝から崩れ落ちた。

咄嗟に、近くにいた数名の男女が駆け寄る。

「だ、大丈夫「…ル…た」…え？」

「ゴール出来なかったああああああー！」

エクスは再び絶望した。

数日後。エクスは試験のことなどすっかり忘れてゲームに勤しんでいた。

「よっし！ローラー潰した！仲間が強い！勝てる！ちゃんと壁も塗って道作って…あゝ、あゝ！くっそ…シューターが残ってた……」

一人で騒ぎながら、緑のインクでフィールドを塗っていく。仲間に恵まれた事もあり、エクスは順調にエリアを守っていた。

「勝てる、これ勝てる！」

『ピンポーン』

エクスは、一気に現実に引き戻された。

「え!?なんか来たんだけど!どうしよう!ここで抜けて負けたら大戦犯じゃん!でも、めちやくちや重要な荷物かもしれない!受け取ろう!ここから負けることはないでしょう!」

悩みに悩んだ(2秒)すえ、エクスは玄関に向かった。

「はい」

「エクス・アルビオさんに御荷物が届いています。ここにサインお願いします」

「はい。…はい、書きました」

「ありがとうございます、こちら、荷物です。ありがとうございます」

「ありがとうございます」

受け取りを済ませて包みをみる。発送場所は雄英高校。

「なんだこれ…」

中を開けると、入っていたのは謎の機械。雄英高校の名前を騙って送り付けられたなにかやばいものかもしれない。

エクスが窓からポイしようとした時、機械から映像が流れた。

『わたしが投影されたあ!』

「うわ、なんかでた」

投影されたのは、No. 1ヒーローと名高いオールマイト。エクスも見たことがある有名人である。

『はじめまして、アルビオ少年！合否発表は、私が一人一人やらせてもらっている！』
「へえ、凄いなあ。あんまり興味無いけど」

説明によれば、試験はどれだけポイントを集めたかでありゴールとかは関係なかったらしい。そして、『レスキューポイント』という裏ポイントも含めて合否を決めるらしい。

『なのだが…、アルビオ少年は他人のポイントを横取りするなどのヒーローらしからぬ行為が見られたので、1部減点させてもらう』

「はあああ!?!ちよつと待つてちよつと待つて、それはおかしいでしょ!?!ポイントなんて取ったもん勝ちじゃん！納得いかねえ！」

散々喚き散らした後、渋々納得…はしないが、認めるエクス。
その結果は…

エクス・アルビオ

53ポイント+29レスキューポイントー減点分21ポイント

計61ポイント

『合格だ、アルビオ少年!ようこそ、雄英高校へ!』

「まあ、俺が落ちるわけないか。俺最強だもんな」

そう言いつつも、顔のニヤケは止まらない。

上機嫌でゲーム再開の為にSwitchを手取る。

「負けてるんだけどお!!?!」

エクスは大戦犯をかましたのだった。

遂に高校デビューー！陽キヤなんで友達作ります！

エクス・アルビオは悩んでいた。

目の前には巨大な扉。中からは教師と思われる声が聞こえている。

「遅刻した…」

エクス・アルビオは遅刻常習犯である。

「どうしようかなあ…、入ったら絶対怒られるよなあ。帰ろうかなあ。でも、初日から不登校はやばいよなあ。はいるしかないかあ」

廊下をウロウロしながらぶつぶつ呟くエクス。結局入ることにしたらしい。

「行ける、焦るな、俺は冷静沈着エクス・アルビオ。よし、行ける！」

扉に手をかけ、一気に開く…！

ことはなく、エクスはビビりながらそろそろと扉を開けた。

クラス全員の目がエクスに集中する。

全員の奇異な視線がエクスに集まるこの状況を打開するため、エクスは頭をフル回転

させ…

「すみません、間違えました」

エクスは逃げ出すことにした。

「無理だー!あの空気感で入れる奴の方がおかしいわ絶対!」

扉の前で頭を抱えるエクス。彼は高校デビューを失敗した。

「もういつそ、このまま帰る手も…」「ねえよ」

突如聞こえた声に、エクスは咄嗟に振り返る。そこには、寝袋を来た小汚い男性の姿。

エクスは思った。

「(やべえ、なんか不審者いるんだけど!テロ起きてんじやん!つかなんで寝袋!?)」

「何を考えてるかは知らんが、俺は担任の相澤消太だ」

「え、担任なんすか!?!あなたが!?!」

酷く混乱するエクスをよそに、男性は寝袋のままエクスに尋ねた。

「お前、エクス・アルビオだろ。なんで遅刻した」

ここからは一瞬だった。エクスは現実味があり、なおかつ普通に起きそうなパニックを瞬時に考えたのだ。そして、ひとつの言い訳に辿り着く。

「道端でおばあさんが重そうな荷物持って歩いてたので、運んであげてました」

平然とウソをつくエクス。それに対して担任は…

「今回は人助けとして目を瞑るが、ヒーローは他のどの職業よりも時間を守れ。災害現場じゃ遅刻は命取りになる」

「はい！了解しました！」

エクスは安堵して、2列目一番前の自分の席についた。

エクスが席についたのを確認して、相澤先生が話し出す。

「エクスも到着したので、早速君たちにはこれを着てグラウンドに出てもらう」

相澤先生が取り出したのは、雄英高校の体育服だった。

エクスに英雄の勘が囁く。

「(嫌な予感しかしねえ…。)」

担任にグラウンドに出ろと言われた生徒達は、男女に別れて体育服に着替え出した。

今度は遅刻出来ないと急いで着替えるエクスに赤髪を逆立てた青年と黒髪で肘部分がテープの様になっている青年が声をかけた。

「お前、体でけえな！」

「あ、はい、ありがとうございます？」

「なんで敬語だよ！クラスメイトだろう？」

「デカいって言ったなら、あの人もだいぶでかいですけどね」

エクスの視線の先には、1人で着替えをしている白髪に赤眼の生徒がいた。彼の周りにはどこか、近寄り難い空気が流れている。

「いや、お前の方がでかいだろ。なあ!」

「あー、ありがとうございます」

とりあえず、この2人はめっちゃくちゃ良い人らしい。エクスはそう思った。

「俺は切島鋭児郎。よろしく!」

「瀬呂範太。よろしくな」

「エクス・アルビオです。よろしくお願いします」

会話を交わしていると、2人はいかにも外国人風なエクスに興味を持って話しかけてきたらしい。

「エクスって外国人?」

「いや、純粋な日本人ですな」

「へー、じゃあ英語とか喋れねえのか?」

「いや、日本人だけど英語ペラペラですよ」

嘘である。なぜこんなしょうもない嘘をつくのか。エクスの生態七不思議の1つだ。

「にしても、いきなりグラウンド出るとか意味わかんねえよな」

体育服を着ながら切島が言う。

「そうですねー。まあ、俺は何があっても余裕ですけど」

「凄い自信だな!」

「まあ、見た目強そうだもんな。お前」

3人で話しながら廊下に出ると、丁度女子更衣室から見覚えのある少女が出てきた。

「あ、師匠じゃないっすか。受かったんですね」

「ボク、キミの師匠になったつもりないんだけど」

呆れたような目でエクスを見る少女。

その時、場に少しばかりの沈黙が流れた。主に、瀬呂がエクスに親の仇を見るような目を向けたからである。

切島がエクスと少女を交互に見つめた後、瀬呂を捕まえて走り出した。

「邪魔しちゃ悪いし、先に行ってるわ。じゃーなエクスー!」

「え、ちよ、離せ!エクス!後で色々聞くからなー!」

「あ、はーい。…なんだったんだあの2人」

エクスは首を傾げながら、少女と共に廊下を歩きます。2人は気づいていないが、傍から見れば恋人とも間違われそうな距離感である。

もちろん、2人にそんな気はさらさらない。

「あ、師匠の名前ってなんですか?」

エクスが少女にそんな事を尋ねる。

「は?」

「いや、そう言えば、聞いた事ないなーって」

エクスという言葉聞いて少女は考える。確かに、試験会場で名乗りあった記憶はないし、教室では話す時間すらなかった。

「ボクはアルス・アルマルだよ。先輩は?」

「俺っすか?俺はエクス・アルビオです。エクス様って呼んでいいですよ」

微妙にうざいドヤ顔でそんなことを言うエクスに、少女一「アルスはムツとした顔で言い返す。

「エクスなんてカツコイイ名前、先輩には似合わないから。名前の最初と最後をとってエビオでいいんじゃないですか?」

「はああ!?嫌ですよそんなクソダサイ名前!エクス様って呼べ!…んでください!」

エクスが叫ぶも、アルスはそれを無視して走り出す。

「えび先輩、早く行かないと遅れちゃうよ」

「ああもう、この師匠めちやくちや腹立つー!」

エクスもアルスを追って走り出すのだった。

「え、師匠走るのおっそ！」

「し、しようがねえーだろお！こちとら魔法使いだぞお！」

グラウンドに集まると、相澤先生が話を始めた。何やら、『個性把握テスト』なるものを行うらしい。

なんでも、『雄英高校は自由な校風で有名だが、それは教師にも適用される』らしい。入学式やその他諸々を飛ばして、まずは生徒達がどんなものかを見るというわけだ。

「はー、なんかすげえとこに来ちゃった感が凄いなー」

「だねー。普通、考えられないよ」

腕組みをしながら呟くエクスに、アルスも同意する。

「でも、個性把握って何するんですかねー。殺し合いとか？」

「うわ、物騒だなー。もしそうだったら、ボクと先輩で組みましようよ」

「それいいですね！近接俺がやって、師匠が後ろから魔法撃てば絶対負けませんよ！

やっぱ師匠頭いいなー」

「だろ？魔法使いはここを使うからね」

人差し指で頭をトントンと叩くアルス。

それを見たエクスは、何も考えずに言った。

「師匠って顔丸いですよね」

『どうして本当の事を言っちゃダメなのか分からない』と、後のエクス・アルビオは語った。

だがさてよ、と。普通に考えて、顔が丸いは悪口だ。誰だって怒るだろうし、それが当たり前の反応だ。

もちろんアルスもキレた。

「はああああああ!?!ふっざけんなおまつ、誰の顔がでかいってえ!?!」

「え、ちよ、なんでキレてるんすか」

「こちとらなあ、おめえみたいに小顔で生まれてきてねーんだよ!悪かったなあ!顔が丸くて!」

エクスの足をゲシゲシと蹴りつけるアルス。ふと視線を感じて見れみれば、周りの全員が二人を見ていた。

エクスとアルスは二人で顔を見合わせ：

「すいませんっしたああああ!!」

目にも止まらぬ速さで土下座した。この二人には恥もプライドも無いのか。

「はあ…。次授業妨害したら、即退学だ。わかったな」

「わかりました!」

相澤先生のお叱りに、二人はピシッと気をつけの姿勢のまま、ピクリとも動かなくなる。

「悪いな、爆豪。改めて、やってくれ」

「言われなくてもやってやるよ」

どうやら今から、爆豪と呼ばれた青年が個性を使ってソフトボール投げをするらしい。

2歩の助走の後、爆豪がボールを投げる。

「死ねえ!」《F A B O O O O M!!》

いきなり起きた爆発と共にボールは遙か遠くまで吹き飛んだ。

「まず、自分の『最大限』を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

相澤先生の手元の機械に表示された数値は『705.2m』。

その数値を見た生徒達が、一斉に盛り上がる。

「なんだこれ!!すげー面白そう!!」

「705mってマジかよ」

「個性思いつきり使えるんだ!!さすがヒーロー科!!」

もちろん、エクスもめちやめちやテンションが上がっていた。

「うおおおお!! 師匠見た!? 師匠見ました!? なんかに爆発してボールがぶっ飛びましたよ!」

「分かってるって、えび先輩ちよつとうるさい」

「やべえ、めちやくちや楽しそう…!」

そんな浮ついた雰囲気の中、相澤先生が静かに声を上げた。

「…面白そうか。ヒーローになる為の3年間、そんな腹つもりで過ごす気なのかい?」

その一言で、クラス全員が不穏な空気を感じ取った。

「よし、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し『除籍処分』としよう」

相澤先生の言葉に誰一人として動くものが居なくな…いや、1人だけいた。

エクスのみ、何かを呟きながらあちこちを歩いていった。

「えーつと…、パブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ホアン・ネポムセーノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・クリスピン・クリスピアーノ・テラ・サンディシマ・トリニダード・ルイス・イ・ピカソ! よし! 全部言えたあ!」

エクスは何故かピカソのフルネームを暗唱していた。

相澤先生は最早、エクスを無視して話を続ける。

「生徒の如何は先生俺たちの『自由』。ようこそ、これが『雄英高校ヒーロー科』だ」

「最下位除籍つて……入学式初日ですよ！いや、初日じゃなくても理不尽すぎる！」
相澤先生に反論をしたのは茶髪ショートの少女。彼女の言葉は世間的には最も正しいことだろう。

だが、ここは雄英高校だ。

「自然災害、大事故、身勝手な敵たち。いつどこから来るかわからない厄災。日本は理不尽にまみれている。そういう理不尽を覆していくのがヒーロー。放課後マックで談笑したかったならお生憎、これから三年間雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける」

相澤先生の言葉に生徒はそれぞれ、様々な反応を示した。

「えー、マック行けないのかー。じゃあミストとか行こうかなあ」

「えび先輩さあ……、ちゃんと分かってる？」

エクスの反応にアルスはジト目を向ける。

「分かってますよ？でもですよ、師匠。理不尽が襲ってくるなら俺が死ぬほど強くなつて上から叩き潰せばいいだけでしょ？」

「えび先輩……！」

エクスらしからぬ言葉に、アルスは思わず声を上げた。

「それを今先生が言ってたんだけど」

「あれえ〜？」

訂正、エクスはエクスだった。

その裏で、相澤先生が薄く笑みを浮かべて言った。

「Puls 更に向 ultra こra へさ。全力で乗り越えて来い」

個性把握テストが、始まった。

結論から言えば、除籍処分されたものはいなかった。どうやら、相澤先生がついた嘘らしい。

エクスは「僕は分かってましたよ」と言っていたが、恐らくこれも嘘だろう。

ちなみに、テストの結果としてはエクスは特にハプニングもなく次々と高記録を重ねていったし、アルスも、バテつつも色々な魔法を駆使してギリギリ上位にくい込んでいた。

緑谷出久という青年が指を一本大怪我したが、それ以外は特に怪我もなく殆ど無事に終わったと言えるだろう。

そして、慌ただしかった入学初日が終了した。

自分の席で荷物をまとめ、帰る支度をするエクス。そこに一人の少女が近づいてきた。

「ヨッ！エクスクん久しぶり！」

エクスのに机に両手をつき、エクスを真正面から見据える少女。白髪で、彼女の頭部からは角らしきものが生えている。

エクスは数秒間考えるように眉を寄せた後、ハツとして少女を指さした。

「え、レヴィさん…ですか？」

「そうだヨ！エクスクんも雄英に来てたんダ！」

レヴィ・エリファは、元々エクスの幼馴染である。だが、エクスがなんやかんやで中学から一人暮らしを始めた為疎遠になっていたのだ。なんやかんやはなんやかんやである。決してイキった結果家を壊しかけ、両親の大激怒をくらったとかそういう理由では無い。

幼稚園からよく遊んでいた2人はお互いを親友だと公言するほどの中だった。

そんなレヴィに、エクスは雄英に来た理由を語る。

「まあ、ヒーローって稼げるらしいですし」

それを聞いたレヴィは一瞬キョトンとした後、笑いだした。

「アハハ、相変わらず現金だね」

「まあ、世の中金なんで」

エクスの物言いにはひとしきり笑ったあと、レヴィはエクスに手を差し出した。

「とりあえず、これからよろしく!」

差し出されたレヴィの手をエクスは掴む。

「また仲良くやりましょう」

「だね!」

「一緒に帰ります?」

「途中までならいいヨ」

教室を出て、楽しそうに話しながら廊下を歩くエクスとレヴィ。その横を、大きな向日葵の髪飾りをつけた少女が通り過ぎた。

「葛葉〜! 帰るよ〜!」

「いや、俺もう高校生だから。1人でも帰れるって、ねーちゃん」

勝てる自信があるならかかってこい！誰が相手でも受けて立ちます！

個性把握テストが波乱を呼んだ初日を越えた、入学2日目。エクスはギリギリ間に合わず2分の遅刻をしていた。

「遅れました！すいません！」

「お前、入学して2日連続で遅刻とかふざけてるのか？」

教室に飛び込んだ瞬間相澤先生に睨みつけられる。

「で、今日はなんで遅刻した？」

「今日は普通に寝坊しました」

「ふざけてるのか？」

相澤先生にもう一度聞き返され、エクスは瞬時に土下座した。

「すいませんでした」

エクスをしばらく睨みつけた後、相澤先生は小さいため息をつき、髪を掻きながら言った。

「明日も遅刻したら反省文だからな」

「ありがとうございます!」

相澤先生に許され、エクスは意気揚々と席に着いた。

「えー、今日から授業が始まる。ウチの学校の教師は全員実力者のプロヒーローだ。きちんと授業を聞き、学べるところは全部学ぶように。以上」

こうして、雄英高校の2日目が始まるのだった。

午前の授業は必修科目で、様々な授業が行われる予定だ。

そして、記念すべき最初の授業は体育である。

生徒達は、体育服に着替えてグラウンドに集合した。そして、一人残らず固まった。

だが、それも仕方がないだろう。グラウンドに居たのは、化粧をした上半身裸の大男だったのだ。

「お、きたきた。待ってたよくん」

固まったままの生徒達に大男はにこやかな笑顔で近づいてくる。

「私、花畑チャイカ。保険体育の顧問やってます。よろしくね」

未だに硬直したままの生徒達。そんな中、メガネの青年「飯田天哉が歩み出た。」

「雄英高校ヒーロー科1年A組、飯田天哉です!質問よろしいですか!」

「なんだ、言ってみろ」

「何故、先生は上半身の服を脱いでいるのですか！」

「こつちの方がいいからに決まってるんだろが!!」

突然声を荒らげるチャイカ。訳が分からない。

「ちなみに、顔は化粧じゃなくて自前よ。他に質問は？」

チャイカが生徒達を見渡すと、1人が手を挙げた。エクスである。

「お前金髪じゃん。地毛？名前は？」

「あ、エクス・アルビオです。地毛です。質問いいですか？」

「なんだね」

「先生ってどのくらい強いんですか？」

エクスらしい質問だ。その質問にチャイカは即答した。

「いいエロ本があつたら1週間くらいは誰にも負ける気がしないね」

生徒達は絶句した。こいつ、ただのオネエじゃない。もっとやばい存在だ。

「それと、私はオネエじゃなくてオカマです。間違えないように。今日はとりあえず今後の授業方針について説明するから聞いとけよ」

そう言つて、さつさと授業の準備をしだすチャイカ。そのうち、硬直が解けた生徒達が続々と手伝いをしだした。

「私の授業は楽しむのがモットーだからね。たまに授業じゃなくて雑談するけど許して

ね。で、早速聞いて欲しいんだけどさ、一昨日地上波でアイアンマンあったじゃん。めちゃくちゃ面白かったよね。見たやつ居る?」

数人が手を挙げる。

「あー、思ったより少ないね。あ、エクスも見た?」

「あ、はい。見ました。死ぬほどかつこよかったです。プロトタイプとボコボコに殴り合うところがめっちゃくちゃかつこよかったですね」

「あー、あそこねえ。赤髪ツンツン、お前は?」

「え、俺っすか?俺はやつぱ…バトルシーンですね」

「おー、お前もか。やつぱりMARVELは戦闘大事よね。あ、そうだ、この中にMTGやってる奴いる?」

今度は更に少ない人数が手を挙げた。

「またエクスじゃん。好みが合うね。今度勝負しようよ。ボコボコにしてやつからさ。…うんちって面白いよね」

最早、チャイカのトークに誰もついていく事は出来ない。

結局その日、体育の授業は行われなかった。

「あー、疲れた」

エクスは、切島と瀬呂と共に食堂に来ていた。

「あの体育の先生、めちやくちやキャラ濃かったよな…」

「あれがプロヒーローとか信じ難いよな」

「もつとマトモな人いなかったんですかね」

食堂で買った昼ごはんを食べながら3人で喋る。

「そーいやエクス、昨日の話聞かせてくれよ」

トンカツを頬張りながら瀬呂が言う。

「え、昨日なんかありましたっけ」

「とぼけんなって。アルスさんといい感じだったじゃねーかよ」

エクスは考える。確かに昨日、師匠と会話はした。だが、いつい感じになつただろうか。

「実を言うと、俺も気になつてんだよな。お前、アルスさんの事を師匠って呼んでたろ？」

「あー、まあ」

「あれってなんでなんだ？」

エクスは手短かに、2人に試験会場での事と昨日の会話を伝えた。

「それで、なんか勝手にエビオって呼ばれるのが決まっただんですよ。納得いかねえ」

「いや、いいと思うぞ。エクスより呼びやすいし」

「だな。これからもよろしくな、エビオ!」

「うわあ、最悪だ…。言わなきゃ良かった」

「楽しげに話す3人。そこに、影が差す。」

「ネエ、ここ座つてもいい?」

「あ、いいですよ」

焼き魚定食の盆を持ったレヴィが、エクスの隣に座る。

「助かつた。どこも席が空いてなくてサ。いただきま〜ス」

さも当たり前前の様に食べ始めるレヴィと、こちらも当たり前前の様に食事続けるエ

クス。

そんな2人に、切島と瀬呂は理解が追いつかない。

「エクス、お前…いつの間に関レヴィさんと仲良くなつたんだ?」

「ん?…あー、元からですな。幼馴染なんです」

「途中でエクスくん引つ越しちやつたけどネ」

「え、はあ!?!幼馴染と高校で再開とかどんなラブコメだよ!」

瀬呂が悲鳴のようなツツコミを入れるが、エクスとレヴィは顔を見わせて肩をすくめるだけだ。

「そんなこと言われても…」

「ホントのことだから困るヨ」

「息もぴったりじゃねーか！」

荒ぶる瀬呂を切島が抑える。

「マジで仲良いんだな、お前ら」

「親友ですから」「親友ですかラ！」

完全にハモる2人の返事に、切島も苦笑いを浮かべて食事を再開することしか出来なかった。

午後になり皆が待ちに待った授業、ヒーロー基礎学の始まりである。担任教師がオールマイトであり、ヒーローとしての様々な事を学ぶ授業である。

「わーたーしーがー！普通にドアから来た！」

扉を勢いよく開けてオールマイトが教室に入る。それだけで教室は大騒ぎだ。

「オールマイトだ…！すげえや、本当に先生やっているんだな！」

「銀時代のコスチュームだ！」
シルバエイジ

「画風違いすぎて鳥肌が…」

クラスメイトがざわつく中、オールマイトは教壇に立つ。

「ヒーロー基礎学：ヒーローの素地を作る為様々な訓練を行う科目だ!」

オールマイイトが直々に教えるヒーロー基礎学は人気の科目で、雄英生の殆どが取っている科目だ。

「早速だが今日はこれ!戦闘訓練!そしてこれに伴って:、こちら!入学前に送ってもらった『個性届』と『要望』に沿ってあつらえた戦闘服!!」

「おおお!!」

生徒全員から歓声上がる。

「着替えたら、順次グラウンドβに集まるんだ!」

更衣室で、それぞれが自分のコスチュームに着替えてグラウンドにやってくる。

「師匠のコスチュームって思ったよりしょぼいですね」

「はあく?そういうえび先輩こそ、そんなおっきい剣抜えるんですか?」

エクスのコスチュームは、黒のインナーに鎧を着込んだガチガチのフル装備で、なおかつ背中に大剣を背負っている。

それに対して、アルスのコスチュームは左手に持つ魔道書に私服の様な服と金の縁どりがされた黒いフードを被っただけというさっぱりしたものだった。

「使えない剣を背負うわけじゃないですか。師匠馬鹿ですか？」

「馬鹿じゃねーし！ボクのコスチュームは、全部ボクの魔法を補助するものだからこれでいいんだよ！ガチガチに固めすぎても動けないだけだからね」

「あー、師匠へなちよこでしたもんね」

「ぶっ飛ばすぞ!？」

相も変わらず罵り合う2人に、クラスメイトはもうなんの反応も示さない。ただの日常風景として見ているようだ。

「始めようか！有精卵ども！戦闘訓練のお時間だ!!」

全員が集まったのを確認してオールマイトが授業を開始した。

「先生……ここは入試の演習場ですが、また市街地演習を行うのでしうか？」

メカメカしいコスチュームに身を包んだ飯田が手を挙げて質問する。

「いいや、もう二歩先に踏み込む！屋内での対人訓練さ！君らにはこれから敵側とヒーロー側に分かれて2対2の屋内戦を行ってもらう！」

2対2の屋内対人訓練、つまり実際に起こりうるシチュエーションでの限りなくリアルに近い訓練ということである。

僅かばかりの緊張が生徒の間に走る。

「それじゃあクジで対戦相手、そして2人1組のコンビを決めてもらうぞー!」

オールマイトが差し出した箱からそれぞれクジを取っていく。エクスはクジに書かれた文字は『F』。

「師匠ー。師匠のはなんて書いてありました?」

「ボク?ボクは『K』だよ。えび先輩は?」

「俺はFですね」

「そっかあ。お互い、頑張ろう!」

「まあ、俺は頑張らなくても最強ですけどね」

そんな事を言いながら、仲良く肩を並べてモニターを見る2人。

対人訓練は順調に進み、これまでで3組の戦闘が終了した。

「さて、それでは次のペアは一一」

オールマイトがボールを2つ取り出す。そこに書かれていたのは…

「ヒーローチーム、エクス少年、葛葉少年。ヴィランチーム、アルス少女、レヴィ少女だ!」

相手が、決まった。

戦闘開始の前の作戦時間、エクスは例の白髪青年…葛葉と2人でビルの入口前に立っていた。

「……」

「…ツスウー」

そこにはただ、沈黙があるだけだった。お互いがお互いの顔色を伺い、相手が話し出すのを待っている、まさに地獄のような状況。

そんな状況を最初に破ったのは、葛葉だった。

「えーっつと……。なんと、お呼びすればよろしいでしょうか」

「あ、はい、え、ーつと…。クラスメイトなんで、普通にエクスって呼んで貰えれば…。いいと、思います…」

「……エクス」

「…はい。……あとは、エビオとも呼ばれてますね」

「あー…、そっちの方が呼びやすそうなんで、そっちにしますね」

「あ、了解です」

「俺の事は…まあ、好きに呼んでください」

「あ…、わかりました」

「……」

「……」

再び気まずい空気が蔓延しようとした時、戦闘開始の合図がなった。

「…どうします?」

「あー…、正面突破で」

「ですね」

2人でビルに足を踏み入れる。その瞬間、目にも留まらぬ速さで蹴りが放たれた。

「一一ッ!」

咄嗟にエクスが受け止める。そこへ、今度は火球が飛んできた。

「甘え!」

葛葉がこれを素早い蹴りでかき消す。

「やっぱり、正面突破してくると思ったよ」

「よっト…」

僅かな気配と共に暗がりから聞こえたその言葉。

それとほぼ同じタイミングで瞬時にエクスに蹴りを入れていた影が後退した。

「核はボクが守ってるよ。ここまで来れるかな?」

そう言葉を残し、暗がりの影が消える。残されたのはエクスと葛葉、それに2人の行く手を遮るレヴィだけだった。

「葛葉さん、レヴィさんは俺がやります」

「了解、じゃあ俺はもう1人の魔法使いやるわ」

エクスがレヴィの前に立つ。

既に人の気配が消えた暗がりには葛葉が走ろうとしたところで、

「行かせると思ウ？」

レヴィが葛葉に向かって襲いかかった。

だが、その一撃は再びエクスによって阻まれる。

「やらせると思いますか？」

「A B O、頼んだ！」

対人訓練の幕が上がる。

葛葉さんとタッグマッチ!師匠とレヴィさんをボコボコにします!

レヴィの拳を受けた鎧がギシギシと音をたてる。

「ハアッ!」

レヴィの首元を狙ったエクスの上段蹴りは後ろへ飛ぶことで避けられた。

「危なかつタ、ストレスだったネ」

「当たってくれてればありがたかったですけど」

軽口を叩きあう2人。だが、その瞳は冷静に相手を見つめていた。

小さい頃からの幼馴染である2人はお互いの個性や動きを熟知している。その為、下手に動く逆と逆に叩かれる可能性があるのだ。

「……ッ!」

レヴィが足を1歩引く。攻撃が来ると感じたエクスは身構えて一

「A a a a a ~♪」

辺りに響き渡るレヴィの声を聞いた瞬間、大きな脱力感がエクスを襲った。

「隙あり!」

「ぐっ……！」

エクスの胸元めがけての飛び蹴りを、腕を交差させて防ぐエクス。だが、先程とは違い後ろへ吹き飛ばされた。

「そのままやつても勝ち目薄いかう。多分、パートナーの方も筋力が落ちてると思うヨ？」

レヴィの個性による敵へのデバフ。恐らくはこのフロアにだけ響く様に声を出したのだろう。

全身の筋力が低下しているのを実感しながら、エクスは拳を構える。

「逃げないノ？」

「正直逃げたいですけど、葛葉さんに頼まりましたし。それに」

エクスはレヴィを見つめる。幼い頃から知っているこの少女とは何度も喧嘩をしてきている。

本当にヒーローになる為にも、最初に超えなければならぬ壁は彼女だとエクスは考えていた。

「レヴィさんには、負けたくないのよ」

しつかりとレヴィを見据えたまま、にやりと笑うエクス。

それを見たレヴィも笑みを浮かべた。

「ボクも、エクスクンには負けたくない!」

2人の拳が衝突した。

XXXXXX

「つくそ、ビーなってんだよ」

ビルの階段を登りながら葛葉がボヤク。エクスに後ろを任せて走り出して少し経った時、急に全身の力が抜けたのだ。

時間帯も合わせて考えれば、葛葉は今、少し強い程度の人間だ。

「逃げんな俺、ABOが頑張ってるぞ…」

2階には核らしきものは無い。階段を上る度、葛葉の体力は削られていく。

「…見つけた」

「見つかったね」

3階、階段から最も離れた部屋に核はあった。そして、それを守るように立ち塞がるアリスの姿。

「レヴィちゃんの個性で弱体化してるでしょ?降参しなよ」

「誰がするか、馬鹿。言っとくけど、俺が頭を下げるのは家族に対してだけだからなあ

！」

アルスに向かって走る葛葉。

《《サンダー》》

「……」

咄嗟に体を捻る。次の瞬間には、葛葉がいた場所に雷光が走っていた。

「あつつつぶねえ！手加減無しかよ！」

「速く降参しないと、大怪我しますよ？」

魔道書を開いたアルスが葛葉に向かって右手を伸ばす。

「上等だア！かかって来いよオ！」

《《フアイア》！》

X X X X X

ミシリ、と鎧が軋んだ。レヴィの拳を受け止めた胸の装甲に軽いヒビが入ったよう
だ。

「マダマダ！」

「づっ……」

顔を狙った回し蹴りを左手で防ぐ。が、踏ん張れずに吹き飛ばされる。

口に溜まった血を吐き出して立ち上がるエクス。それを見たレヴィが、問いかける。

「『剣』、使わないノ?」

戦いが始まって、エクスは1度も剣を抜いていない。それも、抜こうとしてレヴィに阻止されたわけではなく、抜く素振りすら見せていないという意味だ。

レヴィの質問にエクスはさらっと答える。

「基本的に使ったことないので、振り方とか分かりません」

「エエ!?!」

衝撃の発言に驚くレヴィ。そこへ隙ありとばかりに殴り掛かるエクス。

「つと、今のエクスくんには負ける気はしないヨ?」

レヴィはエクスの拳を難なく受け止めた。

「流石にやばいな…」

ずっと肉弾戦を続けていた為エクスはかなり疲弊しており、それがさらにエクスを弱めていた。

「ハア!」

レヴィがエクスの胴体を蹴り上げる。

「かはっ…」

防ぐことも叶わず、エクスはビルの壁に叩きつけられた。そのまま、ずるずると下に落ちる。

「エクスくん、降参する気はある？」

「あると思いますか？」

「だよネ」

ゆつくりとレヴィが迫る。

「(せめて、剣くらい使えたらよかった…)」

X X X X X

「《ウインド》」

「づう…！」

風の刃が全身を切り裂く。思わず、葛葉は倒れ込んだ。

今の葛葉に避ける気力は残っていない。出来るのは、ただひたすらに前に進むだけだ。

「降参してよ。じゃないと、本当に死んじゃうよ」

これは、アルスなりに心配しての発言なのだろう。しかし、葛葉には受け入れられな

い言葉だった。

「最初の女子がこつちに来てないって事は、まだA B Oが抑えてるって事だ。なのに俺が降参なんかしたら、A B Oに恥かかせるだけじゃねえか……!」

ただエクスの努力に報いるためだけ、それだけの為に葛葉は再び立ち上がる。

「それに、ここで降参したらまた説教されちゃうからな」

葛葉の家族は、仲間への裏切りを許さない。そんな、厳しくて優しい家族なのだ。

「あんまり痛ぶるつもりは無いし、もう終わらせるよ」

アルスの持つ魔道書が輝き出す。

「……ッ! 負けんのか、俺……!」

「《メガサンダー》!」

葛葉の体を雷が包み込んだ。

X X X X X

「エ?」

レヴィが戸惑いの声を上げる。無理もない。決着をつけるために放った蹴りがエクスの剣に防がれているのだから。

だが、一番戸惑っているのはエクス自身だ。身体が勝手に剣を抜いてレヴィの攻撃を防いだのだから。

「…っ！危、ない！」

エクスの剣撃を何とか回避して後ろへ下がるレヴィ。頬に、浅い傷が出来ている。

剣を支えにして、エクスが立ち上がった。

どういう事だ？エクスは剣が使えないのではないか？嘘をついたのか？レヴィの頭に次々と疑問が浮かぶ。

だが、エクスが満身創痍なのに変わりはない。あと一撃を入れればレヴィの勝ちだ。

レヴィがエクスに向かって向かって行き、気がつけば目前に剣が迫っていた。

「……………!?!」

慌てて後ろに戻る。エクスは追撃をしなかった。

そこで、違和感に気づいた。何故か、エクスは剣のみでしか攻撃をしてこないのだ。もしも剣以外でも攻撃ができるなら、今避けた瞬間に蹴られて隙を作られていたはずなのだ。

「エクスクんの『個性』カ…」

「やっぱりそうなんですかね？さっきから腕が勝手に動いてるんですよね」

不思議そうに自分の腕を見つめるエクス。

何故、今更剣を使えるようになったかは分からない。だが、チャンスには変わらない。

「レヴィさん。正直、僕はもう殆ど動けません。なので、勝負をしましょう」

剣を肩に担ぎ、指を立てるエクス。その提案に、レヴィは首を傾げる。

「お互いに一撃ずつ入れあつた後、倒れたほうの負けでどうですか?」

エクスからの提案は、レヴィにとって圧倒的に有利なものだった。

既にボロボロなエクスに対して、レヴィはノーダメージと言つてもいい。

故に…

「いいヨ。勝負、受けル」

「ありがとうございます。じゃあ…レヴィさんからどうぞ」

また、エクスから予想外の言葉が飛び出した。

「本当にいいノ? エクスくんが先じゃなくテ」

「いいですよ。来てください」

手を広げるエクス。レヴィは軽い深呼吸をした後、エクスに向けて走り出す。

そして、勢いを乗せたパンチをエクスの胸に突き刺した。

鎧が割れ、肉体そのものを殴った感触を得る。

…だが、エクスは倒れなかった。

「じゃあ、次は俺の番ですね」

そう言って、エクスは剣を捨てた。意外すぎる行動に、レヴィは戸惑う。

「レヴィさんを本気で切る気にはなれませんでした」

レヴィの体を、エクスは押し倒した。レヴィの目の前に、エクスの顔がある。

「…これで、二人共脱落です。良いですよね？」

息がかかる程の距離でそう言われ、思わずレヴィは頷いた。

すると突然、糸が切れたようにエクスがレヴィに倒れ込んだ。もちろんレヴィは慌てふためく。

「え、エクスクン!? ボクたち、そんな関係じゃないよネ!? 落ち着いテー!」

だが、エクスはピクリとも動かない。よくよく耳を澄ませば、微かに寝息が聞こえる。

「…全ク。ビツクリシタ〜」

エクスの下から、這い出る。そして、眠るエクスの頭を太ももに乗せた。

「エクスクンは変わってないネ」

思い出すのは幼い頃の記憶。誰かと喧嘩をする度、最終的には泣いていたエクスの事。

「皆が痛がるのを見たくない」

そう言って自分で殴ってつけた傷を鼻を鳴らしながら手当てして、最後は泣き疲れて

寝てしまう。あの頃からこうやって膝枕をしていた気がする。

「お疲れさま、エクスクン」

「(この後みんなに冷やかされるかな?)」

そんなことを考えながら、レヴィはエクスの髪を撫で続けていた。

X X X X X

葛葉がいた場所から煙が立ち上る。だが、アルスは気づいていた。この煙からは、何かを焼いた匂いがしない。つまり…

「戻ってきたアー!」

煙の中から葛葉が飛び出す。傷口からはシューという音と共に水蒸気が上がっている。

「つー! 《ファイア》! 《ウインド》!」

魔法が葛葉に傷をつけるが、数秒で回復している。身体の機能が大幅に低下していた為に発動しなかった再生能力が発動し、葛葉の身体を癒していく。

更に、ビルの中には太陽の光が届きにくい。その状況も微力ながら葛葉に力を与えていた。

「意味ねーよ！俺にお前の魔法は通用しねえ！」

「《ギガサンダー》！」

巨大な雷が、周りを巻き込んで葛葉に命中した。だが、その傷すらもどんどん回復していく。

「俺たちの、勝ちだ——！」

葛葉の手が核に届いた。

エクスが目を覚ますと、太陽が既に落ちかけていた。薬品や消毒の匂いから察するに、どうやら保健室に運ばれたようだ。

体を見下ろす。傷が全て塞がっていた。

ぼーっと天井を眺める。あれだけ戦ったせいか、何も考える気力が起きなかった。

しばらく天井を眺めていると、誰かが保健室に入ってくる音がした。

「失礼しまーす。…あ、えび先輩。起きてたんだ」

「…師匠」

カーテンを開けて入ってきたのはアルスだった。

「さっきの勝負、えび先輩達の勝ちだったよ」

「そうですか」

「レヴィちゃんを押し倒したんだって? えび先輩ってえつちだなあ」

「誤解です。あれしか思いつかなかったんです」

「…元氣、無い?」

「いや、なんも考えられないだけです」

エクスの返事を聞いたアルスが吹き出す。

「えび先輩はなにも考えてないのが普通じゃないんですか?」

「流石に泣きますよ?」

顔を見合わせて、クスクスと笑う。

「えび先輩、いつになったら戦い方教えてくれるんですか?」

アルスの言葉に、エクスは少し考える。

「そんな話、してましたっけ?」

「してたわ! 入試の時に!」

確かに、そう言われればそんな話をしたような気がしないでもない。

「明日からでいいですか? 今日には疲れたんで」

「しよーがねーな」

腕を組んでふんぞり返るアルス。エクスはちよつとイラツとした。

「顔がでかいと態度もでかくなるんですね。初めて知りました」

「なんだとう!?! もういつペン言ってみろ?」

「あーししよはかしこいなー」

「お前みたいなの弟子は破門だ!」

いつも通りの貶しあつていると、少しずつエクスが思考がまとまってきた。

「そろそろ帰る準備しないと」

ベッドから起き上がろうとすると、アルスが自分の横を指さした。

「もう荷物は持つてきてるよ」

エクスは少しキョトンとした後、口角を上げて下を向いた。

「うわあ、めちやくちやありがてえ…!」

「今日は疲れてるだろうし、僕がえび先輩の家まで送るよ。いいよね?」

「えー…。師匠、泥棒とかしません?」

エクスの言葉に、アルスはベッドを殴りつけた。

「しねーわ! ボクをなんだと思ってるんだ!」

「じゃ、お願いしまーす」

「最初からそう言えよ、全く…」

「うーん? 思ったより弱いなあ…。もつと強いヒーロー居ないかなあ…。オールマイイトとか」

赤く染まった路地裏で、ナイフを持った1人の女性が呟くように言葉を紡ぐ。すると突然、虚空に向かってナイフを投げた。

「あれ? おかしいな…当てた筈んだけど…」

女性の目線の先には、いつの間にかモヤに包まれた男が立っていた。

「これが、先生が言っていた…」

「ヒーローに通報しますか? 通報するならその間は生かしてあげますよ?」

女性がナイフを指で回しながら問いかける。モヤの男は、とんでもないというふうに手を振った。

「私は、貴女をスカウトに来たのです。SS級ヴィラン、『鈴原るる』さん」

男の言葉に、女性一瞬鈴原るるは首を傾げる。

「スカウトってどういう事ですか?」

「そのままの意味です。今度、我々は雄英高校を襲撃します。そこで貴女の力をお借りしたく」

丁寧に頭を下げる男に、鈴原が問いかける。

「雄英高校って、強いヒーローは居ますか？」

鈴原の質問に、モヤの男は嬉しそうに答える。

「ええ居ますよ。平和の象徴、オールマイトが」

途端に、鈴原の目の色が変わった。目に光が宿り、表情も格段に明るくなった。
「やります！オールマイト…強いんだろなあ」

その場でクルクルと回る鈴原に、男がモヤを広げる。

「ようこそ《敵^{ヴァイラン}連合》へ。歓迎します」

鈴原はモヤに向かって歩を進めた。

昨日は疲れたので今日は平和に過ごします。

対人訓練の次の日。ギリギリ遅刻を免れたエクスはドヤ顔で机に座っていた。

「さて、ホームルームを始める。…なんだエクス、その顔は」

「いえ？なんでもないですよ？」

偉そうな態度のエクスに対し、相澤先生が小さなため息をついて言った。

「言っておくが、遅刻しないというのは最低限の常識だ。それが出来たくらいで調子に乗るな」

容赦なく浴びせられた正論に、エクスの中のイキリエビはあえなく撃沈したらしい。エクスは二度と遅刻をしないと心に誓った。

「話を戻すが、今日は君らにこのクラスの学級委員を決めてもらおうと思う」

『学校つばいのきたー！！』

クラスの全員が我先にと手を挙げる。もちろんエクスも最前線で手を挙げている。

エクスが必死にアピールをしていると、後ろから押される感覚があった。

手を挙げたまま振り返ると、前に来ようとして詰まったアルスがそこにいた。

エクスの背中と後ろの人の体で顔を挟まれた姿に、エクスは思わず吹き出してしま

う。

「え、えいへんばい！あいわあつてんあよ！」

「し、師匠……やめて……。お腹痛い……」

ゲラゲラと笑うエクススの足を蹴りたいが、他の人に当たった時の迷惑を考えて足をかせないアルス。

「静粛にしたまえ！」

どんちゃん騒ぎだったクラスが、その一言で静かになった。

声の発生源を辿れば、飯田の姿。

「多を牽引する責任重大な仕事だぞ……！『やりたい者』がやれるがやれるものではないだろう！」

声を張り上げ、手を挙げていた生徒達を叱責する。

「周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務……！民主主義に則り、真のリーダーを皆で決めるというのなら、これは投票で決めるべき議案!!」

飯田の言い分は確かに正論だ。誰も反論出来ない。だが、全員が飯田に突っ込む事は出来た。

「そびえ立ってんじゃねーか！何故発案した！」

最終的に、委員長は緑谷、副委員長は八百万となった。

ホームルームが終った後の、5分間の休憩時間。エクスはアルスの机で不貞腐れていた。た。

「絶対俺だと思っただけだなー。俺ほどの適任は絶対この世には居ない。言い過ぎた。50人くらいは居るわ」

頬杖を着いてブツブツと文句を言うエクスを見て、アルスは額に青筋を浮かべた。

「えび先輩、なんでわざわざボクの席まで来るの？」

だが、エクスは全く聞いていない。アルスの机に顔を伏せ、うんうん唸っているだけだ。

この頭を思い切り叩いてやるか。そう思って教科書を高く掲げたところで、突然エクスが顔を上げた。

「師匠はなんで俺に入れなかったんですか？舎弟の俺に施しとか与えるのが師匠つてもんじゃないんですか？」

いかにも、それが普通のようにそんな事をのたまわるエクスに、アルスは思わず言い返した。

「いやいやいや、普通は弟子が師匠に入れるものでしょ。尊敬してるならさっ。」

やれやれと首を振るアルスに、エクスは意味がわからないとでも言うような顔をし

た。

「師匠って面白いこと言いますね。師匠の尊敬出来るところなんて、せいぜい顔が大きいところくらいでしょ」

「そんなこという奴に入れるわけないだろお！」

アルスは改めて、教科書を振りかぶってエクスの頭に叩きつけた。

だが、エクスの個性は肉体強化だ。エクスの頭に叩きつけた教科書の方が折れ曲がり、シワになってしまった。

「教科書」ときで俺が痛がるわけないじゃないですか。師匠ってほんとに馬鹿ですね」

口元に手を当て、小馬鹿にしたような表情のエクス。アルスは個性を使用した。

「うげえええ！」

個性で起こした風に吹き飛ばされて自分の席に激突するエクス。アルスはしてやつたりという風に笑う。

「これに懲りたら、あんまりボクの席に近づかないようにしろよお？」

プププと笑うアルスを見て、エクスはぽつりと呟いた。

「あの人、最悪だ……」

2時限目を終えた休み時間、エクスは雄英高校サポート科の校舎に来ていた。

なんでも、対人訓練でポロポロになったコスチュームをサポート科の生徒3名が修理してくれているとのこと。

「失礼しまーす」

指定された部屋の扉を少しずつ開ける。

部屋を見渡せば、部屋の右端の方で2人の女生徒と1人の男子生徒がエクスのコスチュームを前に作業がてら話し合っていた。

「いや、やっぱりこの剣は絶対ライトセイバーみたいなのレーザーソードにした方が持ち運びやすくてロマンがありますよ。改造しましょう」

「いや、勝手に剣の形変えたらだめでしょ。怒られちゃうじゃん」

「社長、言われたとおりの修理しましよ?」

「ええー、じゃあ剣が変形して他の武器になるのは…」

「社長?」

「あ、はい、すみませんでした」

両手に花とも呼べる雰囲気に、エクスはやる気を失っていた。このまま気づかれないように帰ってしまおうと振り返る。

「すみませーん。私達に何か用事ありましたか?」

扉に向かって歩き出していたエクスの中背中に例の男子生徒の声がかかった。

エクスは振り返り、答える。

「いや、なんでもありません。間違えました」

白々しい嘘だ。

だが、そんな嘘も一瞬で見破られてしまった。

「あれ? エクスさんですよ? このコスチュームの…」

「あ」

銀髪と黒髪が半々になっている女生徒の問いかけで残り2人も思い出してしまったらしい。

「私、雄英高校サポート科所属加賀美ハヤトと申します。えっ…と、エクスさん…で宜しいでしょうか。ウチになんの御用でしょうか」

咳払いをして、姿勢を正す男子生徒一一加賀美ハヤト。

端正な顔立ちに綺麗な茶色の髪は薄く笑みを浮かべてエクスを見つめている。

「いや、その…コスチュームの修理をしてくださっているときいたので、お礼を…来
ました……」

相手が初対面故に陰キヤを發揮するエクスに、加賀美は笑顔を浮かべる。

「わざわざすみません。見てのとおり少しずつ改良を加えながら修理をしているので、明日の朝まで待って頂けると幸いなのですが…」

「あ、大丈夫です。それでお願いします」

ペコペコと頭を下げあう2人。後ろにいた女生徒2人は、いつの間にか作業に戻っていた。

女生徒の方をチラリと振り返り、少し緊張した様子で加賀美がエクススの耳元に顔を寄せた。

「すみません、少しご相談があるのですが…」

加賀美から、「次の休み時間に屋上まで来て欲しい」と頼まれたエクススは首をかしげながら階段を登っていた。

屋上の扉を開けると、屋上の段差に腰掛ける加賀美の姿。

「あ、エクスさん！来てくださったんですね！」

「はい…、来ましたけど。話ってなんですか？」

首の後ろに手をやりながらエクスが質問する。それを待っていたかのように加賀美はポケットから出したプリントを広げた。その顔は冒険に心を踊らせる少年のようだ。

「これ、エクスさんのコスチュームの改造案なんですけど見てみてくれませんか!」
加賀美の言う通り、確かにプリントには細かくエクスのコスチュームの改造案が載っていた。

よりごつくなつた鎧に変形する剣。果てにはロボットもどきまで様々な改造案が描かれている。

エクスはそれを見て――

「うわ、めっちゃくちゃ厳ついじゃないですか!こんな絶対負けませんよ!うわー、やべえ…めっちゃくちゃ、もう死ぬほど強そうじゃん」

同じく少年のような瞳で加賀美の改造案を眺めていた。

「ですよね!エクスさん的にはどれが気に入りました?」

加賀美がワクワクとしたオーラを放ちながらエクスに聞くと、エクスは即答で6メートルほどのロボットを指さす。

「俺はこの、超絶いかしたロボットですね。ただ火力でゴリ押しだけで勝てそうじゃないですか」

エクスの答えを聞いて、加賀美は拍手をしながら頷いた。

「流石エクスさん。エクスさんは分かかってらっしゃる。やっぱりこういうロボットは男のロマンがありますよね!」

加賀美の言葉にうんうんと頷きながら、エクスが喋る。

「めっちゃめっちゃわかります。俺も昔はロボット作ってたんですよ。材料にこだわって、死ぬほど緻密な作業とかして。でも、最後の最後で設計にミスがあるのが分かって泣く泣く溶かしたんですよね」

「えっ…」

エクスの言ったことに加賀美が目を見開く。まさか、エクスにそんな過去があつたなんて。

慰めの言葉をかけようとした時、エクスがサラリと言った。

「ロボットなんて作ったことないですけど」

場に微妙な空気が流れた。

「……とりあえず、エクスさんはコスチュームの改造に賛成ということで宜しいですか？」

「はい、大丈夫です」

「では早速制作室に向かいましょう！」

「駄目です」

制作室に戻り、改造案を2人の女生徒に見せつつエクスの承諾を得たことを説明する加賀美。

だが、帰ってきたのは2人が予想だにしない言葉だった。

「え……夜見さん、どうして……」

腕を組んで仁王立ちをする女生徒、夜見れなに加賀美は子犬のような目を向ける。

「理由はいくつかあります。まず、1つ目は時間がかかることです。コスチュームを改造している間にコスチュームを使う授業があったらどうするんですか」

「そ、それは……一時的に補強するなどして壊れにくくしてから」

加賀美が答えようとするが、いい答えは見つからない。そこへ、さらに追い打ちをかけるように声がかけられる。

「社長ー、材料も全然たりまっせーん」

「葉加瀬さんまで……」

教室の奥からパーツを持って現れた2人目の女生徒、葉加瀬冬雪が夜見に加勢する。

「学校の材料もなるべく使わないようにしないとイケないし、逆にこれだけの材料を自分で買うとコストがかなりかかりますよ？」

社長と言えど、使えるお金は有限ですよね？と葉加瀬に言われ、加賀美はぐうの音も出ない。

「社長、確かに社長の気持ちはわかりますけど、出来ないことは出来ないんです。社長なら、諦めることも出来ますよね？」

優しく諭す夜見に加賀美は何かを言おうとして、大きくため息をついた。

「わかりました…。すみません、エクスさん。コスチュームの改造はまた今度というところで…」

「あ、わかりました。えっと、それじゃ失礼します」

エクスが制作室を出る時、ガツクリと項垂れる加賀美とそんな加賀美を慰める2人の姿が見えた。

昼休憩に入って、食堂を歩くエクス。今日のメニューは生姜焼き定食だ。

どこに座ろうかと席を探していると、見覚えのある白髪が目に入る。

「葛葉さん、ここに座っていいですか？」

「あ、どうぞどうぞ」

葛葉の対面に座るエクス。

「あ…、その、大丈夫？体調とか…」

「あ、大丈夫です。怪我とかも全部治りましたし」

時々でもりながらも会話をするエクスと葛葉。

「あん時はまじで助かったわ。もう少し遅かったら負けてたかなー」

「いや、思ってた3倍くらいレヴィさんが強くてですね。相打ちになったんですよ」

「あー、だから終わった後にABOがぶっ倒れてたのか」

「ぶっ倒れては…無いです。ちよつと寝てただけですね」

「いやいやいや、あれは倒れてたって」

昼食を取りながら談笑する2人。話題は次々に変わり、好きなゲームや好きな漫画の

ことで盛り上がっていた。

「ABOさあ、今度一緒になんかゲームしようぜ」

「いいですね、それ。何します?」

「えー、なんかPUBGみたいなゲームでも」

突然、校舎中に大音量の警報が鳴り響いた。

「うえ?!なんだこれ、めちやくちやうるさいんだけど!」

「フハハハ、葛葉さんめっちゃビビるやん」

耳を押さえて慌てふためく葛葉をエクスが笑う。

「いや、こんな絶対ビビるって。逆になんでABOはビビんないわけ?」

「いや、これでも死ぬほどビビってますけどね？」

『セキユリティ3が突破されました。生徒の皆さんは、すみやかに屋外へと避難して下さい。繰り返しますー』

その場にいた全員が戸惑う中、そんな放送が流れた。エクスと葛葉は顔を見合わせる。

「これ、なんかやばそうじゃないですか？」

「絶対やばいな」

意見が一致するやいなや、2人は全速力で出入口に向かって走り出した。辺りにはおなじく逃げようとする大量の人。

「やばい、人多すぎて前に進めねえー！」

「葛葉さんが前を押し退けて進んでください。僕がその後ろをついてくんで」

「他力本願じゃねーか！」

少しでも前に進もうとしながら押し合い圧し合いしていると、葛葉の頭上を何かが飛んで行った。

「うわ、ずりい！上から行くとか反則だろ！」

上を飛んでいく飯田に葛葉が怒声を上げるが、葛葉の予想と違い、飯田は扉上に張り付いた。

「皆さん…大丈夫ー夫！ただのマスコミです!!? なにもパニックになることはありません！大丈夫ー夫！」

飯田の声のパニック状態の食堂の隅々まで響き渡る。これによって、生徒達は冷静さを取り戻した。

その後、学級委員長が緑谷から飯田に移るのだがそれは別の話。

「んお、どした？ABO」

「いや、なんかめちやくちや嫌な予感がするんですよ。もしかしたら、パズドラに50000くらい課金して爆死するかもしれないですね」

「うわ、それはきついわ。ドンマイ」

「いや、まだ！まだ決まったわけじゃないですから！」

1人でUSJほど虚しいものは無いですよ。僕は行きましたけど。

警報騒ぎの翌日。みんな大好きヒーロー基礎学の授業が組み込まれた日であり、全員が期待に胸を踊らせていた。

「今日はどんな授業なんだろうな、爆豪！」

「知るか、ボケ」

「うわ、この人めちやくちや口悪っ」

「んだとクソ金髪野郎！」

ホームルーム前の時間、エクスは切島、爆豪と話していた。

ちなみに、今日は葛葉と登校したので遅刻は全くしていない。なんでも、葛葉は両親がプロヒーローであり、遅刻に厳しいらしい。

「前回は屋内の対人訓練だったからな。今回は制限時間付きの救助訓練とかじゃねえのか」

「おお！確かにありそう！流石爆豪！」

「うっせえ！普通だわ！」

エクスの中の頭の中で、爆豪はツンデレに認定された。

「エクスはどう思う?」

切島の質問に、エクスは少し考える。

しかし、特に思いつくことは無かった。

「いや、わかんないですね。まあ、わかっても面白くないんで」

「ああ、それは確かにな」

意地を張っただけのエクスの言葉に切島が共感の意を示したことに、エクス自身が内心一番驚いていた。

「てめえら、いい加減席に戻れや!」

「おお、もうすぐホームルームか。サンキュー爆豪!」

「感謝しといてあげます」

「勝手に感謝してんじゃねえ!」

叫ぶ爆豪を背に、エクスは席に着くのだった。

午後になり、ついにヒーロー基礎学の時間が始まった。

今回はオールナイトではなく相澤先生が授業の説明を行った。どうやら、今回は教師4人で授業を見るらしい。

そして、相澤先生が今日の授業内容を発表する。

「災害水難なんでもござれ人命救助訓練だ」

人命救助、それはヒーローとして最も重要な任務である。

ヒーローはヴィランにせよ災害にせよ必ず人命救助を第一として動く。

つまり、人命救助訓練はヒーローになるために特に大事な授業の1つなのだ。

相澤先生の説明を聞き、それぞれが教室を出る。今回の授業でもコスチュームを使うらしい。

「おお、なんかかっこよくなってる」

エクスが、修理されたコスチュームを見て子供のような声を上げた。

コスチュームの鎧とインナーには、以前は無かった青や赤、金といった装飾が追加されていた。

また、剣もより英雄らしい新たなものに変わっていた。

「これめっちゃかっこいいわ。加賀美さんまじでナイスすぎる……!」

派手になったコスチュームを着てニコニコしながら、みんなと一緒にバスに乗り込む。

席は特に決まっていなかったので、エクスは葛葉と切島のあいだに座った。

「で? パズドラ爆死したの?」

「いや、まだ引いて無いです。今から引きましようか？」

「お、マジで？」

葛葉がエクスの肩に腕を乗せてもたれかかってくる。エクスはスマホを起動し、パズドラのアプリを開いた。

「お前ら、授業中に平気でゲームとか肝が座ってんな…」

苦笑いをする切島に2人は即答する。

「だって暇じゃん（じゃないですか）」

「切島さんも一緒にABOが爆死するところ見ましようよ」

葛葉の誘いに、切島も少し緊張した様子でエクスのスマホを覗き込む。

2人の視線に晒され、エクスは震える指でモンハンコラボのガチャを引く。

結果は…

「うわああ、またヤマツカミだー！」

「よっしやああああああ！」

エクスが頭をかかえ、それを見た葛葉がガッツポーズをする。切島はなんとも言えない顔でエクスの肩に手を置いていた。

「ABOさあ、芸人とかになつたらぜってー売れるつて」

「絶…対に嫌です。芸人とか売れないと給料貰えないじゃないですか」

騒ぐ2人を乗せ、バスは目的地に到着した。

『すっげえ！USJかよ！』

辿り着いた演習場を見て、クラスの何人かが大声を上げた。

それを聞いたエクスがサラリと言う。

「いや、USJよりも建物が少ないですね。あと、テーマパーク特有の食べ物の匂いもしませんね」

エクスの言葉を聞いたクラスメイトが、一斉にエクスに向かって振り向いた。

「ABOってUSJ行ったことあんの…?」

「ありますよ。何回か行きましたね。自分用の杖も持ってます」

それが?というような声音に、クラスメイトのほぼ全員が戦慄した。こいつ、こう見えてリア充なのかもしれない。

確かに性格は多少ひねくれているが、見た目が良い上にいい身体をしている。モテないわけが無いだろう。

「アルスちゃん、どうしたノ?」

「あいつ、弟子の癖にボクより上とかふぎげやがつてえ…!」

ギリギリと魔導書を握る手に力を込めるアルス。

その横で、瀬呂が1歩前に出た。

「だ、誰と行ったんだ？」

全員の思いを代弁した質問に、エクスは首を傾げて答えた。

「1人ですけど。当たり前じゃないですか。俺に彼女とか居ると思いませんか？」

全員の体から力が抜ける。特に、峰田実とアルスは安堵の表情を見せた。

「お前ら、お喋りはそろそろ止めろ」

相澤先生がそう言うのと、場が一気に静まった。

「こちらが今日、君らの授業を見てくれる先生方だ」

片方は、宇宙服のようなコスチュームに身を包んだ教師。もう片方は、メイド服に特徴的な髪型の…

『花畑先生じゃねーか！』

「なんかその言い方だと、私の頭がお花畑みたいで腹立つな。チャイカ先生と呼べ」

体育教師、花畑チャイカであった。

「面白そうなことやってるなーって思ったからこそここに参加しちゃった。雄英は自由が売りだからね」

ウインクを決めるチャイカ。そんなチャイカを置いて、宇宙服のヒーロー、13号が説明を始めた。

「水難事故、土砂災害、火事…エトセトラ。あらゆる事故や災害を想定し、僕がつくった

演習場です。その名も、ウソの災害や事故ルーム！」

そこから、13号の演説が始まった。個性は使い方を間違えれば人を傷つける。ヒーローは、個性を慎重に使わなければならないという話だった。

「以上……静聴ありがとうございます」

13号が頭を下げると、ワツと拍手が起こった。

「やばい、めっちゃいい話だ……」

エクスも類に漏れず拍手を浴びせていた。

「一かたまりになって動くな！」

突然、相澤先生が叫ぶ。その視線の先には、《闇》と呼ぶべき黒いモヤが揺らめいていた。

そのモヤの中から、ぞろぞろと人間が出てくる。

「何だアリアヤ？また入試みたいなもう始まったんぞパターン？」

切島が困ったような声を上げる。

ふと、先頭に立つ男とエクスの目が合った。エクスの体にぞわりと鳥肌が立つ。

「動くな、あれは……」

相澤先生がゴーグルをつけて飛び出す。

「……敵だ！」

相澤先生の首元に巻かれていた包帯を使って戦闘を開始した。

「13号、花畑、避難開始！学校に連絡試せ！センサーの対策も頭にある敵だ。電波系の個性が妨害してる可能性もある。上鳴お前も個性で連絡試せ！」

「ツス！」

敵の個性を打ち消し、包帯を利用して敵を殲滅していく。

緑谷が相澤先生の戦闘スタイルを心配するが杞憂に終わり、生徒達が続々とその場を離れていく。

だが、エクスと葛葉はその場を動かなかった。2人の視線の先には先程のモヤ。

「何をしてるんだ、二人共！早くこっちへ！」

「……」

13号の声で2人の気がそれた瞬間、モヤは生徒達の目の前に移動していた。

「つ……やばい！」

「くっそ、プレミした……っ」

葛葉とエクスが走り出す。既にエクスは剣を抜き、葛葉は翼を生やして加速していた。

「初めまして、我々は敵連合。僭越ながらこの度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせていただいたのは《平和の象徴オールマイト》に息絶えて頂きたいと思つてのことです」

モヤの言葉で、生徒達の間になかならず動揺が走る。

『オールマイトを殺す』その一言を発するのがどれだけ難しいか、それはこの世界が証明しているからだ。

「つと、危ない危ない」

切島と爆豪の攻撃が難なく躲かれる。

「生徒といえど優秀な金の卵。さすがに肝が冷え…っ!？」

跳躍して一気に距離を詰めたエクススの剣から、確実な手応えが伝わってくる。

よろめくモヤ。そこへ葛葉が加速に加速を重ねて運動エネルギーを散々溜めた蹴りを叩き込んだ。

「ナイスウー！」

「つし、これで挽回…!？」

肩を並べる2人の目の前で、モヤが起き上がる。

「子供と見て侮りすぎたようですね。やはり雄英高校の生徒なだけはある。なので」

爆発的にモヤが増え、辺りを埋めつくしていく。どんどん暗闇に包まれる中、誰かが駆け寄ってくるのが見える。

咄嗟に、エクスは葛葉を後方に突き飛ばした。

「散らして、殺す！」

全てが闇に閉ざされる瞬間、葛葉の叫びが聞こえた。

闇が晴れる。辺りを見回すとそこらじゅう火の海だ。そして何故か、モヤの範囲外にいたはずのアルスが隣に居た。

「…なんでいるんですか？ 焼きまんじゅうになりたいんですか？」

「えびせんばい、状況分かってる？」

アルスに言われて周りを見れば、ワラワラと現れたヴィランが2人を取り囲んでいる。

「やばいですね。師匠が囷になって僕を逃がしてください」

「はあー？ お前が囷になれよ」

いつも通りに罵りあう2人だが、その視線は油断することなく周囲を見回していた。「死ねえ！」

ヴィランの1人が飛びかかる。それを皮切りにヴィランが次々と襲ってくる。

エクスは肉弾戦で、アルスは魔法を使い、ヴィランをなぎ倒していく。

「こんだけのヴィランが居たら、流石にジリ貧になりそうだわ」

「えびせんばい、弱音ですか？」

「僕はなりませんけどね。師匠はわかんないです」

「ボクもならんわあ！」

「厄介な生徒が1人残りしましたか……」

モヤが呟く。そのモヤから全員を守るように、13号先生と葛葉が並んでいた。

「しかし、教師も1人飛ばしました。あなたがた2人で残りの生徒を逃がせるか？」

モヤに浮かぶ目が笑う。

「逃がすかじゃねー、逃がすんだよ。お前みたいな雑魚からな」

「違います。葛葉君、君も逃げてください」

「嫌です。先生1人じゃ流石に分が悪いでしょ。俺は怪我しても治るんで」

13号の言葉をキツパリと断る葛葉。13号も葛葉が言う事に反論できず、渋々頷く。

「葛葉君はここに残って、他の皆は避難を続けて！」

13号の号令で再び出口へ向かう生徒達。

だが、モヤから現れた何者かによって、それは遮られた。

先頭にいた飯田は、首を斬ろうと振られた大振りのナイフをギリギリで避ける。

立ち止まった生徒達の前で、ナイフを降った女性は笑顔で拍手をした。

「あれを避けるなんて凄いですね！流石雄英高校って感じですよ」

女性はナイフを弄びながら、生徒全員を見つめ：

「こんるる。はじめまして、鈴原るるって言います。オールマイトが来るまで、皆でたくさん遊ばせて欲しいな」

瞬時にナイフを振りかぶって襲い掛かって来る。

「はあッー」「ヤッー」

がら空きになった女性の胴体に、飯田とレヴィの蹴りが突き刺さった。

「くっ、ヴィランとは言えあまり手を上げたたく無かった……。だが、俺は委員長としてやるべき事を、クラスメイトを守らなければいけない！」

女性に対峙する6名の生徒。その6人が見つめる中、鈴原が何も無かったように起き上がった。

「わあ……凄い……！プロヒーロー程じゃないけど、そのへんの人より全然強い……！」

狂気的な笑顔を浮かべる鈴原に、生徒達は恐怖心を覚える。

再びナイフを構えて走り出す鈴原。芦戸が放つ酸と瀬呂が放つテープを滑るように

避けて進んでくる。

佐藤と飯田が迎え撃とうと身構えた時、飛来した何かによつて鈴原が横に吹き飛んだ。

「まさか!」

その姿を見て、13号と葛葉の2人と交戦中だったモヤが叫んだ。

「面白そうなことしてるじゃん。私も入れてよ」

メイド服をなびかせ、モヤで飛ばされたはずの花畑チャイカが鈴原の前に立ちはだかっていた。

皆でヴィランと戦います！どつちが上かハッキリさせましょう。

エクスがヴィランを撃ち抜き、アルスの雷撃がヴィランを吹き飛ばす。

背中合わせの形で戦うエクスとアルスの前に、ヴィランの山が出来上がっていく。

「…えびせんぱい」

「なんすか師匠、トイレでも行きたくありませんか？」

「ちっげーよ！お前デリカシーとか考えろお!?」

エクスの脇腹を肘で殴打する。しかし、エクスは痛がる素振りも見せない。

その事にイラッとしながら、アルスが言う。

「このヴィラン、弱くない？最初のモヤモヤとかに比べたら全然戦えるよ」

アルスの言葉に、エクスは馬鹿にしたような声を出した。

「師匠、特に戦ってなかったじゃないですか」

だが、エクスの予想とは裏腹にアルスは何も言い返すことは無かった。

「…師匠？」

「せんぱい、あとちよつとだよー！」

「あ、はい」

気合いを入れ直し、ヴィランと格闘する。大振りの拳を体へ僅かに横にずらすことで避け、腹部に右の拳を叩き込む。怯んだヴィランにトドメとばかりに回し蹴りを食らわせれば、ヴィランは気絶して動かなくなった。

「えびせんぱい、飛んで!」

「うええ!?なんつ…と、危ねえ!」

アルスに言われた通りにジャンプした瞬間、地面に電流が走った。電気に当てられたヴィランは一人残らず倒れた。

「ししよおおお!!そんなんでできるならもっと早くやつてくださいよお!」

「最初から撃つてたら魔力切れで倒れてたっつーの」

「そう言うアルスの額には汗が浮かび、少し辛そうな表情だ。」

「大丈夫ですか?なんなら俺が運びましょうか?」

「大丈夫だよ。ちよつと休めば回復するから」

「その場に座り込むアルス。エクスも隣に座る。」

「……………」

「え、なんすか師匠」

あぐらをかいて欠伸をするエクスを、アルスが不思議そうに見つめる。

「えびせんばいって、ナチュラルに隣に座るよね」

「え、遠回しに近づくなかって言ってます？」

「ちげーよ、なんでそうなるかなあ」

あーもーと少し顔を赤くしながら頭を掻くアルスにエクスは困惑しながら頬杖をついた。

「…あ、そうだ。師匠、他の人の様子を魔法で探ったりできます？」

「ん？あー…どうだろう。やってみる」

魔導書を開き、少しだけ魔力を込めた指で複雑な模様を描く。描き終わった後に軽く魔力を流せば使い切りの『千里眼』の魔法陣が完成だ。

「出来た。ちよつと待ってて」

魔法陣に手を当て、目を閉じる。なにかに引き込まれるような感覚が訪れたあと、次の瞬間には様々な景色が目の前に広がった。

突然体を強ばらせたアルスに、エクスは半ば反射とも言える速度でアルスを揺さぶり、声をかけた。

幸いアルスはすぐに目を覚ました。だが、顔色が明らかに悪い。

「師匠、何を見たんですか？」

エクスの問いかけに、アルスは薄らと涙を浮かべて答えた。

「えびせんばい…、先生が…」

「ピンクの子と角の子、黄色タイツはここに残って私と13号の援護。残り3人は避難して増援呼びなさい」

『花畑先生!』

「チャイカ先生だつつつてんだろ!ポケが」

砂埃をはらいながら、鈴原と対峙するチャイカ。

「貴方、プロヒーローですよね?楽しみだなあ」

ナイフを胸元に抱いて、うっとりした表情でチャイカを見つめる鈴原。チャイカはそれを鼻で笑う。

「サイコパスが。けちよんけちよんにしてやるよ。つて言うか、早く避難しろよ!」

「は、はい!麗日君!瀬呂君!行こう!」

「うん!」「おう!」

飯田を先頭に、出口へ走る3人。鈴原はそれを追いかけることもせず、チャイカの前に立っていた。

「…追わないの?」

「ええ。あくまでも、私は強い人と戦いたいだけですから」

「ここやかな鈴原に、チャイカは気味が悪いというような目を向ける。」

「そろそろいいですか? いい加減お喋りも飽きてきたので」

「…来なさい」

チャイカの答えを聞くやいなや鈴原はナイフを構えて走り出した。

「ふっ!」

鈴原のナイフを躲し、パンチを繰り出す。拳からは確かに鈴原の肋骨をへし折った感触が伝わってきた。

そのまま壁に向かって殴り飛ばす。壁にぶつかった鈴原は、そのまま重力に従って地面に伏した。

「随分と呆気ないわね。…黄色タイツとピンクちゃんはクラスメイトの救助に行きなさい。角の子は一応こっちに残って」

「ウツス」「了解しました!」「ハイ!」

砂藤と芦戸が2人で暴風・大雨ゾーンに向かう。その姿を見届けたチャイカが再び前を向けば、鈴原はまた立ち上がった。いた。

「はあ…。また立ち上がるとか、どんなからくりよ。致命傷じゃないとはいえ骨は確か

に砕いたでしょ?」

「はい…!すつごく痛かったです」

折れたはずの場所を擦りながら、にこやかに答える鈴原。チャイカは小さく舌打ちをする。

「回復系の個性ね…。面倒くさい」

「私を倒したいなら、一撃で私を気絶させるか個性を無効化しないとダメですよ?」

自慢げに語る鈴原。鈴原の個性は傷だけでなく洋服すらも直しているようだ。

「叩き潰してやる!」

チャイカが鈴原に向かって走る。拳を振り上げ鈴原を殴ろうとするも、ひらりとかわされる。

ナイフで切りつけようとする鈴原の胴体に蹴りを入れれば、鈴原は数歩後ずさった。

「ヤア!」

そこへレヴィが追撃する。レヴィの飛び蹴りは鈴原を捉えた。

「あー、凄い…力が強いんですね。お二人共。何回か骨折られちゃいました」

蹴られた部位を擦りながら鈴原が起き上がる。

「…あんたを捕まえるプロヒーローが来るまでは足止めさせてもらおうわ。角ちゃん、手伝って」

「分かりました！」

「葛葉君！」

「つしゃおらああ！」

13号がモヤ引き寄せ、現れた本体を葛葉が攻撃する。単純なコンビだが、黒霧相手にはとても効果的だった。

「ぐう…、まさかこれ程とは…っ！」

逃げようにも、13号が常に引き寄せを発動している上に葛葉が隙をついてくるため逃げる事が出来なかった。

黒霧はあきらかに追い詰められていた。

「いや、ヤツを出せば…」

葛葉の攻撃を防ぎながらふと思案する。あの方に貰ったヤツを使えばこの状況はどうにかなるかもしれない。

だが、ヤツは元ヒーロー志望。裏切る可能性がある。

「いや、あの方はきっちり調教したと言っていた。ならば…」

黒霧の体から溢れるモヤを吸い込みながら、葛葉が攻撃できるように隙を作る13号。

突然、吸い込んでいたモヤの中から人間の腕が飛び出してきた。

「なっ…!?!」

「先生!」

突き出された腕の持つ拳銃の引き金が引かれる。

「うぐ…」

銃弾が13号の頬を掠める。その一瞬の隙について黒霧は2人から距離をとった。

「大丈夫ですか、先生!」

「ええ、大丈夫です…。だが距離を取られてしまった」

肩を並べて黒霧と対峙する葛葉と13号。その視線の先で、黒霧がモヤを広げた。

「貴方を信用します。あの生徒の相手を頼みました」

黒霧の言葉に答えるようにモヤの中から1人の青年が出てくる。

「了解です。殺しちゃっても文句ないですよね?」

ありとあらゆる銃を身体中に携えているが、どこか柔らかな雰囲気のある青年。

その青年を見た葛葉の目が大きく見開かれる。

「…叶」

「……あ、葛葉か。久しぶり。元気だった？」

にこやかに葛葉に語りかける青年、叶。

「雄英に合格したんだ。良かったね」

「叶…なんでそっち側に…」

「え？決まってるじゃん」

泣きそうな、苦しそうな、そんな表情の葛葉に叶はさも当然かのように答えた。

「僕が敵ライアンだからだよ」

刹那、叶の持つハンドガンから稲妻が走り葛葉の体を貫いた。

数メートル吹き飛ばされる葛葉。傷口は既に治りは始めている。

「あはは、やっぱ葛葉の個性えげつないわ」

「けほ、かはつ。いってえ…。ガチでやる気かよ」

「それが僕の仕事だからね」

叶が銃をアサルトライフルに持ち替えたと同時に、葛葉が翼を広げて飛び上がる。

ライフルから次々と発射される稲妻を回避しながら徐々に叶へと迫っていく。

「だったら、こっちも遠慮なくいかせてもらいましょうかねえ！」

稲妻に体を削られながらも突き進む。

その勢いのまま、葛葉は叶に向かって拳を叩きつけた。

「…え、あ?」

「ごめんね葛葉」

柔らかい感触を拳に感じた直後、上から大量の稲妻が降り注いで葛葉の体を撃ち抜いていく。

拳の先を見れば、いつの間にか叶は消えてネコのぬいぐるみがあるだけだった。

「確かに葛葉は強いけどさ、やっぱりこういうのは経験がものを言うからね」

ボロボロの葛葉の頭に銃が突きつけられる。

「じゃ、ばいばい」

銃の引き金が引かれ…

「させるかあ!」

BOOOOOM!!

「つと…」

「大丈夫か葛葉!」

爆破を躲して後ろへ下がった叶。その叶から葛葉を庇うように爆豪と切島が立ちはだかった。

「ヴィラン如きに好き勝手やらせてたまるか」

「今度は俺達が相手だ！」

広場の中心。そこで、相澤消太は地に伏していた。血が溢れ、骨も折れているだろう。その背に、明らかに人間ではない化け物が乗っていた。

「ダメか……。ヴィランも1人戻ってきていない。13号と花畑が戻ってこないのを考えれば、まだ交戦中か」

ぼんやりとした頭で考える。

生徒達は無事に逃げられただろうか。あいつらには本当に悪い事をした。入学してから常に厳しくあたっていた。中には俺をきらっているものもいるだろう。

まあ……。それならそれでもいい。将来あいつらが立派なヒーローになってくれるなら教師冥利に尽きるというものだ。

「やれ、脳無」

主犯格らしき男が告げる。

「(13号……花畑……頼んだ)」

怪物が拳を振り上げる。

「やっちやええびせんばい!」

「おらああああ!!」

怪物の腕が宙を舞った。

時は少し遡る。

アルスの言葉を聞いたエクスは、即座に広場へ向かって動き出そうとしていた。

「せんばい、どこ行くの!」

アルスの声にエクスが振り返る。

「助けに行くに決まってるじゃないですか!」

「行っても勝てるわけないよ!先生が勝てなかったんだよ!」

悲鳴のようなアルスの声に、エクスは声をふるわせる。

「分かってる…分かってますよ。当たり前じゃないですか」

でも、と言葉を繋げる。

「僕は先生の事、先生としてめちやくちや好きです。ヴィランが襲撃してきて、真つ先に突っ込んで僕たちには避難しろって言う先生ですよ？いつもは何かと厳しくて、すぐに退学って言うのに。こういう時は俺らの命を真つ先に考えてるんですよ」

そして、エクスはフツと薄く笑みを浮かべた。

「そんなかつこいい先生見たら、俺もヒーローになりたくなくなるじゃないですか」
アルスの目が見開かれる。

いつもの姿からは考えられないエクスにだけでは無く、エクスがそこまで考えていたことにも、エクスがヒーローになりたいと言ったことにも驚いているのだ。

「僕は先生に死んで欲しくない。だから助けに行きます。ヴィランに勝てないなら逃げればいい。僕は絶対に助けます」

決意を込めたエクスの眼差しにアルスは唾を飲む。そして、少し俯いて言った。

「ボクも行く」

今度はエクスが驚く番だった。

「師匠、正気ですか？死ぬほど危ないですよ？」

エクスの言葉に、アルスは目に薄ら涙を浮かべながらもしつかりとエクスを見据えて答えた。

「ボクだって先生に、えびせんばいに死んでほしくない！」

アルスの叫びを聞いたエクスは、笑顔で手を差し伸べた。

「僕が死ぬとか、師匠って実は頭悪いんですね」

「えびせんぱい、空気読もうよ…」

エクスの手を取り立ち上がるアルス。エクスはその前にかがみ込む。

「…なにやってんの?」

「師匠、死ぬほど足遅いじゃないですか。乗ってください」

「んなっ!?!」

平然と言ったエクスにアルスは顔を赤くする。おんぶされるのは単純に恥ずかしい上に、どことは言わないが当たったり、触られるからだ。

「い、いいよ。ボクは魔法使うから」

「何言ってるんですか。師匠は少しでも魔力を回復させるべきでしょ」

「うっ…」

抵抗するが正論でねじ伏せられ、渋々エクスの背中に乗る。

エクスが立ち上がるが、何故か止まったままだ。

「師匠」

突然呼ばれ、硬直するアルス。再び羞恥心が押し寄せてきて顔が赤くなる。セクハラだったら、たとえば意味がなくてもボコボコにしてやると決意した。

「な、なんだよう……」

決意はするが、声は小さかった。

「いや、師匠つて思ったより軽いですね。顔デカイのに」

アルスの中で、何かが切れる音がした。

「死ね！」

「ちよ、痛い痛い！髪の毛はなしでしょ！禿げたらどうするんですか！」

「うるせー！頭ん中足りてねえやつよりはいいだろうがよお！頭でかい方がよお！」

痛みに耐えかねて走り出したエクス。アルスも髪を引っ張るのはやめて頭をポコポコと叩き出した。

「…到着したら、俺が時間を稼ぐんで師匠が先生を回収してください。その後逃げましょう」

「え？あ、分かった。…いきなり真面目になんなよ、びっくりするだろ」

「はあ？僕はいつも真面目ですう〜」

わいわい騒ぎながら広場に向かって進む2人。

やがて、遠くに人影が見えてきた。

「えびせんばい、やばくない？」

見る限り、相澤先生が敵に組み伏せられてトドメをさされそうになっている。

相澤先生が動かないのは、恐らく怪我をしているからだろう。

「やばい、間に合わないかも…」

エクスがぼつりと呟く。

「…間に合えば、せんぱいはなんとか出来ますか?」

「腕切り飛ばしたりすれば大丈夫ですけど…え、なんでですか!」

エクスの問いかけを無視して、アルスは魔法陣を展開する。

「えびせんぱいをぶつ飛ばします。準備いい?」

「はっ!?え、ちよつと待って!」

エクスの背中に手が添えられる。

「あーもう、もうなんでも来い!」

エクスがややくそに叫ぶ。それを聞いたアルスが魔法を発動させれば、エクスは高速で飛んでいった。

エクスの背中から引き剥がされ、落下しながらアルスが叫ぶ。

「やっちやええびせんぱい!」

「おらあああ!!」

振り抜かれたエクスの剣が、脳無の腕を切り飛ばした。

ボス戦開始！コテンパンにしてやります！

切り離された腕が宙を舞う。エクスはすぐさま剣をしまい、相澤先生を担ぎあげて逃げ出した。

「えびせんばい、後ろー！」

「師匠！頼みますー！」

咄嗟に相澤先生をアルスへ投げ、自分はその場にかがみ込む。

すると、今までエクスの頭があつた場所を黒々とした剛腕が通り過ぎた。

「危ねえー！死ぬかと思つた！やばい、吐きそう」

地面を転がりアルスの足元まで移動する。

「師匠、先生を連れて逃げてください」

背中の剣を抜きながらエクスが言う。その言葉にアルスは眉をつり上げる。

「何言つてんの？勝てないから逃げるつて言つたのはせんばいじゃん」

「そうなんですけど…。あの黒いの、多分逃がしてくれないんですよ」

エクスの視線の先では黒いヴィランが斬られた腕を再生しているところだった。

その光景にアルスは息を飲む。

「そういう事なんで、行ってください。出来れば増援とか欲しいです」

エクススの背中を暫し見つめた後、アルスは立ち上がって魔法で発動した。相澤先生の体が浮き上がる。

「えびせんばい、死なないでね」

「当たり前じゃないですか。俺は師匠の弟子ですよ。魔法使えないですけど」

相変わらずいつも通りのエクスにアルスはおもわず微笑する。

そして、エクスは剣に向かって手を伸ばした。

エクスの剣が雷に包まれる。

「後で、ちゃんと戦い方教えてね!」

「仕方ないですね。最強の奥義を伝授してあげましょう」

軽口を叩き合い、別れる。

アルスの後ろ姿を見届けながらエクスは剣をかまえた。

「泣ける話だなあ、オイ。大好きな先生を助けに来たのか?」

つかつかと全身に手のようなものを付けたヴィランが歩み寄ってくる。それを見た

エクスはおもわず呟いた。

「何あれ、趣味わつる…。品性を疑うわ。…キモイなあ」

ヴィランの歩みが止まる。

「お前、死にたいの？」

「は？死にたいわけないじゃないですか。馬鹿ですか？」

ボリボリと首筋を掻き出すヴィラン。次第に血が滲んでくる。

「お前もう喋んなくていいよ。やれ、脳無」

ヴィランの声に反応して、脳無と呼ばれた怪物が動き出す。

とてつもない速度で迫るそれに、エクスも剣を振り上げて走る。

「…ハアツ！」

脳無が攻撃を繰り出すより速く剣を振り下ろす。肩から胸にかけてを斬り裂いた雷剣は傷口を焼き、電撃を脳無の体に走らせる。

剣を振り下ろした勢いを利用して体を横に回転させ、腹部を横に斬る。

そして、脳無を蹴ってエクスは後退した。

「この剣凄いな。いつもより切れるわ。殆ど使ったことないけど」

再び剣を構えるエクス。そこで違和感に気づいた。

「…なんで、再生しないんだ？超再生持つてるんじゃないのか…？ああもう、本当に嫌になるよ…」

ヴィランが首筋を今まで以上に掻き出す。

脳無の傷口が先程までとは打って変わって再生しにくくなっていたのだ。

「お前、何した。どーやった」

「え、俺?!いや、なんだろうなあ…。英雄パワーとか?」

「は?」

「いや、俺も知らんから…」

実は、これはアルスによつてエンチャントされた剣の効果だ。

傷口を焼くことで再生しづらくしつつ、体に流れる電気が脳の電気信号を阻害して体のあらゆる機能を低下させている為に脳無の回復能力も落ちているのだ。

「なんか知らんけど今なら勝てそう!」

脳無に向かつて走り出すエクス。もう一度腕を切り落とす為に剣を振り下ろす。

「やはり厄介な生徒だ」

「…う?」

エクスの剣が、エクスの左肩に食い込んでいた。

「葛葉!起きれるか!?!」

「…っ、再生…まだまだかかる…っ」

身体中に火傷を負う葛葉を切島が庇うようにしやがみこむ。

「クソ髪！そいつ、どつかに運べ！そいつがいると邪魔だ！」

「分かった！すぐ戻るからな」

葛葉を担ぎあげ、自分達を通った倒壊ゾーンへ走り去る切島。

そして、叶と爆豪だけがその場に残った。

「僕は一人で十分ってこと？ 凄い自信だね」

「自信なんざあるか。あいつを一瞬で片付けたお前に油断なんか出来ねえだろ」

「あはは、凄い…僕が強キャラみたいだ。じゃ、期待に応えさせて貰おうかな…！」

アサルトライフルから稲妻が連続して発射される。爆豪は、それを飛ぶことで回避す

る。

「てめえが攻撃を躲す手はさつき見たからな。次もそういくと思うんじゃねエぞ！」

爆豪が稲妻を掻い潜り叶に接近する。叶は爆豪の後ろに口トを出現させた。

「死ねえ！」

爆豪の右手から放たれた爆発が叶と入れ替わった口トを粉碎する。

その後ろで叶が爆豪へ向けて銃を構えていた。

「甘えんだよ！」

後ろから発射された稲妻に対して爆豪は、空いていた左手から爆発を起こして体をず

らすことで回避した。

「っ、まじかよ」

「トドメだア!」

舌打ちをする叶。叶の方へ振り返った爆豪が籠手のピンを引き抜く。

BOOOOOOOOM!!

「どうだ!?!」

爆風で少し吹き飛ばされるが、即座に受身をとって半身を起こす爆豪。

叶がいた場所は黒煙と砂埃に隠れて確認することが出来ない。

「爆豪!」

突然切島が爆豪の前に飛び出して来る。続けて、金属と金属がぶつかる甲高い音が鳴り響いた。

「仕留め損なつたか…。これは痛いな…」

煙の中から葉が歩いてくる。多少服が乱れてはいるが傷は無いようだ。

「大丈夫か爆豪」

「ああ…。助かった。クソ髪、手え貸せ」

「おうよ!」

切島が腕を硬化させて葉に殴りかかる。

「ならこいつで……！」

アサルトライフルからショットガンに持ち替え、発砲する。

小さな稲妻が辺り一面に広がっていく。

「らァー！」

その弾丸を爆豪が爆風を利用して逸らす。

切島の拳を叶はショットガンの銃身で受け止める。ショットガンが歪み、叶も押されて後ろへ数歩下がる。

「まだまだあー！」

爆豪が更に爆破で追撃を加えていく。叶はショットガンを上手く盾にして躲している。

「りゃあー！」

「ぐっ……」

爆豪によって出来ていた死角から切島が現れて叶の胸に蹴りを入れる。叶は数メートル先まで転がった。

「やっぱ2対1じゃ勝ち目薄いな……。ここは退くか」

「っ！させるか！」

叶の言葉を聞いた爆豪が飛び出すも、叶がばらまいたスモークグレネードによって叶

を見失ってしまおう。

煙が晴れると、そこにはネコのぬいぐるみが転がっているだけだった。

「逃げられたか…クソっ!」

「爆豪!俺は葛葉のところに戻る!先に広場に行つてくれ!」

「俺に指図すんなやア!」

走つていく切島に背を向け、爆豪も広場へ向かつて飛び上がった。

「っ!」

鈴原の蹴りを左手で防ぐ。が、もう片方の足で放たれた蹴りをモ口に食らいチャイカは後ずさった。

「さて…そろそろ慣れてきましたし、今度はこっちのターンです」

ナイフを逆手に握り、ナイフの刃を舐める。

「抵抗しないと、すぐに殺しちやいますよ?」

「望むところよ。くっ殺にしてやるから覚悟しときなさい」

「それは…凄く楽しみです…!」

鈴原が一気に距離を詰める。横薙ぎに振られたナイフを半歩下がることで回避し、その手を掴んで鈴原を拘束する。

「テヤツ！」

そこへレヴィのハイキックが命中する。が、鈴原は特に痛がる素振りも見せずにチャイカの左腕に噛み付いた。

「いつて……っ……のお！」

鈴原の腹部にアッパーをいれる。紙のように吹き飛ばされる鈴原だが、すぐに起き上がる。

チャイカの腕は一部が抉られており、ドクドクと鮮血が流れていた。

「あは、あなたの肉って美味しいですね。筋肉が引き締まっています」

「ごめんね。あたし、食人趣味はないの」

「せんせい！大丈夫ですか!?!」

「心配しなくても、唾つけときゃ治るわ」

怪我のない右手でレヴィの頭を撫でるチャイカ。

「…そうね。アンタは広場の方に行きなさい。包帯の手助けしてやって。こっちはあたし1人でいいわ」

「何言ってるんですかせんせい！今でも2人で互角なの…」

チャイカの言葉にレヴィが反論する。

レヴィの言葉に、チャイカは静かなながらも有無を言わさぬ迫力のある声で答えた。
「アンタはまだ子供で、あたしは大人。どっちが強くて、どっちの方が未来があるか。それはわかりきってるでしょ」

それに、とチャイカは続ける。

「あたしはそう簡単には死なないから」

ニヤリと笑うチャイカ。レヴィは涙をうかべ、広場の方へ走り去っていった。

それを見届け、チャイカは鈴原と向き合う。

「じゃ、第2ラウンド開始ね」

「頑張つて、死なないでくださいね?」

鈴原とチャイカが激突する。

肩に感じる剣の冷たさ。体が勝手に地面に倒れ込んだ。

溢れ出す血が地面を赤く染めていく。

「黒霧。教師共はやったのか」

「13号は行動不能にし、花畑は鈴原が交戦中です。しかし、生徒が3名逃げ出しました」

「……黒霧。お前、ワープゲートじゃなかったら粉々にしたい気分だよ」

ヴィラン2人の声が聞こえる。

立ち上がろうと力を入れるが左手が動く気配がないどころか、全身が思ったように動かない。

痛みと出血で意識が朦朧とする中、誰かの走ってくる音が聞こえた。

「えびせんばいっ！」

視線を動かせば、エクスの方へ駆け寄るアルスの姿。

「アイツ、イレイザーヘッドを逃がしたやつか……！」

「どうします？ 死柄木」

「決まってるだろ。脳無！」

脳無が再び活動します。アルスが放つ雷を正面から受けるが、足を止めることなくアルスに向かって進む。

「っ、《シールド！》」

アルスが咄嗟にバリアを張る。が、脳無は一撃でそのバリアを破壊した。バリアを張りながらギリギリで脳無の攻撃を躲していくアルス。

「し、しよ…なんつ…で」

エクスの中から血とともに吐き出された言葉。それに、アルスは大声で答えた。

「弟子がピンチなのに、師匠が指くわえて見みてるだけなんて…そんな事出来るわけないだろお!」

アルスの言葉にエクスは目を見開く。

「いつもめっちゃ煽つてきて腹立つし、凶々しくてムカつくけど…。でも、えびせんぱいが居るから毎日楽しいんだよ!」

風の魔法で脳無を吹き飛ばす。続けざまに氷の杭で脳無を押さえつけ、雷と炎で焼き払う。そして、トドメと言わんばかりに土魔法で脳無を地面に閉じ込めた。

「やはり腐つても英雄生ということですか」

「死ね」

黒霧を通じて死柄木がアルスに手を伸ばす。

アルスは瞬時に地面に向かって風の玉を投げつけ、起きた風に乗ってそれを躲す。

そして、エクスの傍に着地するや否や結界を張った。

「えびせんぱい、大丈夫?今治すから」

息を整えながら、エクスの傷に手を当て治療魔法をかけ始める。

結界の外ではヴィラン2人がなんとか結界を越えようとしているが、結界内にワープ

することも出来ずに立ち尽くすだけだった。

「ししよ、う…しぬほど、つよいじゃない…すか」

「当たり前だろ？…まあ、だいたい魔導書使っちゃったけどね」

エクススの傷口薄い緑の光に包まれ、暖かいものが傷口に溶け込んでいく。

「この結界には個性が通じないから安心していいよ。ボクの魔力と魔導書のページが無くなるまでは絶対に消えない結界だから」

アルスの傍に置かれた魔導書には何やら魔法陣が描かれており、それが淡く光っていた。

「…ひどい傷。これ、この場で完全に治すのは無理だよ」

「あー、やつぱりですか。まあ、思いつきり剣振りましたからね」

エクススの傷は未だに裂けており、なんとか左手も動かせる程度にしか治癒されることは無かった。

「ごめんね、ボクが治癒魔法を鍛えてれば治せたのに…」

「気にしなくて大丈夫です。これだけでもありがたいですから」

傷口は未だにズキズキと痛み、何もしていなくても涙が出そうになる。だが、それでも動けるようになっただけで十分と言えるだろう。

「さて、これからどうしようか」

アルスが結界の外を見ながら呟く。外には相変わらず2人のヴィランが居り、結界を解除した瞬間に襲ってくるのは明白だ。

「ヒーローが来るのを待ちましょう。下手に戦わない方がいいですよ」

エクスがアルスの正面に座り、腕を組んで言う。

「そう…?!?えびせんばい!」

突然、アルスがエクスを押し倒した。あまりにも唐突すぎる出来事にエクスが反応出来ないでいると、次の瞬間、アルスが吹き飛んだ。

そして、自分にかかる大きな影。

「…は?」

そこでようやく、エクスは何が起きたかを理解した。

地面に埋められた脳無が地面からエクスの背後に現れ、エクスを庇ったアルスが代わりに脳無に殴られたのだ。

「師匠おやおお!!」

エクスがアルスの元へ駆け寄る。アルスの目は固く閉じており、揺すつても起きる気配が無い。

自分の身体の中を、何かが塗りつぶしていく感覚。その感覚がエクスを満たしていた。

「今度はなんだ。いい加減にしろよ」

首を掻きながら、立ち上がったエクスを見て呟く死柄木。

先程までとは違つてエクスの鎧は黒と赤に染まり、その瞳は爛々と輝いている。

「脳無。纏めて叩き潰せ」

脳無が動き出す。それを見たエクスが手をかざすと、落ちていた剣がエクスの元へ飛んできた。そして、エクスが剣を握ると剣もまた黒と赤に染まった。

脳無が拳を振り上げる。

「殺す」

脳無の体が2つに分かれた。

【ヒロアカUSJ編】アルティメット対あり【僕のヒーローアカデミア】

脳無の体が袈裟斬りにされて地面に転がる。エクスはいつの間にか剣を振り下ろした体制で立っていた。

「死柄木……！ あれ」は危険です。私達もいきますよ！」

「チツ……次から次へとイレギュラー……！ 雄英は化け物の巣窟なのか……！」

脳無の体が再生し、エクスに向かって足を突き出す。エクスはそれをいとも簡単に片手で受け止めた。

その背後から黒霧と死柄木が迫る。

「……は？ なんだこいつ」

死柄木の手が確かにエクスの右肩に触れる。エクスの右肩は死柄木の個性によってボロボロと崩れていく。だが、エクスは何の反応も示さない。

「こいつ、痛覚が無いのか……？」

そこでようやくエクスは脳無を蹴り飛ばして左手で死柄木に拳を叩き込んだ。

死柄木は手を突き出してエクスの拳を防御しつつ、エクスの左手を崩壊させる。

「死ぬ」

右肩を負傷しているにも関わらず、全力で剣を振るエクス。傷口からは血が吹き出す。

「死柄木！」

黒霧がワープゲートを広げる。エクスの剣はワープゲートに飲み込まれ、エクス自身の脇腹に突き刺さる。

エクスは剣を投げ捨て、黒霧の首元を蹴りつけた。脇腹からブシュッと血が飛んだ。

「くっ、プロヒーローにも引けを取らない戦闘力……！奴は本当に生徒なのですか!？」

「知るかよ……っ。脳無！」

脳無が剣を拾ったエクスに向かって何度も拳をぶつける。それを剣で防いだり躲したりしながらエクスは隙をついて何度も脳無を斬り裂いていく。

「キリがないな」

ぼつりと眩き、エクスが脳無の身体を蹴り倒す。後ろ向きに倒れた脳無の心臓へ、エクスは剣を突き刺した。

「刺したままなら再生出来ませんよね？」

剣を足で押し込む。剣は地面にめり込み、脳無の身体をピツタリとそこに固定した。

「……あ？」

エクスの体がぐらつく。気づけば左腕が無くなっていた。少し離れたところに無くなった左腕が落ちている。

「痛みを感じないならば奇襲にも弱いということ。片手で私達に勝てますか？」

振り返りざまに放たれた回し蹴りを避けつつ黒霧が言った。

人間は足の小指だろうと、1つパーツが無くなるだけでも立つのが難しくなるものだ。それが腕1本ともなれば、立っているだけで精一杯のはずだ。

エクス顔めがけて死柄木の腕が伸びる。

「づつ…!?くそ、痛てえ…！」

全てを崩す手のひらに對して、エクスは右手で殴りかかった。

右手の拳にびきりとヒビが入り、血が流れ出す。だが、その拳は死柄木の腕の骨を砕いた。

「まじでイカレてるぜ、お前」

折れた腕を庇いながら死柄木がイライラとした声で言う。

「ヴィランに生きてる価値は無いです。死んでください」

エクスが空中に飛び上がる。走ったりすることが出来ないなら空中を動くという考えだろう。

空中で器用に体を動かし、死柄木に向かって横薙ぎに足を振る。

「貴方の攻撃は最早、通用しません」

再びモヤが攻撃を包み、エクスが攻撃を受ける。

骨が折れた感覚と共にエクスが着地すると、その後ろでバキンという金属音とともに脳無が起き上がった。

胸に刺さった剣を抜き、エクスに向かって剛腕を振るう。

それを飛ぶことで回避しつつ、蹴りで脳無の頭を攻撃する。

「無駄だ。脳無には『シヨック吸収』の個性がある。剣がないお前に勝ち目は無い」

目を笑いに歪ませ、死柄木が自慢げに発した言葉にエクスは小さく舌打ちをする。

「ならねじ切りますよ……!」

再び飛び上がろうとするエクス。だが曲げた膝が伸びることはなく、エクスはただその場に倒れ込むだけだった。

「そこまで傷を負えば、たとえ痛みが無くても出血とダメージで動くことは出来ないでしょう」

黒霧の言葉にエクスは絶望する。復讐をする力を手に入れた。にも関わらず、敵の一人も殺すことが出来ずに後はただ死を待つのみ。

「やれ、脳無。バラバラにしてやれ」

エクスに脳無が迫る――!

「死ねえ！」 「エクスクン！」 「凍れ！」

確かに脳無と呼ばれたヴィランに蹴りは届いた。だが、手応えがない。

足の筋肉を使つて、脳無を遠くに押し出す。

「あいつ一人でここまでやったんだ。次は俺たちの番だ」

「くそデクは金髪についてろ！」

「う、うん！」

凍ったからだを砕き、火傷と共に治していく脳無。それに、爆豪と轟、レヴィが対峙した。

その後ろで、緑谷がエクスを担いで運んでいく。

「ボスを倒したと思いきやまた戦闘か…。いい加減飽き飽きしてきたよ」

「やつ一人に時間を取られすぎましたね…」

死柄木と黒霧は脳無に戦いを任せ、後ろに下がる。

「…っ、来るぞ！」

轟の声とともに、脳無が走り出す。身構える轟とレヴィの前に爆豪が飛び出した。

「死にたくなけりや下がつてろ！」

手を前に突き出し、箆手から伸びるピンに指をかける。そして、脳無が接近したタイミングでピンを引いた。

BOOOOM!!

爆炎が脳無を包み込み、辺りに煙が充満する。

「半分野郎！」

「ああ！」

轟が右足で地面を踏みしめると、そこから次々と氷が飛び出して煙に包まれた範囲を氷漬けにしていく。

「やったか？」

徐々に薄くなる煙を見つめながら轟が言うが、その言葉とは裏腹に3人は警戒を辞めていない。

次の瞬間、氷の割れる音とともに脳無が煙の中から飛び出してきた。

「チー！」

爆豪が爆発で迎撃しようとするが、繰り出された拳をなんとか躲すので精一杯だった。

続けて轟が足元から凍らせにかかるも、ジャンプすることで難なく回避され、逆に接

近されてしまう。

「(不味い……!)」

「2人とも、耳塞いで！」

レヴィの声に耳を塞ぐ轟と爆豪。

「Aaaa!!!」

レヴィの喉から発せられた音が衝撃波となり、脳無を轟のそばから吹き飛ばした。

「悪い、助かった」

「どういたしました。でも、喉がやられちゃうから次は撃てないヨ？」

「心配すんな。もうハマはしねえ」

「テメエら、ぼさつとしてないで手伝えや！」

爆豪の声に2人とも脳無の元へ向かう。既に爆豪が戦闘を始めており、回避を主体に隙を見て攻撃を繰り返していた。

「凍らすぞ。離れろ、爆豪！」

「命令すんじゃねえ！」

轟の声を聞いて、噛みつきつつもその場を離れる爆豪。それを確認した轟が右手を掬い上げるように振ると、地面から巨大な氷柱が次々と現れて脳無の半身をあっという間に氷で閉じ込めた。

「ヤアツ！」

残った半身にレヴィが飛び蹴りを叩き込む。ゴキリという音を響かせて、脳無が体があり得ないくらい後ろに曲がる。

しかし、案の定脳無はすぐに氷を破壊しつつ元の体勢に戻った。

「おい、ドーすんだ……このままじゃジリ貧だぞ」

「わあつてるよ！だからってどうにも出来ねえだろ！」

「とにかく、ヒーローが来るまで耐えよウ！」

気合いを入れ直す3人。

だが、そんな3人を嘲笑うように脳無の横に黒いモヤが出現する。

「そろそろ私も参加しましょう。脳無を長いこと足止めする訳にもいかないですからね」

ニヤリと目だけで嗤う黒霧。3人の間に緊迫した空気が流れる。

「いきますよ……！」

モヤが一瞬にして消え、脳無が動く。

轟が氷で脳無に応戦しつつ、レヴィが空中から脳無の首にかかどで回し蹴りを入れる。

その後ろで、黒霧のモヤを爆風でかき消しながら爆豪が本体らしき部分を攻撃しよう

としていた。

「ふむ、やはりいい連携ですね。しかし…」

黒霧のモヤから脳無の腕が飛び出す。爆豪は躲そうとするが、左肩に脳無の拳が僅かに当たってしまう。

それだけで体勢を崩し、地面に落ちる。

「爆豪ー」「爆豪くんー！」

「よそ見をしていて良いのですか？」

爆豪に気を取られた一瞬の隙をつき、脳無が2人に向かって腕を横に振る。

轟は氷で、レヴィは腕を交差させてガードするが数メートルは後ろに倒れ込んだ。

「なんてパワーだ…っ」

「嘘でシヨ…」

ゆっくりと3人に歩み寄る脳無。

その時、一陣の風が吹き抜けた。

脳無が吹っ飛び、3人がいつの間にか離れたところに移動していた。

「…ようやく、ラスボスのお出ましか」

死柄木が憎々しげに呟く。

3人とヴィラン達の間立つのは、誰もが知る最強のヒーロー。

「すまない、随分と待たせてしまったね。私が来るまで良くぞ持ちこたえてくれた」
「俺たちだけじゃないです。相澤先生とエクスがあいつらを1人で相手してました」
「…そうか。だが、もう安心していい」

「私が来た」

突き出されたチャイカの腕に無数の切り傷が走る。切り傷を付けた張本人の鈴原は既にチャイカの背後に回り、ナイフを構えていた。

それに対し、踵を振り上げて新体操のように体を一回転させることで鈴原を足に引っかけ、地面に叩きつけた。

「つたく、めちやくちや痛いじゃない。こっちは全然回復しないって言うのに…」
「凄いですね、あの体勢から攻撃されるとはおもいませんでした。貴重な体験をありがとう(ご)ございます…!」

「キモっ」

ペツと血反吐を吐きながらチャイカが言った言葉に、鈴原は首を傾げる。

「なんでですか？誰だって、好きな物の中の新しい事を知るのは楽しいですよね？」

「その『好きな物』が、アンタは歪んでんの、よっ！」

チャイカの蹴りをバックステップで避け、低い姿勢から突撃する鈴原。チャイカは突き出した足を振り上げて鈴原に叩きつけた。

「そのまま埋まってなさい」

鈴原の頭を踏んだままチャイカが言い放つ。鈴原はナイフを順手に持ち替えてチャイカの足を切ろうとナイフを振る。

「つと、まじで危ないわね。叩き潰すぞ？たわけが」

「あはは、今のは痛かったです」

楽しそうにナイフを弄ぶ鈴原と、腕を組んで仁王立ちをするチャイカ。

再び2人が激突しようとした時、突撃2人の足元に花が咲き乱れた。

「花畑さま、遅くなりました！」

ゲートの方向から、チャイカとは違うメイド服を着た女性が歩いてくる。一見すると少女のような姿で、普通の耳ともう1組、鹿の耳が生えている。

「エリーじゃん。なんで居んの？」

チャイカの言葉に、エリーと呼ばれた彼女一エリー・コニファーは頬を膨らませた。「麗日さんに、急いで助けに行つてと言われたので急いで来ましたの…」。そんな言い

方だと傷ついちゃいますよ!」

「あー、ごめんね。助かったわ」

チャイカが深呼吸をすると、足元の花から何やら光の粒が現れてチャイカの傷を癒していく。

「それで? 私は全快して、なおかつ2対1だけど。まだやる気?」

「当たり前じゃないですか。ここからが楽しく…あれ?」

鈴原が下を向く。釣られてそちらを見れば、鈴原の体は何やら黒い液体になって消えていった。

「あああ…、ごめんなさい…。もう終わりみたいです…。ということ、続きはまた今度! おつるる」

笑顔で消えていく鈴原に、チャイカは大きくため息をついた。

「100億もらったって、アンタとは二度とやらないわよ」

その横で、全く話についていけない人物が1人。

「あれ? 私が来た意味って…?」

エクスが目を覚ますと、つい最近見たばかりの天井が目に入る。

「…起きたか」

声のした方を振り向けば、全身を包帯でぐるぐる巻きにしてベッドに寝ている相澤先生の姿。

「ばあさんが、お前の怪我が酷いつて愚痴つてたぞ。最終的には普通科の生徒1人とアルスも手伝つてようやくそれだ」

改めて自分の体を確認する。全身には傷跡が残り、未だに包帯が巻かれていたりガゼが貼られていたりしている。

「あれ？先生、ししよ……あ、アルスさんつて大丈夫なんですか？」

「一時的に意識を失っていたようだがな。他の先生方がついた時には目を覚ましていたらしい」

相澤先生の話の聞いて、エクスの体から力が抜ける。

「ただ、めっちゃめっちゃ怒ってたぞ。2、3発は覚悟した方がいいだろうな」

「まじですか…」

相澤先生の付け足した一言に、エクスは軽く絶望する。間違いなくあの師匠はエクスに向かつて魔法をぶつ放すだろう。

「それより…だ、エクス」

「え、はい」

「お前の怪我の話だ」

エクスが息を飲む。

「単刀直入に聞く。なんであんな怪我を負った。ばあさんが言うには、正常な人間なら痛みを感じた瞬間に本能的にその部位を相手から引き離そうとするそうだ。だが、お前の怪我の幾つかからはそれが感じられなかったらしい。エクス、何があった」

ただ問いかけるだけの、威圧感もない言葉。だが、その言葉がエク스에脳無達と戦った時のことを思い出させた。

「…師匠を殺されたと思った時、ただひたすらに殺意が湧いたんです。そうしたら、なんか凄いい体が軽くなつて、痛みも感じなくなりました」

「それで?」

「敵を殺さなきゃつて思つて、とにかく攻撃しました。自分が怪我しても痛くないから無視して、なんとか殺してやろうとしました。…出来なかったですけど」

「…そうか」

エクスの答えを聞いた相澤先生は暫く沈黙する。そして、口を開いた。

「お前の行動は、殆どが模範的な動きだった。だが、2つだけ明らかなミスがある。分かるか」

「俺個人としては、お前が他人の為にここまでしたのを誇りに思う。：言っておくが、お前の行動を肯定しているわけじゃないからな」

1 度息を吐き出し、相澤先生は言葉繋げた。

「最初の時点でお前が葛葉を突き飛ばした結果、3人の生徒がUSJから脱出し、助けを呼ぶことが出来た。

また、お前達が来たから俺の命が助かったと言つてもいい。

そして、お前が1人で戦ったからヒーローが来るまでの時間稼ぎを多少なりとも出来た。

確かにお前の行動は最善じゃなかった。だが、お前のおかげで被害が減った面もあった事も忘れるな。：お前のおかげで助かった命があることもな」

気づけば、エクスの目から涙が溢れていた。

「：先生」

「なんだ」

「俺、先生みたいなヒーローになりたいです」

エクスの言葉に、相澤先生は少し笑って答える。

「辞めておけ。俺みたいな日陰者より、どうせならオールマイトを目指せ。そっちの方が稼げるぞ」

「……そうします」

「ああ、それがいい。そうして、有名になったら恩師として俺の事を宣伝してくれ」

「…遅刻を許してくれたら考えときます」

「あんまり調子に乗るな」

「…すみません」

お世話になった方にお詫びにいきます。師匠との特訓も出来たらやります！

USJ事件が発生し、1日学校が休校になるかと思いきやならなかったというUSJの次の日。

既にホームルーム開始のチャイムが5分前に鳴り終わった廊下でエクスは頭を抱えていた。

「やばい…、昨日ヒーロー目指す宣言したばつかなのに早速遅刻とか洒落にならんわ…。昨日遅くまでハリーポッター見たせいで…。やらかした…！」

教室の扉の前に座り込んで頭を抱えるエクス。なんとかこの状況を打開する方法を考えるが、頭にはハリーポッターの感想しか出てこない。

「いやあ、バジリスクまじでえげつないよなあ。バカでかい上に不死鳥の涙でしか治せない毒とか最強すぎる」

ニヤニヤと笑いながら独り言を呟くエクス。故に気が付かない。エクスの後ろに立つものの姿に。

「エクス」

後ろから聞こえた声にエクスの笑顔が凍りつく。恐る恐る振り向けばそこには、包帯でぐるぐる巻きの担任・相澤消太の姿。

「何か言うことは？」

「すいませんっしたああああ!!」

エクスは目にも留まらぬ速さで土下座した。

「遅刻した理由は？」

土下座するエクスに冷ややかな声で相澤先生が問う。エクスは必死に頭を回転させ、苦しい言い訳をする。

「こ、公園で…子供が200人くらい…居て…、全員にS w i t c hを…買って、あげてました…」

「なるほどな。という事は、お前はそれだけの金を持っていたという事か？」

「…はい」

「200人も子供が入る公園、この辺りにあったか？」

「…あります」

エクスの返事を聞き、相澤先生は短く息を吐いた。

「反省文、原稿用紙10枚だ」

相澤先生の言った言葉にエクスは静かに肩を落とした。ゆっくりと立ち上がって教

室に入るエク스에相澤先生が後ろから小さな声で言った。

「お前の傷を治した普通科の生徒、1年D組だそうだ。礼に行っておけ」

「わかりました」

エクスの返事を聞き、相澤先生は教卓に戻る。エクスも自分の席に着いた。

「さて…、話を戻そう」

教卓に立つ相澤先生が話を始めた。

「先ほども言った通り、雄英体育祭が迫ってきている」

相澤先生がそこまで話したところで1人が手を挙げた。

「なんだ、エクス」

「雄英体育祭ってなんですか？要するに中学の体育大会ですよね？」

エクスが呆けたあほ面で質問をする。静まる教室内。すると突然、エクスの頭に衝撃

が走った。

振り返るとアルスが自分の頭の横で指をクルクルと回し、パーと手を開いていた。

エクスは中指を立てた。

「お前ら、遊ぶなら外でやれ」

「いや、違いますよ。ししよ…アルスさんが悪いです。俺は悪くないです」

敢然と言い放つエク스에相澤先生は頭をかいてため息をつく。そして、説明を始め

た。それによれば、雄英体育祭は日本ビックイイベントの一つであり、日本に於いてかつてのオリンピックレベルの物凄いものらしい。

さらに、プロヒーローがスカウト目的で見る為、良い成績を納めればそれだけ道が拓かれるとのこと。

「へえ〜！全然知らなかったわ。言うてあんまり興味なかったもんなあ」

にこやかにそう発言するエクスに、クラスの殆どが心の中でツッコんだ。

「(それで本当にヒーロー志望なのか!?)」

ちなみに、葛葉もゲーム三昧で全く知らなかったというのはここだけの話。

休み時間。エクスは1年D組の教室前で悩んでいた。

『どうしよう…考えたら誰が治してくれたか知らないじゃん、俺。かと言って、『昨日僕を助けてくれた人居ますか?』なんて聞くのは死ぬほどダサいしなあ…』

ぶつぶつ呟きながら廊下を行ったり来たりするエクスに、D組の生徒は気味の悪さを通り越して恐怖を感じていた。

お花を摘んでから戻ってきていた1人の生徒がそんなエクスを見て近づいてきた。

「君、確か昨日怪我してた…?」

いきなり声を掛けられて冷凍エビになるエクス。それでも、なんとか言葉を発する。
「あ、貴方…が、僕の傷を…治してくださいましたか?」

「あ、はい、そうです。…よ?」

「あ、そう…なんですね」

会話が途切れ、エクスの背中に冷や汗が流れる。このままでは不味いと頭を働かせ、まだ自己紹介をしていない事を思い出した。

「えーっと、エクス・アルビオって言い、ます。昨日は、ありがとうございます!」
「ああく! わざわざお礼を言いに来てくださっただけですね! ありがとうございます!」

頭を下げるエクスに、こちらも頭を下げ返す少女。

「えっと、私、健屋花那です。昨日の件は私も良い思いをさせて貰ったので、こちらこそありがとうございます!」

少女、健屋の言葉にエクスは内心首を傾げた。彼女は怪我した人を見るのが好きな性癖でもあるのだろうか。

が、命の恩人には何も言うまいとエクスは口を噤んだ。

左目が笑い、右目が悩む。そんな微妙な表情のエクスに健屋は首を傾げる。

ふと時計を見れば、もうすぐで授業の開始時刻だった。

「そろそろ授業の3分前なので私はこれで失礼します。今度一緒に遊びましょうー!」

LINEのIDを書いたメモ帳を渡して教室に帰っていく健屋。それを見送ったエクスは一言、

「陽キャだ…」

と呟いた。

昼休憩。エクスは食堂に来ていた。食券を買い、料理を受け取りに行く。そこで、見た事の無い人物が居るのに気がついた。

黒い髪に赤と白のメッシュが特徴的な男で、大学生くらいのように見える。

エクスがじっと見つめていると、向こうもエクスに気がついたのかにこやかに近づいてきた。

「何?俺に何か用事?」

カウンターに肘をつけてにこにここと問いかける彼に、エクスは何故かあまり緊張せず
に接することが出来た。

「いや、見たことない人が居るなーと思って。どちら様ですか?」

エクスの問いかけに彼はキョトンとした後、大声で笑い始めた。

「あははははは！どちら様ですかって、そりやそうだわ！」

涙を拭いながら彼が首から下げられたネームプレートをエクスの顔の前まで持つていった。

「俺、三枝明那。雄英には教育実習できてんの。3週間くらい色んなとこに居ると思うから、よろしく」

差し出された手をエクスは握る。

「エクス・アルビオです。よろしくお願いします、三枝さん」

「エクスね、覚えとくわ。…つと、これがご注文の品です。またな」

「明日また来ます」

何となく仲良くなれそうな雰囲気の実習生に見送られながら、エクスは食堂で座る席を探し始めた。

簡単に辺りを見回すが、見たところ全ての席にグループが出来ておりエクスが座れそうな席は見つからなかった。

諦めてどこかが空くまで待つことにしたエクス。

「エクスさーん！」

仕方なく再びカウンターまで戻ろうとしたエクスに、少し離れた席から声がかけられ

た。

そちらを見れば、席を立ってエクスに向かい手を振る加賀美の姿。

「席をお探しなら、こちらにどうぞ!」

エクスは加賀美の言葉に甘え、そこに座ることにした。

「ようこそ! さあ、座ってください!」

加賀美の隣の席に座るエクス。前の席には葉加瀬、左前には夜見も座っていて3人もエクスを歓迎していた。

「失礼します…」

「はい。私達の中で居心地悪いかもしれないけど気にしなくていいからね」

「私の事は冬雪って呼んでいいよ。私もエビオって呼ぶから」

「え、なんでそのあだ名知ってるんすか」

葉加瀬の何気ない一言にエクスが食いつく。そのあだ名は嫌では無いものの、かつこ悪い為自分からはあまり言わないようにしているのだ。

そのため、何故葉加瀬がそのあだ名を知っているかエクスは分からなかった。

「エビオ呼びの事? それならもう結構広まってるけど」

「嘘でしょ…」

首を傾げながら答えた葉加瀬にエクスは頭を抱える。どこからこの不名誉なあだ名

広がったかは分からないが、とりあえずは最初に考えたアルスが悪いという思考に行き着いた。

「もういいです。僕はエビオです。よろしくお願いします」

「あははは、じゃあ私はエビちゃんって呼ぶね」

「私はちゃんとエクスさんと呼ぶので安心してくださいね！」

諦めた顔のエクスに夜見が追い打ちをかけ、加賀美がフオローをする。こういう時の反応でその人の性格は分かるものだ。

「ところでさー」

ピザを食べ始めるエクスに葉加瀬が興味に満ち溢れた瞳で身を乗り出してきた。

「ヴィランに襲われたんでしょ？どんな感じだった？」

「葉加瀬さん」「冬雪？」

葉加瀬の問いを聞いた瞬間、加賀美と夜見が純粹に怒りを感じさせるような声を発した。

2人に咎められ葉加瀬は口を尖らせる。

「でも気になるじゃん…」

少しいじけた様な声を出す、本人も分かっているのかそれ以上聞いてくることは無い。

そんな3人を見ていたエクスは、特に気にした様子もなく口を開く。

「別に聞きたいなら良いですよ」

エクスは良くも悪くも直ぐに吹っ切れる性格な上、今回は仲のいいもの達は怪我也無く無事だった為にエクスは殆ど気にしていなかった。

「エクスさん、無理しなくても良いんですよ?」

エクスを気遣う社長の言葉にエクスはピザを口に運びながら答える。

「別に何とも思っていない…わけでも無いですけど、気にしてはいないので大丈夫です。聞きたいこととかあるなら言ってください」

エクスの発言に加賀美は眉をひそめて何かを言おうと口を開くが、その声は葉加瀬の声にかき消された。

「ヴィランってどんな個性持ってたの!？」

「えーと、凄い再生するやつと打撃が効かなくなるやつ、なんかボロボロになるやつ、瞬間移動ですね。雑魚は覚えてません」

飄々とした態度で答えるエクスに葉加瀬が感嘆の声を上げる。

「…あのお」

二人の会話を横で聞いていた夜見が申し訳なきように手を上げる。

「コスチューム改良の為に使った感想を教えてくださいんだけど…」

「あ、それは出来れば私も知りたかったり…」

「全然大丈夫ですよ。えつとですね…」

その後質問返答コーナーはヒートアップし、最終的には昼休憩の間ずっと質問攻めにあうエビオなのだった。

なんやかんやは特に無かったが、普通に一日が終わった放課後。

教室を出ようとしたら扉の前に人だかりが出来ていた。

「え、気持ち悪っ…人めっちゃ居るじゃん」

驚愕するエクス。その隣を葛葉が平然と通り過ぎ、人だかりに向かって歩いていく。

「あのさ、邪魔なんだけど。人の迷惑とか考えてくださいませんかねえ？」

ギロリと睨めば人だかりが分かれて葛葉の道を作った。

「葛葉さんやあば！えー、仕方ないから窓から出よう」

室内用の靴を脱いで窓から外に出るエクス。校舎を回り、昇降口にやって来て靴下を脱ぐ。室内用の靴を下駄箱に入れて靴を履く。

脱いだ靴下をカバンに入れながら校門を出ようとしたところで、突然誰かに腕を引つ

張られた。

「うおお!?!:あ、師匠じゃないですか。誘拐するなら小学生とかにしてください」

「誘拐じゃねーし。えびせんばいさあ、約束の事すぐに忘れるよね」

腕を引つ張っていたのはどこか不機嫌そうなアルスだった。

「怪我治してやったのに礼も言いに来ないしさあ。多少は心配してたんだけど?」

「いや、師匠なら別にいいかなって思ったんで」

笑うエクスにムツとした表情を浮かべながら、アルスは歩き出した。その横に並ぶようにエクスも歩き出す。

「まあ?別にボクはえびせんばいがちよおーつとは感謝してくれるかなーとか期待してないし?」

「あ、そうですか?なら感謝しないでいきます」

「おまつ、はあ!?!今のはそういうんじゃないだろう!?!」

アルスがエクスを蹴る。が、エクスはよろけることも無く歩き続ける。

「感謝して欲しいならそれなりの対応があるんじゃないですか?」

「もう意味わかんねーよ」

相変わらずの煽りあい、罵りあいをしながら歩く。

「今どこに向かっています?」

「校庭。端の方なら使っても大丈夫でしょ」

まもなく、目的地の校庭から見えてきた。

「とりあえず、今日は師匠がどのくらい動けるかとかを見る感じですね」

「うへえ、面倒くさい」

いかにも嫌そうな顔をするアルスを置いてエクスはずんずん進んでいく。アルスも慌てて後を追いかける。

ようやく到着し、2人が向き合う。

「じゃあ師匠、今から体力テストするので個性を使わずにやってください」

「仕方ねえなあ。ボクを舐めんなよ？」

「嘘でしょ師匠!？」

「ハア…ハア…これがボクのだ」

アルスの測定結果を見てエクスが驚愕する。そこに書かれた数字はエクスの予想を上回るものだった。

「こんなの、下手したら小学6年生にも負けますよ!？」

「これがボクの方だ…思い知ったか…!」

大の字で倒れているアルスがエク스에 ドヤ顔を向ける。エクスはそれを見てうわあ
と少し引いた。

「これは特訓とかの問題じゃないですね。筋トレしましょう。筋トレ」

「えー、いやだー」

「僕も一緒に付き合いますから。3秒くらいは」

「付き合つてねーじゃん!」

アルスが魔法を発動し、エクスが額に石をぶつけた。エクスは額を抑えて蹲る。

「いつてえ…! 師匠つてまじで最悪ですね」

「う…、まあ今のはボクが悪かった…かも」

自分の立場を考え、アルスが謝る。すると、エクスはガバツと頭を上げた。その瞳が
次に何を言うか物語っている。

「だったらご飯奢つてくださいいよ! 約束ですからね!」

「なんでだよ! 謝つたじゃねーかよお!」

「分かってないですわ師匠。こういうのは誠意が大切なんですよ」

「誠意を持つて謝つとるわ!」

ギャーギャーと騒ぐ2人。ひとしきり叫んだ後、エクスが仕方が無いというふう
に首

を振った。

「じゃあ割り勘です。7：3でいいですよ」

「はあ？…6：4だよ」

「もうそれでいいです。…疲れたんで帰りましょうか。全然特訓出来なかったじゃないですか」

「はあー？それはえびせんぱいがふざけた事言うからだろう？」

「ほら、すぐ人のせいにする！やっぱりこの人最悪だ…」

「んだと、やんのかあ？」

「いいでしょう、受けてたちますよ」

「私らエリートが普通科とか許せねえよなあ!?!だから！体育祭を通じて！ヒーロー科の奴らと戦争だよ！いいいな!?!」

「おー！」

体育祭開始!皆殺しにします!

雄英体育祭当日。目に見えるほどの緊張感が控え室に張り詰める。

…ただ一角を除いて。

「あーダメだあ…。手札が回らない」

「エクスって手札揃わないとまじで弱いよな」

控え室のベンチを使ってマジック・ザ・ギャザリング（通称MTG。にじさんじでもアプリ版が遊ばれている）をプレイするエクスと葛葉。

この2人の間にのみ、全く違う緊張感が流れていた。

「君たち!もうすぐ体育祭が始まるぞ!というか、何故学校で平然とカードゲームをしてるんだ!?!」

再びプレイし始めた2人に飯田の声が突き刺さる。

「大丈夫ですよ。始まるまであと少しありますから」

「校則には『カードを持ってきてはいけません』なんて書いてねーし?」

「エクス君はともかく、葛葉君は言ってる事が高校生とは思えないぞ!?!」

葛葉の小学生の様な言い訳にその場にいた全員が飯田と同じ事を思ったであろう。

相変わらずカードゲームをするエクスと葛葉にもう一度注意をしようと飯田が口を開きかけた時、何やら少女型の機械が客席の方から入ってきた。金髪で何やら蛍光色の服をきた機械は背中にプロペラを付けて手に一枚の手紙を携えている。

その機械を見た葛葉がサツと顔を青くする。

「?葛葉さんどうしました?うわ、何これ」

葛葉に問いかけるエクスの横を飛び、葛葉の膝に手紙を落とす機械。

そして葛葉の手札のカードを一枚場に出し、場を数回動かして機械は客席の方へ戻っていった。

「それなんですか?」

「俺、今日死ぬかも」

葛葉が手紙を開く。そこには見覚えのある筆跡で一言、『葛葉?』とだけ書かれていた。

それを見た葛葉は一瞬で立ち上がり走って廊下に出ていった。

その場にとり残されたエクスがふと盤面を見る。

「なにこれ地獄じゃん」

その盤面では、エクスは既に詰んでいた。

まもなく、葛葉がシャキツとした姿で控え室に戻ってきた。先程と違い、髪型も整えて背筋も伸びている。

「え、大丈夫ですか? 頭でも打ちました?」

「真面目にしないと母さんに殺される」

くすくすと笑いながらエクスが冗談交じりに言った言葉に葛葉は、少しだけ怯えたような声で答えた。

「そんなにやばいんですか?」

「母さんが本気出したら近づく前にやられてる」

「戦闘力ぶつ壊れてません、それ?」

エクスの言葉にゆっくりと頷く葛葉。エクスは思わず息を飲む。

結局周りと違う緊張感漂う2人。

「エクスクン、葛葉くん! そろそろ並ばないト。体育祭始まるヨ?」

「気にしなくていいよ。早く並ば」

今から戦場にも出そうな面持ちの2人にレヴィが声をかける隣でアルスが冷静に言う。

すると、近くに居た麗日と蛙吹が話し始める。

「ケロ、アルスちゃんって思ってたよりクールだわ」

「だねえ。ウチも最初はもつとこう、甘えてくる子やと思ってた！」

「はいはい、ドーセボクは冷酷なまんまる饅頭ですよーだ」

「誰もそこまでは言っていないのだけれど」

2人の言葉に頬を膨らませたアルスに蛙吹がつっこむ。

「みんな、整列はしたか!? 入場するぞー!」

控え室に飯田委員長の声が響いた。

『雄英体育祭! ヒーローの卵たちが我こそはと鎬を削る年に一度の大バトル! ドーせてめーらアレだろ、こいつらだろ!? 敵の襲撃を受けたにも関わらず、鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星! ヒーロー科! 一年! A組だろおお!?』

スピーカーから流れる特大ボリユームの紹介と沢山の喝采を浴びながらA組の生徒達が前に進む。

「うわ何これ人だらけじゃん気持ち悪。もうこれ地獄だよ。吐きそうになってきた、俺もうここで死ぬかもしれないよどうしよ。プレッシャーとか半端ないしここまで言わ

れて一瞬で負けたらもう絶対雄英辞めるわ。もうほんとにだめかもしれない。なんだ「選手宣誓!」うお、びっくりしたあ」

もうダメだムーヴを決めていたエクスだが、女性の声に驚いて顔を上げた。

そこにはかなり際どいスーツを着た女性ヒーロー、《ミッドナイト》の姿が鞭を持って壇上に立つ姿。

「この学校まじで地獄じゃん。この高校に入ったのを本気で後悔してきたよ?この短期間で」

危ないスーツを着たヒーローの姿を見て恥じらい以上に畏怖や絶望が勝ったエクスは、既に気持ち的に負けていた。

「選手代表——A爆豪勝己!」

ミッドナイトと呼ばれた爆豪がゆっくりと壇上に上がり、右手を上げた。

「せんせー。俺が1位になる」

『絶対言うと思った!』

爆豪を知っているものほとんどが声を揃えて叫ぶ。

A組以外の生徒達からブーイングが飛ぶ中、爆豪が振り向いて親指を下に向ける。

「せめて跳ねのいい踏み台になってくれ」

爆豪によってただでさえ高かったA組へのヘイトが更に高まる。エクスはもう無

だった。

その後、ミッドナイトから第1種目が発表された。第1種目は障害物競走であり、エクスは入学の時を思い出してなんとも言えない気持ちになっていた。

ルールは単純で、コースは守るのみ。あとは自由らしい。つまり、この時点で既に潰し合いが始まるという事だ。

障害物競走のスタートラインから少し後ろに立って腕を組むエクス。

「でも思ったほどやばくはなさそうだよなあ」

「そうだねエ」

独り言に返事を返されて隣を見れば、いつの間にかレヴィが隣に立っていた。

「死ぬほどビビったんですけど」

「ウン、驚かせようと思ったもん」

悪びれることなく笑顔を見せるレヴィにエクスも苦笑する。

「もうすぐ始まりますけど良いんですか?」

形だけの問を投げかければ、イイヨイイヨと朗らかな声が帰ってくる。

「それで、どうしました?」

「最近は一クスくん、アルスちゃんとか葛葉くんとばっかり仲良くするから。ボクちよっと拗ねてまース」

エクスの間いかけにおどけたように答えるレヴィ。だが、恐らく本当の事なのだろう。

「葛葉さんは普通に男友達ですし。ししよ…アルスさんは、なんというか……」

そこで言葉を切つて考え込むエクス。

「多分…ですけど、僕と性格が似てるんですよ。だから絡みやすいって感じだと思っ
んですけど……」

「確かに、それはありそうだね」

悩みながらも途切れ途切れに言ったエクスにレヴィは脳裏にエクスとアルスを思い
浮かべ、少し吹き出して肯定する。

そこで突如エクスはハツと我に返つて頭に疑問符を浮かべるレヴィに何故か弁明を
しました。

「いやでも幼馴染はレヴィさん1人ですし、あの2人とレヴィさんは違うというか……」
そこでレヴィも気が付く。エクスはレヴィに自分と2人との仲間の良さを自慢して
いるように感じたのだろう。

それを理解したレヴィはちよつとだけエクスを弄ることにした。

「エー…でも、結局ボクとは絡んでくれなかつた訳だシ? やっぱりボクには友達なんて
出来ないんだ……」

大袈裟に悲しむ真似をすれば、エクスが焦る様子が視界の端に映った。

エクスは焦る頭で何とか考えた。そして――

「ンエ?」

「僕は、僕はずっと友達だと思ってますからね!」

気付けばエクスの顔が目の前にあり、手を握られていた。

この事実が普段冷静なレヴィの頭ですらショートさせる程の熱を生み出した。

「~~~~ツ! アリガト! ボク、前の方に行く、ネ!」

走って遠ざかるレヴィの声が呆然とするエクスに届く。エクスはとりあえず誤解が解けたと思うことにして、一息つく。

人の間を走り抜け、エクスから見えない壁際に寄るレヴィ。その顔が赤いのは走ったからだけでは無いだろう。落ち着きを取り戻す為に深呼吸をすると、口からポロリと言葉が盛れた。

「もう、めちやくちやびつくりした…」

「アー、めちやめちやびつくりした…」

レヴィとのちよつとした1件で焦ったエクスだが、開始前には何とか落ち着きを取り戻していた。今では周りと同じで開幕を今か今かと待ち構えている。

そして、緊張感が最大まで昂るスタート地点で、遂にその言葉が発せられた。

『スタート!』

途端に生徒達が狭いゲートを抜けようと動き出す。結果、スタートゲートはぎゅうぎゅうに詰まってしまった。

少し後ろに居たためにその中に入らなかったエクスはどうやって通り抜けるかを考える。

そんな中、いち早く抜け出す生徒がいた。

「俺が1番だぜ!」

ミサイルに跨り、圧倒的なスピードで進んでいく生徒。

『最初に飛び出したのは誰だア!?……普通科、ヤミクモケリンだあああ!!』

プレゼント・マイクの口上に合わせてミサイルの上でポーズを決めたり叫んだりするケリン。

だが、順調に見えたケリンのミサイルは徐々にコースの外に向かって行っていた。

『ありやどうなってるんだ!?!イレイザー!』

『ただのミスイルが綺麗にカーブを曲がれるわけがないだろう』

イレイザーヘッドの言った通り、ミスイルは搭乗者の意志を無視して真っ直ぐに進んでいく。結果、コースアウトしても止まることなく進み続け：

「ぐわああああああああ!!！」

空中で大爆発を起こしたのだった。

その一部始終を見ていたエクスは心の中で手を合わせる。そして、ケリンの真似をすることにした。

「ちよつとすみません」

「は？なんだおま痛てえー！」

目の前で詰まっている人間のうち一番近かったものを跪かせ、それを足場に詰まった人間の上を走る。下からはブーイングが巻き起こっている為、戦々恐々としながらエクスは進んでいく。

ふと前を見れば、アルスが魔法で飛んでいるのが見えた。

人の道の残りを飛び越えて、地面を走る。

「師匠！魔法使えるのに思ったより遅いですね！」

アルスの横に並んで走るエクス。アルスは一瞬驚いた様子だったが、直ぐにエクスのジト目を向ける。

「えびせんばい、なんでこの状況でもボクに近づいてくるわけ? ボクのこと大好きかよお」

「え、何勘違いしてるんですか…。師匠が1人寂しく進んでるのが見えたから、わざわざこの優しい弟子が来てあげたんでしよう」

アルスの言葉を真正面から鼻で笑いとばすエクス。アルスの頬がピクピクと引き攣り、額には青筋が浮かぶ。

「いやいや、この競技って明らかに1人で挑むやつだからね?」

が、アルスはあくまで冷静に言い返す。魔法使いとしてのプライドが声を荒らげるのを許さなかったのだ。

「チーミングが駄目だなんて言われてないですよ? 師匠話聞いてました?」

「ぶっ飛ばすぞお!」

魔法使いのプライドなど、エクスの煽りによってどこかに飛んでいった。

「おまつ、まじでそろそろいい加減にしろよ! ボクだって怒る時は怒るんだからなあ!」

「ハハハ。今の師匠の顔、饅頭みたいですね」

「うがああああ!!」

怒りのあまり絶叫をする。が、エクスはそれを見て更に爆笑するだけだ。

やがて、アルスも少し落ち着いてきた頃。コース上に大きな影が見えてきた。

「あれ、入試時のロボットですね」

「あれからあんまり経ってないのになんか懐かしいね」

コース上に大量のロボが設置されているのを見て、エクスとアルスが懐かしむ様な声を上げる。

「じゃあ師匠は俺に着いてきてください」

「え？なんで？」

エクスの言葉にアルスが首を傾げる。

そんなアルスの前にながら、エクスはニヤリとして答えた。

「俺に任せてください」

「つて言つてたのは誰だっけ？」

「やつぱり持つべきは頼れる師匠ですね。もう全部師匠に任せます」

「なんでえびせんぱいの面倒まで見なきやいけないんだよう」

エクスとアルスが走りながら相変わらずの会話を交わす。エクスの服は先程に比べて心做しかポロポロに見える。

「でも、幾らえびせんぱいでもあの数に素手で突っ込むとは思わなかったなあー?」

アルスの蔑むような視線を受けてエクスは顔を逸らす。

そう、エクスは第1関門であるロボインフェルノに対してなんと素手で殴りかかったのだ。

最初は敵をテンポよく破壊していたのだが、0ポイントが三体登場したことにより形勢は逆転。潰されそうになっていたエクスを何とかアルスが引つ張って逃げてきたという訳だ。

「…言い訳させてください」

「言ってみろお?」

アルスが促すと、『どうしてだか分からない』という様な顔をしながらエクスは頭をかいて続けた。

「入試で一体倒したんですよ。だから、一体も三体も変わらないかなって」

真面目な顔でそんな事を言うエクス。

「えびせんぱい、大丈夫ですか?」

「いや、入試の時はノーダメだったんですよ!だからいけるかなって」あた「まアツハハハ、師匠めちやめちや口悪いっすね」

言葉で殴り合いながら進む。

すると突然、何かが後ろから物凄いスピードで飛来してエクスとアルスの間を抜けていった。

「うおおあぶねえー！」

足を地面に擦り付けてスピードを殺しながら体ごと後ろを向く。目の前に何かを振り上げる人影があつた。

エクスは咄嗟に頭を突き出して相手の鳩尾に頭突きした。

「つぐ…」

「顎！頑張れ！」

腹を抑えてよろめく、紫髪に棒状のロボのパーツを持った男子生徒。その奥に星に座る金髪の女子生徒の姿。

「えびせんばい、走って！」

「ああもうまじで意味わかんねえー！」

「オイ！逃げんな！」

絶叫しながら後ろから星（？）が飛ぶ中逃げる。アルスも後ろに向かつて球体の風を飛ばしているようだ。

「剣持、いい加減起きろ！」

「いや、まじで痛いから!?!お前も一回食らってしまえ！」

何故か争っている様子の声を背中に受けながら進むエクストアルス。その数百メートル先に、第2関門《ザ・フォール》が待っている。
体育祭はまだ始まったばかりだ。

ふざけた障害物競走を全力でクリアします!!

後ろから謎の2人組に追われながら走るエクスとアルス。2人の視界に第2関門の『ザ・フォール』が見えてくる。

「うわ、なあにあれ…」

地面に開いた大穴をみて驚くアルス。

「…師匠」

「やだ」

エクスからの呼びかけを即座に切り捨てるアルス。エクスが何を考えているか理解した故の反応である。

「なんでですか。ここに困ってる弟子が居るじゃないですか」

「どーせ? 『僕も浮かせてください』なんて言うんでしょ? 嫌だよ」

「困ってる可愛い弟子を見捨てるんですか?」

「別に可愛くないし、弟子だとしてもライバルを助ける訳ないじゃん」

アルスが正論でエクスをねじ伏せる。だが、アルスの予想と違いエクスは声を荒らげることなく平然とした態度のまま。

その姿に何となく嫌な予感を感じながら、第2関門を超えるために少しずつ高度を上げるアルス。穴スレスレに飛ぶとふとした瞬間に落とされかねないからだ。

4メートル程の高さに浮いたアルスは、何故かエクスが速度を落としていることに気がついた。

後ろの2人から何かされたのかもしれないと心配するアルス。だが、下を走るエクスは悪ガキのような笑顔を浮かべていた。

「師匠ー！いきまーすー！」

声を張り上げ、加速するエクス。それを見て全てを察したアルスは距離を取ろうとして

「よいいしょおー！」

次の瞬間、アルスに向かってエクスが飛び上がった。距離を取ろうとしていたアルスも思わず受け止める姿勢をとる。

結果、アルスは不本意ながらもエクスを両手で吊り下げて進むこととなった。

「えびせんぱい、ボクが受け止めなかったらどうするつもりだったの！」

アルスと両手を繋いでぶら下がるエクスにジト目を向けつつ問いかければ、エクスは相変わらずのクズな返答を返す。

「んー、師匠を引きずり下ろして道連れにしてみましたね」

「うわー、ほんとにないわー」

レース中とは思えない空気を漂わせながらザ・ウォールの上空を進む2人はゆるい会話を交わしながらザ・ウォールの間地点を過ぎる。

「行け！顎！」

「耳元で叫ぶな！うるさいんだよ！」

アルスとエクスが手を離して上下に別れた次の瞬間、つい先ほどまで2人がいた場所を紫色の剣閃が通り抜けた。

「ほらあー！だから絶対避けられるって言ったじゃん！」

「はあー!?お前が下手なだけだろうが！」

アルスがなんとかエクスをキャッチして振り返る。後ろには案の定、星マークのような浮遊物に乗ってギャンギャンと言い合う、先程エクスとアルスを襲撃してきた2人組。

「僕が前線張るから星川は援護頼む」

「りよーかい、当たっても文句言わないでね」

「いや、それは言うわ！フツーにそれは文句いうわ！」

「チツ…いちいち細けえなあ！」

星川と呼ばれた少女の手の動きに合わせて、2人の乗る星が動き出す。剣持の乗って

いる星は猛スピードでエクスに向かって進み、星川の乗った星はその後ろからゆっくり進んでいる。

「師匠、俺のこと頑張って投げれたりします?」

「え?なんで?」

「空中戦じゃ明らかに分が悪いでしょ。地上に降りれば片方は俺が引き受けますよ?」

2人の視線が交差する。そして、アルスがため息をついた。

「仕方ねーなあ」

「じゃ、早く投げてください。後ろから来てるんで」

「分かってるっつー…の!」

魔法で手にかかる負荷を無くしつつ、筋力を最大まで上げてエクスを投げ飛ばす。

「うおおおおお!すげえ!ジェットコースターみたい!」

風を切りながらエクスが飛んで行く。

「星川、これどーすんの!」

「くっつ、あたしがこっちやるから、そっち任せるわ!」

「了解」

星川の声を聞き、剣持は足場から飛び降りる。

落下しながら手に持っている棒を前にかぎすと、落下速度が速まってどんどんエク스에近づいていく。

「いい加減、諦めろ！」

剣持がエクスに向かって棒を振り抜く。エクスは空中でなんとか身をかわす。

「は!?!なんか切れたんだけど!?!」

棒が当たった体育服の裾が切り裂かれる。よく見れば、棒はいつの間にか鋭い刃物と化していた。

「あんま動くとか怪我するぞ! 大人しくしろっ」

「いやいやいや! だったらそれ仕舞って貰えます!?!」

空中で取っ組み合いをしながら落ちる2人は、次第に地面に近づいていく。

「あ待って、着地のこと考えてなかった!」

「お前馬鹿じゃん!」

ぎゃああああという叫び声と共に2人が地面に衝突する——その寸前、突風と星がそれぞれを浮かせて助けた。

「師匠おお!」 「星川!」

バツ! という音が聞こえそうな程の速さで振り向く2人に、上にいる2人は同じように頭を押さえた。

「いや、助かって良かったですね!」

「つすねえ。じゃ、さっさとゴールしましょうか」

「ですね!」

助かった2人は笑い合い、共にゴールを目指して走り出す――

「じゃねえよ!俺たちは敵どうしだろ!」

頭を抱えて叫ぶ剣持。エクスはそれを無視して走り去っていく。

「おい待てえ!逃げんな!」

「いや、そっちは武器あるのにこっちは素手とか戦う気失せるんで。逃げて当たり前でしょ」

前方を走るエクスの言う言葉に、剣持はグウの音も出ない。

「じゃ、じゃあお前の師匠を2人で倒すぞ!いいのか!」

剣持が棒の先でアルスを指し示す。それを見たエクスは悩む素振りもなく言い返した。

「まあ、僕がゴール出来るならいいですよ」

次の瞬間、エクスの体を雷が消し飛ばした。

「…仲間じゃないの?」

雷を放ったアルスに星川が問いかける。アルスは頬をふくらませたまま答える。
「あんな奴知らない。ほんつとにありえない」

力任せに腕を振り回すアルス。その姿に星川も同情の意を隠せない。

その下で、地に伏したエクスを剣持が介抱していた。

「おーい、大丈夫か…?」

恐る恐る、エクスの体を揺さぶる。

どういふ素材で出来ているのか、体育服は多少焦げている部分はあれど、その原型は失われていない。

何度が揺さぶっても起きる気配がないのもう少し強めに体を揺さぶると、うめき声と共にゆっくりと目を開いた。

「…何があつたんですか? 物凄い音がしたあとから記憶がないんですけど…。あとなのか、体が痺れて動けないっす」

倒れたまま、少し囁れた声を出すエクス。その目の前に誰かが降り立った。

「あつれーえびせんぱいこんなどこで何してるんですかー?」

しゃがみこんでエクスの頬をつつくのは、エクスを吹き飛ばした張本人であるアルスだ。

「師匠っていい性格してますよね」

「えびせんぱいには言われたくないですー」

口を尖らせながらエクスの脇腹を蹴り続けるアルスト、それを恨みがましい目で見つめるエクス。

そんな2人を見て、劍持と星川は顔を見合わせて大きく脱力した。

「A組つてめちやくちや威張つてるイメージあったけど、なんか想像と全然違つたわ」

「僕達から見たお2人の印象つてただの頭おかしい奴らですからね」

呆れた声を出す2人にエクスが異を唱える。

「僕はまともなんですけど。誰かさんと違あああああああ!」

エクスの言葉が終わらない内にアルスがエクスの体に電流を流す。

「で、えびせんぱいもう一回言つてみて?」

にこりと笑つて首を傾げるアルスをエクスは睨みつける。そして、意を決したように

声を張り上げた。

「師匠は顔がでけえなあ!」

「おう、死ね」

エクスの体がまたもや雷で吹き飛ばされた。エクスの体が空中で舞う。

その様子に劍持も星川も完全にやばい物を見る目付きになっている。

完全に気絶したエクスを魔法で受け止め、自分の横に浮かせながらアルスが2人に向

き直った。

「それで、どーするの？もうこっちは戦う気は無いよ。1人やられちゃったしね」

やられちゃったと平然と口にするのに対して口元を引きつらせつつ、2人は目線を交わして頷く。

「こっちももう戦う気は無い……というより、貴方達を見てたらそんな気も失せました。とりあえず、この競技においてはもう手は出しません」

「次会った時はぶっ潰すけどね！」

「お前は直ぐにそういう事言うのをやめろ」

星川がアルスに人差し指を突きつける。その横から剣持が星川の手を握って上に向ける。

「じゃあせつかくだし、一緒に行かない？ボク1人じゃ多少不安になって来たし」

「あー、それいいですね。一緒に行きましようか」

アルスの提案に乗っかる形で剣持も同意する。星川も特に反対はしないようだ。ちなみに、第3関門は星川とアルスがいる時点でお察しの為、省略させて頂く。

目を開けると、控え室の天井が目に入る。

「やつと起きタ？あんまり起きないから叩き起こそうかと思つてたところだったんだケド」

「…ナチュラルに怖いこと言うのやめてください」

起き上がつてみれば、ベンチの隅にレヴィさんが座っていた。俺が寝ていたからそんな所に座っているのだろう。

「障害物競走つてどうなりました？途中から記憶ないんでなんも分からないんですけど」

具体的には師匠に顔がでかいと言つたあたりからの記憶が無い。師匠がゴールまで運んでくれてれば嬉しんだけど…。

「気にしないデ、エクスクくんはちゃんと第2種目に進出してヨ」

レヴィさんの答えを聞いて体から力が抜ける。一応運んでくれていたようだ。

「デモ、なんでエクスクくんは気を失つてたノ？」

こてんと可愛らしく首を傾げるレヴィさんに額を押さえる。どう説明すればいいのか全く分からない。

「…まあ」

「？」

「……成り行きで？」

「…なりゆキ」

「……………はい」

レヴィさんの頭の上にはてなマークが飛び交っているのが見える。

だけど、仲間であるはずの師匠にやられたとか意味がわからないし、そうなった理由は俺自身の保身のためにも言うわけにはいかない。

「まア、別にいいんだけどサ。エクスクンが言いたくないなラ」

「うぐ…」

拗ねたようにも見えるレヴィさんの態度に思わず変な声が出てしまった。

レヴィさんにどうやって説明すればいいか考える。起こったことをそのまま言う…のはできれば避けたい。

出来ることなら、物凄い敵と戦って相打ちになったところを師匠に拾われたという設定にしたい。だが、それだとその敵とはレヴィさんも当たっていないとおかしいからこの言い訳は使えない。

どうしたものかと頭を悩ませていると隣からクスクス笑う声が聞こえてきた。

見てみれば、レヴィが可笑しそうに笑っている。

「なんで笑ってるんですか」

「ゴメン、エクスクンがあんまり真剣に考えてるから可笑しくて」

そこでようやく、自分はからかわれていたのだと理解した。

「なるほどね。レヴィさんはそういう事するんですね。体育祭終わるまで覚えといてください」

「エ〜? なんのことだっけ?」

「今日のレヴィさんめっちゃめっちゃ煽るじゃないですか」

とりあえず何かしらでやり返すことを心に決めながら立ち上がる。

「第2種目って発表されました?」

「マダだヨ〜。この休憩が終わったら、第1種目を突破した人だけまた並ぶ感じ」

「わかりました」

「?どこか行くノ?」

扉に手をかける俺の背中にレヴィさんの声が掛かる。

「適当に散歩してきます。一応体動かしときたいので」

「ソツカ。行つてらっしゃーい」

「行つてきまーす。…何だこの会話」

「はよ行ケー!」

レヴィさんの声に押されて控え室を出る。廊下は生徒がまばらに行き来しており、ど

こか雰囲気も明るい様に感じる。

なんとなくの勘に従って右方向に通路を進む。休憩が何分かは知らないが、どうせア
ナウンスがあるだろうから気にしなくて良いだろう。

「おい、お前」

にしても、これだけ廊下が広いと言うことは物凄い生徒数なのだろう。女生徒が3人
横に並んでいても、その横を両手いっぱい広げて余裕がある程度には広い。

「おいって。聞けよ」

これだけ広さがあるなら何かに乗って爆走したい気持ちもあるが、そんなことをすれ
ばぼぼ間違ひなく退学にされるだろう。あの先生なら絶対にする。

「無視すんなやコラー！」

「うおいてえ！」

突然背中に衝撃が走り、それに伴って体が前に倒れる。

「うげえ！」

「叫び声キモ」

後ろを見てみれば、見覚えのある顔と金髪。障害物競走の時に襲ってきた2人組の片
割れだった。名前は星川だったはず。

「…なんの用ですか」

起き上がり、服やズボンを軽く叩いて埃を落とす。そんな俺を見て星川さんは小馬鹿にしたような顔をする。

「いやいや、とぼけても無駄だから。スパイとかやめて貰えますー?」

「何言ってるかわかんないんですけど。スパイってなんですか」

まじで身に覚えがないので全力で否定させてもらう。すると、星川さんは少しずつ顔を青くしていく。

「…まじで違うの?」

「だから何の話ですか?」

「いやこの辺、B組の控え室だから…」

確かに、ドアの上のプレートを見る限りこの辺りはB組の控え室があるようだ。それで俺はA組の生徒。なるほど。

「え、土下座とかした方がいいですか?」

「…ん?なんで?」

「だって明らかに俺怪しいやつじゃないですか」

体育祭中、自分達の控え室付近に違う組の生徒がいたら過度に反応するのも仕方ないだろう。俺は気にしないが。

星川さんもその反応をする側の人だったのだろう。

「いや、別にこつちの勘違いだったし…」

「そう？じゃあ謝らないわ。冷静に考えたら俺が謝るの意味わかんないしね」

「…なんでかわかんないけど今一瞬イラツとしたわ」

「意味がわからない」

この人は理不尽の塊なんじゃないだろうか。突然襲われるし、突然体当たり（多分）されるし。今のもなんでイラツとされたのか理解できない。

「不本意ですけどここは引き分けにしましょう」

「…うん」

「じゃあ僕はこれで」

これ以上話が長引くのはめんどくさいので話を切り上げてこの場から退散する。

…このまま進んでも同じ目合いそうだし、自分達の控え室に戻ることにしよう。

そう思つてA組控え室の方へ歩き出す。

「あ、待って！」

「んえ？」

いきなり大声で呼ばれて思わず振り返る。星川さんがこちらに歩いてきていた。

「あたし星川サラ。名前教えてよ」

「僕はエクス・アルビオです」

俺の名前を伝えると星川さんは驚いたように目を見開く。

「噂のエビオつてもしかして「人違いです」」

星川さんが言い切る前に否定する。としかかなんだ。エビオは百歩譲つても『噂の』つてまじで意味がわからないからね？これあれか。夜見さんと葉加瀬さんが言つてたやつか。

「へえ、エビオつてあんたなんだ？」

「違うつて言つてるじゃないですか。」

こちらを探るような目線の星川さんに思わず目をそらす。

「ふくん、あたしそろそろクラスに戻るわ。じゃあね、エビー！」

ニコニコしていかにも楽しそうに控え室に入っていく星川さん。こうやって噂は広がっていくのだろう。

「せめてエビオつて呼べよ……」

エビはもはや人ですらないだろ。エビオも人かは怪しいけど。

体育祭第2種目も勝ち抜きます！

エクスが短い散歩を終えて控え室に戻ろうとしていると、廊下にやけに女子生徒が多いことに気がつく。

その女子生徒達の見つめる先にあるのはA組控え室だ。

不審に思いながらも廊下を進み、そして女子生徒達が見ているものを理解する。

「あ、エクスさーん！無事…とは言いがたいかも知れませんが、とにかく第1種目は突破されたようで何よりです」

爽やかな笑顔で駆け寄ってくるのはサポート科の加賀美だった。

「お疲れ様です。社長も第1種目突破した感じですか？」

「はい、なんと…え？なんか呼び方おかしくないですか？」

加賀美のセリフにエクスは首を傾げる。どこかおかしいところがあったのだろうか。

「エクスさんって実は葉加瀬さんよりの思考してますよね」

「それって褒めてます？貶してます？貶してるならブチ切れますけど」

「…まあ、立ち話もなんだし座りましょう」

「え、なんで答えないんですか」

加賀美に促され、どこか話をはぐらかされた事を感じつつエクスは廊下のベンチに座る。エクスが座ったのを確認して加賀美もその隣に腰を下ろした。

「いやーきつかったですね。エクスさんも気絶したまま連れてこられてましたけど、やっぱり難しかったですか」

「まあ…障害物競走自体は余裕、だったんですけど…思わぬ敵にやられましたね」

加賀美の質問にお茶を濁すエクス。加賀美もなんとなく察したのかあー…という声を上げながら小さく頷いている。

「まあ、この体育祭って全員で蹴落とし合う感じなんで気にしてはないんですけどね」
「ま、そうですね。そういうイベントですからねえ」

物は言いようを体現したようなエクスの発言に見事に引つかかる加賀美。

このような嘘じゃないけどそのまま受け取ると違う意味になる言葉を軽々と考えつくのはエクスの得意なことの一つだ。

「エクスさんって優勝したらどうします?」

「…どういう意味です?」

単純に理解できずに聞き返すエクスに加賀美は真面目なトーンで答える。

「優勝したらかなりの注目を浴びるじゃないですか。そしたら、職場体験にも結構影響すると思うんですよ」

「あー…、なるほど」

雄英の職場体験についてエクスはあまり詳しくない。というより殆ど知らないのだが、大凡の検討はつく。

「でもまあ、優勝、出来るならしたいですけどね。けど別に優勝しなくても職場体験は出来るでしょうしあんまり気にしてないです」

「…なるほど」

「社長はどうなんですか？」

エクスに聞かれ、加賀美が大きく息を吐いて背もたれに体重をかける。

「実は私って、ヒーロー志望なんですよね」

「え、そうなんですか!？」

「実は。これまだエクスさんにしか言っていないので他言無用でお願いしますね？」

驚くエクスとは裏腹に酷く落ち着いた様子で加賀美は語り出す。

「私の個性って、正直、何も出来ない没個性なんですよ。ただ周りと関係を築きやすくなるだけで。」

といつてもまあ、この個性のおかげで知り合えた人とかも居るんで全然この個性がいやって訳じゃないし、むしろ感謝してるんですけど…。

それでもやっぱりヒーローにはなりたくないじゃないですか。カッコイイですし。小さ

い頃からの夢なんで。

そこで考えたのが、仮面ライダーG3とかアイアンマンみたいな強化スーツを使うことだったんですね。だからサポート科に入った訳です」

「…すごいですね。上手く言えないんですけど、諦めないで考え続けたのとか、めっちゃ尊敬します」

エクススの言葉に微笑みながら、加賀美が続ける。

「ありがとうございます。いやあなんか、恥ずかしいですね。こういうの。」

……でまあ、先程のエクスさんの質問にお答えすると、サポート科って自分の作ったアイテムは持ち込みが許可されてるので、優勝したらそれを掲げて『個性なんかなくてもヒーローになれる。だからどんな夢でも捨てるな』って言いたいですね。

戦えない私でも化学の力でヒーローになれるってめっちゃめっちゃロマンあるじゃないですか。

だから私は、この先非戦闘系の個性を持って生まれた子達の夢の為にもヒーローになりたいです」

なんか話それちやいましたね、と笑う加賀美の手をエクスは両手で掴む。

「なりましょう、社長！社長なら絶対になれますよ！絶対！その為にも絶対優勝してください！」

エクスさんの真剣な瞳を見た加賀美は一瞬驚いたような表情になった後、照れくさそうに笑った。

「エクスさんっていい人ですね。まさかライバルに優勝しろと言われるとは思いませんでした」

「それだけ社長の夢は素晴らしいって事です。でももし、社長と戦うことになっても俺は手加減しないんでそこはよろしくお願いします」

「…っ、望むところです。誰が来ても勝つだけなので」

互いに手を握り、火花を散らす2人。そこでエクスと加賀美は揃って違和感に気がつく。2人が揃って周りを見ると、大勢の女子と一部の男子に囲まれていた。

「えっ…と、これなんですかね。エクスさんにか仕掛けました?」

「違います。俺じゃないです。ていうかあの人誰ですか」

エクスの方線を追って見れば、控え室廊下になぜか明らかに部外者であろう女性の姿。幼児番組に出てきそうな服装の女性はエクスと加賀美を見ながら息を荒くして必死に写真を撮っている。

「もう私にはなにもわからないです。エクスさん何とかしてください」

「無茶ぶりしないでください。僕が何か出来ると思います?」

状況が理解できない上に未知の状況であることからその場を動けない2人。そんな

2人に救いの手を差し伸べるように放送が響いた。

『さあ休憩もあと5分!第1種目を突破したチャレンジャー達は直ぐにスタジアムに集合だ!』

「よし、行きましょう」

「つすね。お互い頑張りましょう」

2人はその場から逃げるように足早にスタジアムへと向かった。

「予選を通過した上位42名の皆はおめでとう!残念ながら落ちちやった人も安心しなさい!まだ見せ場は用意されてるわ!そして次からいよいよ本選よ!ここからは取材陣も白熱してくるよ!キバリなさい!!」

ミッドナイトの声が響き、ステージにあるモニターが灯る。ミッドナイトが指し示すモニターに一同が注目する。

「コレよ!」

モニターに映し出される文字。そこには大きく『騎馬戦』と書いてあった。

だが勿論、雄英の騎馬戦がほかの騎馬戦と同じであるはずはない。ルールはこうだ。

参加者は最低2人から最高4人で騎馬を組む。そして、先程の障害物競走の順位によつて下から5ポイントずつ与えられ、その上位チーム16名が次の競技に進むことが出来る。相手のポイントはハチマキを奪うことで奪える。

又、制限時間は15分でハチマキを奪われようと騎馬が崩れようとアウトにはならぬらしい。

そして最後に、1位には1000万ポイントが与えられるとのこと。

「なるほどなあ」

単純でありながら様々な作戦を立てることが出来るルールに、エクスは素直に感心した。

説明が終わり、騎馬を組む時間が与えられた。

「師匠ー。組みましょー。どうせ1人ですよね?」

エクスがアルスに話しかけると、アルスは嫌そうな顔をした。

「なんでそんなこと言うやつと組まなきゃいけないんだよ。それにボク、もうチーム決まってるし」

「え、マジで言ってます?」

アルスのドヤ顔を見てエクスは驚愕する。だが、アルスの個性はかなり強力なものであり真つ先に狙う人物が居たとしても不思議ではない。

「それじゃ、僕のチームが行くまでせいぜい生き延びてくださいね?」

「おう」

アルスと別れて、今度は幼馴染の姿を探す。目的のレヴィは思いのほか直ぐに見つかった。

「レヴィさん。一緒組みましょう」

手を振りながらレヴィに走りよる。すると、レヴィは困ったような表情になった。エクスは嫌な予感がした。

「ゴメン! 実はもう組んじゃってテ…」

「まじで言ってます?! みんな組むの早くないですか!？」

まだ始まってすぐだと言うのに、こうも組むのが早いとはどうなっているのか。恐らくは説明の段階で既に目をつけていた人達だろう。

「エクスくんモ、ハヤクしないと組む人いなくなるかもヨク?」

「うっわまじじゃん! まじで最悪だわ。レヴィさんも頑張ってくださいね!」

「エクスくんもネ〜!」

手を振るレヴィに見送られながらエクスはメンバーを探す。だが、始まってすぐにも関わらず続々とグループが出来始めていた。

そんな時、中心から少し外れたところで、エクスは自分の友人が1人で立っているの

に気がついた。

誘わない理由は無いと、エクスは走り出す。

「葛葉さん！組みましよう！まだ誰とも組んでないですよね！」

エクスに声を掛けられてビクツと肩を震わせた後、葛葉が振り返り、次第に目を輝かせていく。

「え、俺と？まじ？」

「まじです。組みましよう。俺もまだ一人なんで」

エクスに誘われ、葛葉が笑顔を浮かべる。

「もう全っ然おっけーよ。早く他のメンバーも探そうぜ」

「ですね。でも他に宛てはあんまり…」

エクスが首の後ろに手を当てて辺りを見回すが、自分達と組んでくれそうな人物は見当たらない。

「最悪このまま2人って手も…」

「だとしたらクソ弱え騎馬になるな」

「つすよねえ…」

肩車でフラフラ歩く騎馬では戦いようもない。

「葛葉さん、だれか誘ってきてくださいよ」

「いや無理。俺のコミュ力じゃ逆立ちしても出来ねえわ。A B Oはどうなの?」

「仲良い人総当りして葛葉さんだけですね」

うんうんと頭を悩ませる2人。そこに駆け寄る人影が1つ。

「エクスさん、組みましよう。あんな別れ方しましたけど背に腹は代えられません」

加賀美がエクスの肩に左手を置き、右手を自身の膝に乗せて肩で息をしながら途切れ途切れに言う。

「この人誰?」

「とある会社の社長でお金持ちです」

「まじ!?金持ちなの!?!」

「エクスさん、誤解されるような言い方はやめてください」

思いつきり嘘という訳では無いが殆ど嘘のような言葉に加賀美が焦ったように言う。

「あくまでまだ次期社長候補ですし、お金だつて貯金している分しかないんで!」

「え、まじもんの未来の大企業の大企業の社長の卵?!?金持ちじゃん!」

「だから違いますって!」

金だ金だと騒ぐ葛葉を落ち着かせようとする加賀美とふざけて葛葉に乗っかるエクス。

「あ、そうだ。エクスさん。この方を紹介して頂けると有難いんですが!」

「葛葉さんです。ビビるほど強いです」

「葛葉です。養ってください」

「雑!? あまりにも雑すぎませんか!? あと葛葉さんはいい加減お金の話題から離れましょう!」

緊張感の欠片も感じられない空気感の中、もう1人エクス達3人に近づくと人物が居た。

「あの、ここってまだ入れますか?」

3人の顔を見比べながら、低い姿勢で声をかけてきたのは第1種目でエクスを襲った片割れである剣持だった。

「星川さんとかと組めばいいじゃないですか」

エクスの純粋な疑問の言葉に頬を掻きながら剣持は口を開く。

「星川は他の生徒と組んだんだよ。んで、B組が思ったよりグループ別れててこれは入れないなって察したから、人数まだ入りそうなここって…」

「ん…? つまりハブられたってこと?」

「それはひたすらに話が飛躍しすぎ」

首を傾げる葛葉に被せるようにツツコミをする剣持。そして、じゃなくて!と叫び、話の流れを無理やり戻した。

「で、どうつすかね…?入れて貰えます…?」

劍持の言葉に顔を見合わせる3人。

「どうします?僕は全然いいですけど」

「んー、任せる!」

「私的には劍持さんが居たらボケとツツコミの比率が合うので有難いのですが…」

ヒソヒソと話をする3人を固唾を呑んで見守る劍持。数十秒経って、3人が劍持の方
に向き直る。

「えー、じゃあ葛葉さん…」

「え、俺!?いやいや!社長、頼みますよ〜!」

「結局私ですか!?!」

コホンと咳払いをして、加賀美が1歩進みでる。

「私達としては劍持さんにぜひともうちのチームに入って頂きたいです。いかがでしょうか」

加賀美の言葉を聞いて劍持の表情が明るくなる。

「お願いします!」

「では、これからよろしくお願い致します!」

劍持の返答を聞き、頭を下げる加賀美。それに劍持も頭を下げる。そして、互いに顔

を上げたあとに加賀美が両手を叩いた。

「それじゃ改めて！お互い自己紹介しましょうか。結構適当……というか、所属がバラバラなチームなので作戦とかも立てましょう！ではまずは、エクスさんからお願ひします」

加賀美に促されてエクスに視線が集まる。

「えー、エクス・アルビオです。よろしくお願ひします。…フハハ、何だこの空気」
エクスに釣られて笑いが広がる。

「んんっ、えーでは葛葉さん！お願ひします」

「葛葉です。勝ちます。よろしく」

葛葉の自己紹介に3人から歓声上がる。

「いや待って、なんだよその反応。めちやくちや恥ずかしいんだけど!」

うわああと両手で顔を覆ってしやがみこむ葛葉を見てエクスが爆笑する。

「次は、えー…すみません、お願ひします」

名前が分からないので手を差し伸べて剣持に促す。剣持も頷いて口を開いた。

「剣持刀也です。えー…、やばい、特に何も言うこと無かったわ。よろしくお願ひします」

ペーリと頭を下げる剣持。

「そして私が加賀美ハヤトです。サポート科なのでサポートアイテムを使えますから皆様の力になれるように尽力させていただきます」

よろしくお願いします、と改めて頭を下げる加賀美に拍手が沸き起こる。

「それで、早速なんですけど作戦を立てたいと思います。うちのチームは絆も何も無いようなチームなので、運要素を極限まで削っていいこうと思いますが…如何ですか?」

「だいじよぶです」「おけ」「異議なし」

加賀美の問いに雑に返す3人。その事に苦笑いしながらも加賀美が続ける。

「それで、まずは騎手なんですが――」

『いくぜ!残虐バトルロワイヤル!カウントダウン!』

緊張感が辺りを支配する。

『3!』

『2!』

『1!』

『スタート!!』

スタジアム中に煙が溢れた。

【#雄英騎馬戦】僕たちのチームが最強です！

スタジアムに蔓延する煙によって、視界と呼吸が一気に遮断される。

『オイオイこりやどーなってんだ!? イレイザー!』

『耳元で叫ぶな。ただの煙幕だ。サポート科のやつだろう』

実況のプレゼント・マイクに聞かれ、イレイザーヘッドが解説をする。

そんな実況や観客席の混乱をよそに、スタジアムでは既に状況が動いていた。

爆豪が爆風で、アルスが魔法で、拳藤は手のひらを肥大化させ、対処出来る個性を持った生徒が續々と煙を晴らしていた。

「ハチマキがねえ!」

スタジアムの煙が晴れていく中、1組の騎馬がそんな叫び声を上げる。それを皮切りに次々とハチマキを奪われたことに気づく騎馬が現れた。

そんな中、ハチマキを奪われなかった事で冷静に周囲を見ていた轟焦凍はその犯人であろうグループを発見した。

「さっきのはあいつらか……!」

轟の視線の先には、ガスマスクに奇妙なゴーグルを付けた4人組の騎馬。

「やっぱりえびせんぱいも居るのかあ」

轟の視線の先を見た右翼のアルスが呆れたような、それでいてどこか嬉しそうな声を出す。

「俺たちの狙いは変わらねえ。1000万だ。あいつらにも注意するのを怠るな」

「ああ!」「はい!」「おう!」

「うははははは!やばい、楽しすぎるう!」

「雑魚どもがよオ!俺たちに勝てると思ってるんのかあ!?!」

「お前らイキリすぎだろ!まあ分かるけども!」

「こうやって作戦が上手くいくのは爽快ですね!」

葛葉を騎手とした騎馬がスタジアムを縦横無尽に駆け回る。騎馬を組んでいるエクストと加賀美、剣持の足には補助アーマーが着いており、走っても走っても疲労が溜まりにくくなる上に足音をかなり軽減している。

ガスマスクとゴーグルを脱ぎ捨てる葛葉を見ながら、加賀美が笑う。

「かんっぜんに作戦通りです!むしろ、多少ですが予想よりも多くのポイントを取れた

のはかなりでかいです！」

最初に煙幕と足のアーマーを使って一気にポイントを稼ぐ作戦は加賀美の作戦の第1段階だ。

煙幕で視界を遮り、足音を消してハチマキを取る。単純ながらもサポート科がほぼ居ないこの状況において、使えるチームは他に居ない。

そして、熱を感知して人間のみを探すゴーグルで近くにいた騎馬のポイントを片っ端から奪ったのだ。

「いや、やつぱすごいつすね。社長のサポートアイテム！これぞ至高！って感じですね」

「嬉しい限りです。でもやつぱり耐久性とか改良出来る点はまだまだありますね」

脱ぎ捨てられたゴーグルを振り返って加賀美が言う。その言葉通り、ゴーグルは地面に落ちた衝撃だけでそこそこ破壊されていた。

騎馬の3人が付けている補助アーマーについてもそうだ。こちらはバッテリーがかなり少ないため、もうじき機能を停止するだろう。

だが、あくまでまだ第1段階。葛葉の背負う円錐形の装置などまだまだ使えるものがある。

「皆さん、バッテリーが切れたら次のステージに入ります！移動しましょう！」

加賀美の合図で葛葉の騎馬はスタジアムの壁に向かって走る。目的は壁に近づくと、1000万ポイントの緑谷チームから離れることだ。

ここで欲を出して1000万に近づきすぎればそれだけ狙われやすくなる。1000万を狙うのは最後だ。

「社長！バッテリー切れました！」

エクスが声を発すると同時に葛葉の騎馬はスタジアムの壁にたどり着いた。

「劍持さん、お願いします！」

「任せ……ろっ！」

振り返りざまに発動した劍持の個性により、葛葉の騎馬の周りの地面が研磨されてツルツルの表面になる。葛葉達を追って来ていた騎馬が数機、足を滑らせて転倒した。

「このまま行けば、間違いなく入賞は出来ます。でも皆さん！それでいいんですか!? このポイントに、甘んじていいんですか!? 答えはNOです！我々が、1位を取ります！」

「「「「「「「「「「!!!」」」」」」」」」」」」」

「その為にも、今から終了の3分前までこのポイントを守り抜きます！」

「ふざけた真似しやがって……」

自分のポイントを奪っていった騎馬を睨みながら爆豪が呟く。

その憎き騎馬は現在、目標である1000万を持つ緑谷の騎馬とは逆方向に走り去っている。そのせいでポイントを奪い返すことが出来ない。

もしもここでポイントを奪いに行けば1000万を他のチームに奪われる可能性がある。それが轟の騎馬ともなれば苦戦は必至だろう。

だが、逆に1000万ポイントを取りに行けば万が一1000万を取れなかった時点で敗北する事となる。

ほかの騎馬のポイントを取ろうにも、それで時間をかけて1000万が取れなくなつては意味が無い。

何より、1位で無ければ気が済まない以上、1000万は必ず取る。しかし、自分達のポイントを取った騎馬を放っておくのも頭に来る。

「チツ……まずは1000万を取る！……んでその後アイツらも潰す！」

「……ツ！アルス！」

「あいー！」

押し寄せていた敵をアルスの魔法と自身の氷結で撃破していく。

真つ先に葛葉達の騎馬が状況を掻き乱したせいで一気に打開するのを目指した騎馬が1000万に集まり、結果、轟達の元にも数々の騎馬がやって来ていた。

「(これじゃ1000万には届かない…、これもアイツらの作戦の内なら本気で厄介だぞ…！)」

周囲を囲む騎馬と戦いながら、未知数の力を持つライバル達に思いを馳せる。

「(緑谷も葛葉も今は逃げに徹しているせいでこつちから攻撃出来る状況じゃねえ…、そんな隙見せたら数に押される！)」

ただひたすらに数が多い。その1つの事柄で轟達は中々前に進めずにいた。

下手に周りを凍らせてしまえば、それは自分達にとつての壁になり更に行動範囲を狭めてしまう。それも、自分達の周りを円形に囲まれている今なら尚更だ。

「何とかして道を切り開く…！じゃねえと次に進めねえ！」

迫り来る騎馬に対し、最低限の攻撃を行うだけで向こうは勝手に滑って騎馬を崩す。

たとえ崩さなつたとしても、葛葉の持つ銃から放たれる殺傷能力0の麻痺弾によつて強制的に崩される。その姿はまさに鉄壁だった。

「やばいつすねこれ。しゃちようのさくせんどおりにしかすすんでませんよ」

「いやもうマジで楽つすわ。社長居てくれて助かるわ」

「ほんとにそう。社長を取らなかつたメンツは見る目ねえな!」

「もう大丈夫ですから…ほんとにやめて…」

3人にべた褒めされて、顔を覆いたくなるほどの羞恥心に襲われる加賀美。そんな和やかな空気の中、また一つの騎馬が迫つてきていた。

「また来たな。エクス、頼んだわ!……エクス?」

敵が来ているのが見えるはずなのだが何故か動こうとしないエクス。エクスは瞳が虚ろになつており、動く気配がない。

「クソっ!」

葛葉が迫る騎馬に銃弾を発射する。発射された銃弾は真っ直ぐに騎馬の先頭である少女の腹部へと進み――

「甘い」

その銃弾は、少女の蹴りで弾け飛んだ。

「嘘だろ、マジか!」

「劍持さん！」

「ああ、もう作った！」

加賀美が右を見れば、15メートル程先まで続く巨大な漆黒の壁が出来ていた。

その壁がゆつくりと動き、最初に右翼の劍持を、次に葛葉、エクス、最後に加賀美を呑み込んだ。それと同時に壁は元から無かったかのように消失した。

「エクスさん、分かりますか!？」

壁によって距離を稼いだ直後、加賀美がエクスの体を揺する。数秒後、エクスの瞳に生気が宿る。

「あ…、社長……?？」

「大丈夫ですか、エクスさん。どこまで覚えてます?？」

「つそうだ、僕多分敵の個性にやられて……」

「具体的にどんな状態だったか覚えてますか?？」

「最初は違和感無かったんですけど、なんかどんどん頭が回らなくなって気づいたらここに居た感じですよ」

エクスの言葉を聞いて加賀美がハツとする。言われてみれば、途中からエクスの滑舌に違和感があった。

「しまった……もう少し注意しておくべきだったんだ……。違和感はちゃんとあったん

だ。油断していた……！」

自分の失態に苦悶の表情を浮かべる加賀美。

「社長！今くよくよしてもしょうがねーっすよ！次どうするか考えましょう！」

葛葉の激励に加賀美が顔を上げる。

「そう、ですね。まずはあの騎馬をどうにかしないと——！」

こちらに近づいてくる例の騎馬に視線を向ける。

「恐らく、エクスさんがやられたのは思考に影響するタイプの個性で誰が持っているかは不明。」

しかし、劍持さんの個性で撤退したらエクスさんが目を覚ましたこと、それとエクスさんのみを狙った事から範囲も対象もそこまで大きくはない！

そしてもう一つ、銃弾を弾いた女性は間違いなくエクスさんや葛葉さんと同タイプの異形型！情報的にはまだ負けてない！」

闘志を燃やす加賀美の姿に、エクス、葛葉、劍持、3人の士気も高まる。

「それで、どうします？何か策とかあるんですか？」

劍持の問いに、加賀美はニヤリとして答える。

「最初からこちらに攻めてこなかったことや、エクスさんの症状が直ぐには出なかったことから、作戦はとても単純です！皆さん、力を貸してください！」

「どうじゃリオン？個性は発動出来るか？」

「まだ無理、もつと近づかないと」

「やっぱりリオン様の個性って射程不足だよねえ」

「おま、そういうこと言うとまた……」

「あーもー！仕方ないでしょ！」

金髪のツインテールが特徴的な少女と、額から角を生やした少女、ピエロのようなメイクをした青年、和服が似合いそうな青年の騎馬が騒ぎながら進んでいく。

「ヒーロー科、特にあの白髪をやっ！私が苦労してポイント稼いでるよこで楽そうに口ポットを蹴散らしてやがった！まじで許せねえ！」

「リオンの個性は口ポットに対しては効果が薄いからの〜」

「いてっ！ちよっ、足踏みやめて」

「いてえ！今絶対爪曲がったって！」

騎馬の上でドンドンと地団駄を踏む少女、鷹宮リオンとそれを辞めるように訴える青年が2人、ジョー力一と舞元啓介。それを振り返りながら笑っているのが竜胆尊だ。

「ん…?なんか向こうの騎馬こっちに近づいてきてない?」

力一に言われて見てみれば明らかに敵対している騎馬はこちらに向かって疾走してきていた。

「もうお嬢の個性が割れたのか…!?早すぎじゃねえ!」

「舞元燃やして!」

「おうよ!」

舞元が個性を発動する。その個性により、先頭のエクスにとっても小さな火がついた。

「ここから2分もあればかなり燃えるぜ!」

「それ時間足りなく無い!」

「りきいちい!」

リオンに呼ばれた力一が個性を発動する。次の瞬間、リオンたちの騎馬から幾つもの同じ騎馬が現れた。

「これで時間稼ぎに…」

が、葛葉の放った銃弾が寸分違わず全ての尊の額に向かって吸い込まれていく。例の如く、本物の尊は銃弾を弾くものの偽物は全て消えてしまった。

「うっそお…。リオン様、個性は?」

「まだ無理い…あーもー、負けたくねえええ!」

「これは…ダメみたいじゃな」

「だよなあ」

尊が蹴りを放つ。が、エクスはそれを痛みに顔を歪めるものの見事に耐えきり、そして

「取ったア！」

腕を振り回すリオンの額に巻かれたハチマキを葛葉が綺麗に奪い取った。

「ふざけんなっ！」

咄嗟にリオンも葛葉のハチマキを取ろうとするが、伸ばした腕を掴まれてしまう。そして、恐怖に顔を引きつらせるリオンに対して葛葉は可愛らしい笑顔を浮かべた。

「なんで負けたか、明日までに考えといてください。ほな、対戦ありがとうございました」

「ああああああああ!!!」

煽り耐性が低い為ブチ切れて発狂するリオンを他所に葛葉達の騎馬は再び壁際まで走り去っていった。

「ヒーロー科って怖いね」

「なるべくしてなった、って感じだな」

「うわあああん！尊ママ〜！」

「よしよし、リオンはよくやっておったよ」

「…リオン様がこれじゃもう無理か」

「端に寄つとくか」

戦いの後とは思えない空気感でリオンチームはスタジアムの端に歩いていくのだった。

再び緑谷チームと離れた壁際で身を守る葛葉チーム。騎馬戦の終了は刻々と近づいてきていた。そして――

「社長！もうすぐ3分前です！」

剣持の声に、加賀美が声を張り上げる。

「皆さん！1000万、取りましょう！」

「おー！」 「ふうふう！」 「いえー！」

叫び声を上げながら今までとは逆に緑谷チームへ突き進んでいく。緑谷チームは現在、轟チームとタイマンで対決していた。

だが、その2チームを囲うように氷壁が張られている為このままでは戦いに乱入出来

ない。

「社長、あの壁ってどーします?」

「……ぶち壊しましょう!」

「これ絶対こうなること想定してなかったでしょ。ですよね社長?」

「なんで剣持さん煽ってくるんですか」

小馬鹿にした様子の剣持にジト目を向ける加賀美。1つため息をついて、視線を鋭くする。

「1000万、取りましょう!」

「いえー!」「ふううう!」「おー!」

「いや全然噛み合っていない!」

【#雄英騎馬戦】1000万を取ります!

終了までの残り時間3分。先程まで逃げに徹していた葛葉達の騎馬が突如攻めてきたことで状況は一変していた。

迫り来る騎馬に銃弾を浴びせてすれ違いざまにハチマキを奪っていく葛葉チームは明らかに氷壁の向こう側を目的としていた。

「社長、どうやって壊します?」

「剣持さんの個性で削ります。先程の様に擬似ワープもありなんですけど、他のチームは巻き込んだ方が私たちに割くりソースも少なくなるので破壊します」

「削るなら少し時間かかりますよ?」

「そこは私たちが耐えましょう。最悪、ジェットパックを使えば何とかかなります」
ハチマキを取るよりも進む事をメインに動き、まもなく氷壁に辿り着く。

剣持が氷壁に触れると氷壁がガリガリと削れていく。

「30秒ちよい掛かりますんでお願いします!」

「わかりました!」

既にサポートアイテムのストックはなく、葛葉の持つ銃とジェットパックを使い切れ

ば完全に底をつく。

故に、極力サポートアイテムに頼らず守り切らなければならぬ。

更に剣持の個性の都合上この場を離れることも出来ない。

「葛葉さん、お願いしますね。貴方次第です」

「まっかせてくださいよオ。誰が来ようと返り討ちにしてやりますから！」

「こうなったら僕何も出来ないっすね」

「大丈夫ですよエクスさん。私もです」

動くことが出来ないことを察した騎馬やハチマキを奪われた騎馬が狙いを定めて迫り来る。

「つしやこいやあー！」

葛葉が叫び、拳を平手に打ち付ける。

こちらに来る騎馬は今のところ5つ、A組生徒は居ないようだ。

「あと9発か」

銃にありつただけの弾を込めて狙いを定める。銃に気がついた騎馬は一瞬動きを止めた。

そこに葛葉の放った弾丸が突き刺さる。5つの騎馬は体勢を崩して倒れ込んだ。

麻痺が解けるまであの5つの騎馬は復帰出来ないだろう。

「思ったよりも来ませんね?」

「俺らにビビってるとかじゃねえ?」

今倒したばかりの騎馬以外がこちらにくる様子はない。

「戦ってる騎馬が多いですからね。それに、向こうはまだ私達のサポートアイテムを警戒してるんだと思います」

「てことはあれですか。僕達がまだサポートアイテムを持つてると思わせなきゃいけない……?」

「いけないってことは無いですけど、そう思わせて損は無いですね」

「なるほど」

襲つてこなかった騎馬達は各々で激戦を繰り広げており、こちらへ向かってくる騎馬は見当たらない。

「もうすぐ削り終わりますんで、準備しといてください」

騎馬が1つ余裕で通れるほどの横幅の穴がどんどん奥へ広がっていく。剣持の言う通り、あと数秒もすれば氷壁に隙間が出来るだろう。

「なんか思ってた倍くらい楽でしたね。ヌルゲーっすよこんなん」

「まだ油断するなつて。……っし、穴があき「死ねやクソモブ共!」葛葉!」

BOOOOOOMB!!

劍持の叫び声と同時に起こる爆発。

「チツ……」

爆発を起こした張本人である爆豪に瀬呂のテープが張り付き、自分達の騎馬へ引つ張り戻す。

「アイツ……ギリギリで受け止めやがった。こっちは死角から奇襲掛けたのになだ」

爆豪の睨むような視線の先で、同じく爆豪を鋭く睨む葛葉。

「あいつまじでありえねえわ。ぜってー左手無くなつたと思つた」

「どうします？このまま中に入れば挟み撃ちになりますか……」

「大丈夫でしょ。僕らなら勝てますよ。嘘、負けたらごめん」

「何を言ってるんだお前は」

自分の発言をすぐに取り下げたエクスに対し、劍持が思わずツツコミを入れる。それを見ながら、加賀美はツツコミが増えたことに安堵する。

「んじや、乗り込みますか」

「ボコボコにしましょう！」

士気を上げながら葛葉達の騎馬は氷壁の中へと足を踏み入れ――

「《黒^{ダイクシヤドウ}影！》」「《アイス》！」

影と氷刃が葛葉達の騎馬に襲いかかってきた。

「葛葉さんー」

迫り来る氷刃をかかと落としの要領で地面に叩きつけながらエクスが叫ぶ。

「やべえ、3本取られた」

葛葉の首から下げられたハチマキが明らかに減っている。そして、緑谷が新たなハチマキを巻いていた。

「距離を保ったまま移動しましょう。今、誰かに後ろから来られるのは痛いです」

加賀美の一声で視線は逸らさないまま、開けた穴から遠ざかる。緑谷チームと轟チーム、そして葛葉チーム。3チームの間に肌を刺すような緊張感が流れる。

「(ここで下手に動けば挟み撃ちだ…。轟君たちと葛葉君たちがぶつかってくれればいいんだけど…)」

「(あいつらが入ってきたせいで下手に動けねえ。緑谷に攻撃を仕掛けて不意をつかれるのは避けたいな…)」

それぞれが周りを注視して相手の出方を伺う状況。『下手に動けばハチマキを奪われる』、その危機感が全員の足を止めさせて

「つしや1000万寄せやああああ!!!」

いなかった。

「えっ!?!」「嘘だろ…!?!」

突如として走り出した葛葉達に緑谷と轟の体が僅かに硬直する。その一瞬で葛葉達の騎馬は一気に緑谷チームへと迫っていた。

先程までとは段違いの速さを出した葛葉チームだが、その原理は単純明快。

騎馬の後ろを支える加賀美と劍持が全力でジャンプしている間にエクスが加速、3人を引きずる形で走り出す。

それと並行して劍持が個性を発動して騎馬3人の靴底と地面を磨いて滑りやすくし、後ろ2人の着地と同時にエクスも急ブレーキをかけて滑って移動したのだ。

更に葛葉が左手を蝙蝠にしてバラけさせ、コケないように騎馬全体のバランスを整えることで僅かな時間で驚異的な加速をみせたのだ。

「……常闇君、防御！」

「《黒影》！」

葛葉と緑谷を遮断するように現れたダークシャドウが腕を振るって葛葉のハチマキを奪おうとする。

だが、それを無視して葛葉は緑谷のハチマキへと手を伸ばして、

「レシプロバースト!!」

一陣の風と共に、轟が緑谷のハチマキを奪い去った。

「ウツソだろお!!」

1000万を失った緑谷から距離を取ろうと葛葉が咄嗟に体を引っ込めるが、ダークシヤドウにハチマキを全て奪われてしまう。

「やっべ、俺ら今ポイント0だわ」

「葛葉さん何やってんすか!」

「いやあれは仕方なくねえ!?!」

葛葉たちと距離をとる緑谷チームに先程の加速で同じくらい離れた位置にいる轟チーム。

幸いにも出入口に一番近いのは葛葉チームの為逃げられることは無いが、何とかしてポイントを取らなければここで敗退だ。

『残り時間1分!』

葛葉チームの焦りを加速させるようにアナウンスが入る。

「社長、どうします?このままだと僕ら負けちゃいますよ」

緊迫した様子の剣持。

「:1000万を狙います。緑谷さん達はハチマキがバラけているのでポイントを奪い辛いです」

そこで1度加賀美は言葉を切る。そして、薄く笑いを浮かべた。
「ここからが作戦の最終段階です」

狙いを轟チームに定めた葛葉チームが動き出す。轟とアルスがそれぞれ氷と雷で攻撃を行うが、どちらもエクスと葛葉に防がれてしまう。

「凍らせても力づくで氷を割られる……！」

「こっちもだめ。葛葉さん再生するからあんまり効いてないよ」

足を凍らせてもエクスは無理やり突き進み、雷を放つても葛葉が受けて再生する。

右側の力は次第に限界に近づいてきている為あまり高い出力で使う訳にはいかないし、アルスが下手に出力を上げれば発生する熱でより氷壁が溶けかねない。

周りを遮断するための壁が、かえって自分達を追い詰めるとは考えもしなかった。

「(壁を無視してでも止めるべきか……!?)」

「アルス、もつと強いやつ撃てるか！」

「りよう……かいいつ！」

まずは目の前の障害を何とかする、そう結論づけて瞬時に指示をだす。

アルスの右手から放たれた轟雷が葛葉の騎馬を捉える。

『残り10秒！』

視線の端で何かが動いた。そちらを見れば、葛葉達と同様にこちらへ進んでくる緑谷達の騎馬。

「八百万！」

「わかりましたわ！」

八百万が腰に付けていた球体を取り外して投げる。投げられたそれは空中で破裂し、煙幕を生み出した。

序盤に葛葉達が使っていたのを見て、念の為にと八百万に作らせておいたものだ。

『残り5秒！』

雷が生んだ砂埃が晴れる。そこには倒壊した葛葉達の騎馬の姿――

「轟さん！上をー！」

違和感を感じた瞬間、八百万が叫ぶ。上を見れば、倒れた騎馬の中に居るはずの葛葉がほんの3メートル先まで迫っていた。

背中に付けている機械で空を飛んでいるのだろう。

『4！』

「頂きいー！」

限界まで伸ばされた右腕に対し、おもわず左手を構える。発生した炎に葛葉が驚いたような顔で腕をひきもどす。

「(緑谷に続いてこいつにまで左を使っちゃった…)」

無意識とはいえ、また左を使ったことで少なからず動揺してしまう。

『3!』

煙幕を突き破り、緑谷達の騎馬が再び姿を現す。

「うああああ!!」

雄叫びを上げながら突き出された腕を受け止め、捻り上げる。そこに第2の拳が放たれた。

「…っ!」

『2!』

防いだとはいえ、全力の拳を受けて僅かによるめく。その隙について1番上のハチマキを奪われた。

なんとか奪い返そうと手を伸ばしたが、躲されて距離を取られた。

少し離れた位置の緑谷が奪ったハチマキを見て絶望に染まった声を出す。

「(これじゃない…!」

『1!』

予めすり替えておいたハチマキを取ったのだろう。再び向かってくるが、時すでに遅し。

『終……了……!』

伸ばされた緑谷の手が顔の横をすり抜ける。僅かに起きた風がかみをゆらす。そして、気づいた。

「…!?ハチマキがねえ!」

首に巻いていた奪ったハチマキではなく、元から持っていた分のハチマキが無くなっていた。

当たりを見回せば、緑谷を支える常闇の個性『黒影』がハチマキを啜っていた。

「(最後の最後で不意打ちされたか…)」

黒影が奪ったハチマキに緑谷も驚いている事から常闇の独断なのだろう。

「終わったな…」

飯田の声ではっと我にかえる。

「悪い、ぼーっとしてた」

騎馬から降りると、足元が少しぐらついた。わずかな時間ではあったが、中々の密度があつたから歩くのが久しぶりの様な気がする。

『それじゃ早速、結果発表行cule!!』

プレゼント・マイクのアナウンスと共にモニターに順位が表示される。

「……あ?」

それを見て、体が固まった。

『まずは1位！ぴつたり1000万ポイント！葛葉チーームっ！』

「イエエエエエ!!」 「おおおお！」 「やったあ！」

全員で雄叫びを上げる。結局、今回の戦いは全て社長の思い通りに進んだわけだ。

わざとポイントを全て奪わせ、焦ったような演技と共に突撃する。抑えるだけでは効果が出ない僕達に対して敵は必ず強力な技を撃ってくるから、そこでジェットパックを起動。

互いに視界が遮られた一瞬で飛び上がった葛葉さんが再び突撃。

ここで相手は必ず迎撃してくるので避けるふりをして葛葉が左手首を蝙蝠にして切り離しつつ、それがバレないように敵の視界から消える。

切り離された左手首はこっそり1000万ポイントを奪い、空中の葛葉さんへハチマキを運ぶ。

これで、気づかれることなく1000万ポイントを奪ったのだ。

この作戦は本番前に互いの個性把握を行ったからこそ生み出されたものだ。

「いやあ、良かったですね！運良く緑谷さん達も出てきてくれたので助かりました！」

体育服はボロボロで体は傷だらけ。それでも、僕達は全力で笑っていた。

「もう社長も葛葉さんも剣持さんも大好きですわ。俺。もうマジで嬉しい！」

「ほんと、社長の作戦とかもちさんの瞬時の判断とかエクス守りとかまじ最強だわ。俺ら最強」

「いやもう僕らのチームなら誰が相手でも勝てますよ、と。ここで声高に宣言したいですわね！」

「この結果に辿り着けたのは皆さんが居たからですよ…。本っ当にありがとうございます！しました！」

互いに背中を叩いたり口笛を吹いたりしてわいわい騒ぐ。この瞬間がひたすらに楽しい。

「じゃあ私達ちも一旦退場しましょう」

社長に言われて周りを見れば、ほかのチームも続々と退場していた。

「出ましょうか」

4人で談笑しながら退場口に向かう。途中でふと後ろを振り返ると、さつきまで戦っていた轟さんが暗い顔で俯いているのが見えた。

第3種目が始まる前に挟まれた昼休憩。コンビニ弁当を持って葛葉さんと一緒に控え室を出る。

「あと、ラストの葛葉さんの演技。あれめっちゃめっちゃ迫真でしたね」

「あゝ、あれな。あれ向こうが火い出てきたからまじでビビってたわ」

「あつははは！それであんなマジだったんですか！」

社長と剣持さんと待ち合わせ場所のベンチに座る。2人はまだ来てないみたいだ。

「どうします、先に食べちゃってます？」

「俺はどっちでもいいけど、待つといた方が良さっしょ」

「じゃあ待つとききますか」

弁当を脇に置き、スマホを取り出す。2人でPUBGを遊ぼうとした時、僕達の手元に影が差した。

顔を上げると、轟さんが立っていた。

「…えと、なんですか？」

確かに口に出したはずなのだが、轟さんは微動だにしない。なんなんこの人。めっちゃくちゃ怖いんだけど。

隣を見れば、葛葉さんも困惑した顔をしている。

「…俺は」

突然話し始めた轟さんにおもわずびっくりしてしまふ。そんな僕を他所に、轟さんはもう一度口を開いた。

「俺は、勝たなくちやいけない。だからお前たちにも必ず勝つぞ。右だけの力でな」

……………?

「なるほど…? まあ僕も負けないんで。頑張ってください」

「ていうかさつき左手使ってたか? どゆこと?」

いまいち意味がわからなかったから励ましてみた。だが、僕達の言葉を聞いて轟さんは歯を噛み締めた。というか絶対これ葛葉さん地雷踏んだくない?

「あの時みたいな失敗はしねえ。次は勝つ」

それだけ言って轟さんは去っていった。意味がわからないまま取り残された僕と葛葉さんは顔を見合わせる。

「なんだったんですか、今の」

「俺にもよくわからん」

「まあ…、とりあえず始めましょうか」

持っていたスマホを掲げると、葛葉さんも乗ってきた。

「っしやあ、勝つか」
12位だった。

休憩時間らしいのでなにかします!弁当食べます!

轟による挑発(2人の中ではそうなった)の後、加賀美と剣持を待ちながらPUBGをプレイしていた2人。

「戦目が微妙な結果で終わったのでリベンジをしようとしていた所に、待ち人2人がやって来た。」

「お待たせしてすみません。少しやることがあったので」

「つーか、こんな時にまでゲームやるか?普通。もつと体育祭を楽しめよ!」

「エクスと葛葉の肩を激しく揺さぶる剣持に、2人は揃って顔を顰める。」

「耳元で叫ぶな」

「唾飛ばさないでくださいね」

「グイグイと剣持を押しつけようとする2人の隣に加賀美が座る。」

「遊んでないで弁当食べましょう。皆さんってレクリエーションどうします?」

「黒のシンプルな二段弁当を開ける加賀美の言葉に、じゃれあっていた3人も大人しく座って弁当を開いた。」

「レクリエーションってなにすんの?」

「私もよく知らないんですけど、スタンダードに大玉ころがしとか玉入れみたいな競技じゃないですかね」

葛葉の問いに答えながら、口元についている米粒をジェスチャーで示す加賀美。指摘された葛葉は興味なさげな返事をしながら米粒を口に運ぶ。

「僕は多分出ないですね。面倒くさいです。…うわ、剣持さんの弁当めっちゃめっちゃ美味そうじゃないですか」

剣持の弁当から卵焼きを奪って口に放り込むエクスを肘でどつきながら、剣持も同意する。

「まあ僕らは次に備えて体力温存が1番いいと思いますよ。…つと、貰い!」

「ああ、ちよ、はあ!?!卵焼きに対して唐揚げは釣り合っていないでしょ!?!」

「なにやってんのお前ら」

弁当の奪い合いを始め出す2人に呆れた目を向ける葛葉。

「でも意外でしたよね。まさか棄権者がでるなんて」

「あく、あれね」

騎馬戦が終わってすぐのこと。順位発表が終わった後に何故か再び生徒達呼び出されたのだ。

なんでも、4位チームのうち2人が棄権を申し出たらしい。

その為、別の上位チーム2つの代表者が代わりに第3種目に出ることになったらしい。

結果、5位だった轟と6位チームの推薦を受けたB組の鉄哲が出場することとなった。

「まあ、自分の信念に従って棄権を決めたのって普通に凄いなと思いますけどね。僕ならそんなの気にせずにとやると思いますし」

剣持の弁当からたこさんウィンナーを奪い取ったエクスが視線を剣持に向けたまま話す。

「そうやって何かを辞めるのも何かの勇気あああ!」

ハンバーグを奪われ、絶叫するエクス。言いかけていた言葉は中断され、ひたすらにクソが…と呟くだけのマシンになってしまったようだ。

「…まあ確かに、エクスさんの言う通りですね。正直、棄権の理由を聞いて不謹慎ながらかっこいいと思いましたし」

ああいうのもヒーローの素質なのかなあと考えながら水筒の麦茶で口の中の物を流し込んだ。

「第3種目ってどんなのっすかね。長距離走とかだったら無理だわ」
背もたれに体重を預ける葛葉。

「いやいや、いつも通り第3種目はトーナメントでしょ。なあ?」

何を言っているんだろうな、とでも言うようにエク스에視線を向ける剣持。だが、エクスは感心したように声を漏らすだけだった。

「……え? 待って、もしかしてだけど体育祭見たことないの? お前ら」

「ないっすね」「興味ないわ」

即答する2人に剣持は頭を抱える。

「なんでお前らみたいなのがA組になれたんだよ…」

「…んぐ。流石にいつてること酷すぎませんか?」

剣持の肉巻きおにぎりを頬張りながら、エクスがジト目を向ける。

その視線に剣持も、さすがに言い過ぎたかもしれないと謝ろうとして

「いや、なに人の主食食ってんだよ! 釣り合わないだろ!」

エクスの食べている肉巻きおにぎりに気づき、盛大な台パン（ベンチパン?）をかますのだった。

「別におかずは良いんだよ! いや、良くないよ!?! でも主食はダメだろ! もっと主食を大事にしろよ!」

「剣持さんうるっさ! …仕方ないから僕のおにぎりをあげましょう。感謝してください」

「お前を恨みはするけど感謝はしねえよ」

ぶつくさ言いながらエクスのおにぎりを食べ始める剣持。白米に混ぜこまれた梅がカリカリとした食感と程よい酸味を与えてくる。

「え、うま……。これお前が作ったの?」

「おにぎりに混ぜるふりかけみたいなやつ、スーパーにあつたんで入れてみました。それ美味しいですよね」

「うん。めっちゃ美味しい。」

今度スーパー行く時に探して見よう。そんなことを考えながら、剣持はおにぎりを食べ進めていく。

「?葛葉さんどうしました?」

ぼーっとエクスと剣持を眺める葛葉に、加賀美が声をかける。

「ん?あや、なんでもないっす」

そう言つて自分の弁当に視線を落とす葛葉。だが、箸をつけずに加賀美の弁当をちらちらと見始める。

その様子に苦笑を零し、加賀美は弁当からミートボールを取り出す。

「葛葉さん、おかず交換しませんか?」

加賀美の言葉に一瞬硬直する葛葉。だが、すぐに顔を輝かせる。

「え、いいんすか!？」

「(ここまで食いついてくるとは思わなかった…) 勿論いいですよ。どうぞ」

加賀美が弁当にミートボールを入れると、葛葉もいそいそと焼き鮭の切り身を加賀美に渡す。

「俺今まであんまり友達とか居なかつたんで…、こういうの憧れてたつて言うか?」

恥ずかしそうに頬をかく葛葉を見て、加賀美はクスリと笑う。

「ならこれからどんどんやっていきましょうか、こういうの。エクスさんと劍持さんもいいですよね!」

「え、あー…いいつすよ!…:…:エクス君、何の話か分かる?」

「全然わかんないですけど、多分大丈夫でしょう!」

ヒソヒソと話をする2人だが、間に葛葉を挟んだだけの距離感で聞こえないはずもない。

そんな2人の可愛らしいやり取りに頬を緩めながら、加賀美は葛葉から貰った焼き鮭を口に運んだ。

「これ美味しいですね!塩加減がちょうどいいと言うか…。これは葛葉さんが?」

「いや、母さんです。俺は家事とか出来ないんで」

「お母様、料理お上手なんですね」

「そんな事ないっす。普通っすよ、普通」

加賀美に褒められたことで照れて顔を赤くしながら、貰ったミートボールを食べる。口に入れた瞬間一気に広がるソースの濃厚な味で葛葉はその場でピタリと硬直した。

「…う〜く、葛葉さん?」

一口噛めば、柔らかすぎず硬すぎない絶妙な食感とともに驚くほど旨味の詰まった肉汁が溢れてくる。

弁当に入っていたので出来たてほど暖かくないが、その分ソースが染み込んでいて肉の味をより引き立たせている。

「……うめえ」

気がつけば口の中にミートボールは無く、思わずそう呟いてしまうほどに加賀美のミートボールはあまりにも美味しかった。

「あの、葛葉さんどうされました?ミートボールがお口に合わなかったのなら申し「違いますよ社長、めちやくちや美味かったです!美味すぎて意識がとんでただけなんで!もうほんと、気にしないで大丈夫です!」急にめっちゃ喋るじゃないですか!どうされました!」

黙り込んでいたと思いきや、急に饒舌になった葛葉に加賀美が驚く。

「社長の弁当やばいっすわ。やばすぎてやばい。俺の焼き鮭じゃ申し訳なくなってきた

わ

「いえいえとんでもない！とても美味しかったですよ！」

互いの弁当を褒め合う加賀美と葛葉。そんな2人の会話にエクスと剣持が反応する。

「そんなに美味しいものを2人で独占って、それでいいんですか？」

「僕達友達だからさ、ちよつとは弁当分けてくれてもいいよね？」

言うが早い、目にも留まらぬ速度で2人の弁当からおかずを奪い去っていく。

「うおお、めつちや美味ええ！」

「こんな美味いしか言えんて！」

勝手に盗み、テンションを上げるエクスと剣持。その2人から弁当のおかずを奪われた加賀美と葛葉は頷き合う。

「私達ばかり弁当を取られるのっておかしくないですか？」

「取ったつてことは取られる覚悟があるつて事だよな？」

葛葉と加賀美の言葉に、エクスと剣持もニヤリと笑って答える。

「欲しいならいくらでも交換しますよ。僕のおかず1つにつき、そつちのおかず2つでいいです」

「まあ結局のところ、欲しいなら奪うしかない。この世界はそういう風に出てくるんでね」

勿論本気ではない。だが、巫山戯ているとはいえ4人に手を抜くつもりもない。

ただ弁当のおかずを奪う、そのために全霊をもって戦いに望むのだ。

「行きますよ、葛葉さん！」

「っし、全部食い尽くす！」

「僕達が負けるわけないんでね、勝ちますよ」

「最悪剣持さん置いて逃げますしね」

「は？」

今ここに、戦いの幕が上がる――

弁当戦争（仮）を終え、お腹を満たしたエクスは適当に外をぶらついていた。

校内には様々な出店が立ち並んでおり、小さな子供やお年寄りまでみんなが楽しんでいるようだ。

そして、周りから結構見られる。3回戦目まで進出したから顔を覚えられているのだろう。

注目を浴びて若干の気恥しさを感じながら歩いていると、前方に見慣れた影が2つ。

「切島さんと爆豪さんじゃないですか。なにしてるんですか？」

「ん？ おおエクスカ！ いやあな、次に備えてなるべく食つとこうと思つてな」

「チツ」

「爆豪さんはせめて喋りませんか？」

声をかけた瞬間舌打ちをされたエクスは困惑しながら爆豪の隣を歩き出す。

「…っ、テメエ何俺の横歩いてんだコラア！ クソ髪の毛の横でいいだろうが！」

「そんな事でいちいちキレてたら疲れませんか？ リラックスしましょう、リラックス」

エクスに宥められ、目をつり上げる爆豪。その向こうから切島が顔を出して右手で手刀を作った。

「ごめんな？ コイツ、さっきの騎馬戦で3位になってから機嫌悪いんだよ」

「アア!? 誰が3位だ！」

「あー、なるほど…」

確かに爆豪の性格なら納得だ。1位チームのエクスに思い切り不快感を示すのも当たり前だろう。

「まあ勝つてしまったものは仕方ないんで、次頑張ってください」

「テメエは、次、叩き潰す」

「アハハハハ、まじで目が明らかに人殺ってる目だもんな！」

「なんでそれで笑えるんだよ…」

キレル爆豪に爆笑するエクス、困惑する切島。周りの人達はこのカオスな3人を見て頭にはてなマークを浮かべている。

「あ、串焼き屋ありますよ。買うんですか?」

突然左手を伸ばしたエクスの指の先には、確かに串焼き屋の出店があった。

3人で列に並ぶ。

「エクスも食うか?」

「満腹なんで遠慮しときます」

「そっか。爆豪は?」

「自分で買う」

財布を取り出しながらの質問にエクスと爆豪が答える。

「爆豪、食うなら奢るぞ?」

「要らねえ。奢る余裕があるなら自分で食え」

「おう、気遣ってくれてんのか?サンキュー!」

「気遣ってねえわ!」

声を荒らげる爆豪を聞いて切島が笑う。

「爆豪さんと切島さんって仲良いですよね。同じ中学だったんですか?」

「いや？今年初めてあつたぞ」

「仲良いって誰がだコラア！」

「お前と葛葉だつて仲良いだろ？それと一緒にだよ」

切島の言う通りエクスト葛葉は同じ中学ではないが仲がいい。なるほど、確かに仲の良さに中学は関係ないらしい。

「それを言ったら、切島さんとか爆豪さんとも僕は仲良いと思つてますけどね」

最初に話しかけてくれた切島と瀬呂、そしてそこから話すようになった爆豪や尾白、上鳴などはエクストにとって既に『友達』認識だった。

「おう、俺達もだぜ！なあ爆豪！」

「一緒にすんな！」

「お、次だぞ爆豪」

爆豪が叫ぶのも意に返さず、財布から紙幣を1000円札を1枚取り出す切島。そして前の客が居なくなると紙幣を差し出した。爆豪も500円硬貨を差し出す。

「タレ5本で。爆豪は？」

「…塩2本」

店員が2人の注文を聞き、串焼きを紙袋にそれぞれ入れる。

「100円のお返しです。ありがとうございます！」

爆豪がお釣りの1000円を受け取り、3人は列を出る。

「で?どこに座るんだ」

「あん?別に歩きながらで良くねーか?」

「爆豪さんいい子ですね」

「立ち食いは行儀悪いだろうが!」

2人を怒鳴りつけ、道路脇の花壇の縁に腰掛ける爆豪。それに続いて切島とエクスも花壇の縁に座る。

「つし、いただきます!」

「いただきます」

低い声で呟かれた爆豪のいただきますに吹き出すエクス。爆豪がまた目をつり上げるが、口に食べ物を入れているためか叫んでこない。

「……………。何笑ってやがんだテメエ」

「いや、爆豪さんってなんだかんだ育ち良さそうですよね」

「別に普通だわ!……………それに、育ちが良いのはお前だろ」

「え、なんでですか?」

爆豪の予想外の言葉に首を傾げるエクス。そんなエクスを横目で見ながら爆豪は答える。

「お前、いつも相手の目え見て話してるだろ。そんな癖がついてるのに育ちが悪いわけねえ」

「あー、言われてみれば、エクスと話してる時つてずっと目合うわ。爆豪、お前よく気づいたな」

「ずっと見られてりや嫌でも気付く」

爆豪に言われて今までの記憶を思い返してみると、確かに思いつく全てで相手の顔を見ている気がする。

「うわ、なんか言われてみたら死ぬほど恥ずかしいんですけど」

赤くなった顔を両手で覆い隠す。

「爆豪つて思ったより周りのこと見てるよな。やっぱ友達だからか!？」

「誰が友達だ！テメエらとは格がちげえんだよ！」

「あつはは！だよな！それでこそ爆豪だわ！」

「暑っ苦しいわ！」

切島が爆豪と肩を組む。爆豪は顔を背けながら無理やり切島を引き剥がした。

「こんなクソ暑い中で何やってんすか」

羞恥からある程度復活したエクスが切島と爆豪を見て呆れたような声を出す。

傍から見れば暑い中抱き合っているようにしか見えない。

「エクスも爆豪のこと友達だっと思って思うよな?」

「まあ思いますね。爆豪さんは認めないでしょうけど」

「つたり前だ!ボケ!」

予想通りの返答にエクスも切島も笑みを浮かべる。

「心配すんな、お前になんかあったら絶対助けてやる!友達だからな!」

「ですね。友達の為ならなんだっつてやります。

「僕以外の人が」

「いやお前じゃねえのかよ!」

エクスの言葉に切島と爆豪の声が重なった。ハツとした爆豪が隣を見れば、切島がハモったな!と言わんばかりの笑顔を浮かべていた。

「死ねえ!」

「ぐはあ!?!」

ついに我慢の限界を迎えた爆豪が唐突に切島を爆破した。

あまりの出来事にエクスは一瞬理解できなかつた。

「ええ!?!今の流れでそうなりますか、普通!?!」

すぐさま逃走を開始するエクス。その後ろから爆豪が爆速で迫る。

「黙ってやられろやあ!」

「うわこの人やばい!誰か助けて!ヒーロー呼んできてえええ!!」

しばらくして、3名の生徒が相澤先生に補導されたらしい。

トーナメントらしいので殴り勝ちます!

相澤の説教によって休憩時間も殆ど終わり、一緒に指導を受けた切島・爆豪と別れて一足先に控え室へ戻るエクス。

スマホを弄りながら歩いていると、A組の控え室の廊下に顔を真っ赤にしたアルスト笑いながら何かを言っているレヴィを見つけた。

「師匠、レヴィさん、こんなところで何やってるんですか?」

片手を上げながら声をかけると、ビクツと肩を揺らしたアルスが涙目でエクスを睨みつける。

「えびせんぱい、見た!」

「さあ? 見てないと思いますよ。何の話ですか?」

「ほんとに見てない!」

ぐいぐいと詰め寄ってくるアルスを両手で抑えながらレヴィにアイコンタクトで説明を求める。

レヴィはエクスの意図を察し、エクスに簡単な説明を施した。それによれば

「レクリエーションの1つでA組の女子がチアやったんだケド、それが上鳴くんと峰田

くんのついた嘘だったんだ。それで、結構張り切ってたアルスちゃんは恥ずかしさのあまりこうなっちゃったと言う訳デシタ。メデタシメデタシ」とのこと。

尚、説明を聞いたアルスが「なんもめでたくないわ!」とレヴィに突撃したもののエクスが肉壁となつてレヴィを守つたのでレヴィに被害はない。

「まあなんとなく理解はしましたけど、それつて要するに師匠の八つ当たりですよね? 馬鹿ですか師匠?」

「う、うるせー! そんなの自分でもわかつとるわあ!」

エクスに正論で殴打され、ア。ア。ア。ア。ア。という奇声を上げながら悶えるアルス。その光景を見たエクスはそつとレヴィの傍に近寄る。

「控え室に戻りましょう。友達と思われないうちにしましょう」

「明らかにエクスくんが火に油注いだくナイ?」

「気のせいですよ」

レヴィの背中を押しながらエクスが控え室に入る。アルスはそのうち勝手に落ち着いてくれるだろう。そうじゃなくとも他の誰かが何とかしてくれる筈。多分。きつと。

「そう言えば、エクスくん第2種目突破オメデトウ!」

「あー。ありがとうございます」

レヴィからの純粋な祝福。人から祝われることに慣れていないエクスは少し照れくさそうに返事をした。

「ボクのチームは結局エクスクン達と戦わなかったけど、実は最初のやつでエクスクン達の騎馬にポイント取られてたんだよナア」

「まじですか。全然気づかなかったです」

「ボクは眼中にないカ…」

「レヴィさん僕で遊ぶのやめませんか？」

エクスの困ったような声を聞いて、レヴィが朗らかに笑う。そして、レヴィの笑い声に被さるように集合のアナウンスが鳴った。

「オツ、もうこんなジカン。んジャ、そろそろ行つてこーい！」

グラウンド側の出入口に向かって軽く押される。レヴィに言われた通り、エクスがグラウンドに出ようとした時。レヴィに呼び止められた。

「応援してるぜ！」

振り向いた視線の先でサムズアップをするレヴィを見て、エクスは小さく笑う。

「優勝したらなんか食べに行きましょう。レヴィさんの奢りで」

「エ、まあ優勝できたらネ」

「つしやあ、やる気出てきたわ」

くすくすと笑い合い、そして目を合わせる。

「行つてきますね。帰つてきたらトロフィー触らせてあげます」

「ほんとニ!? 楽しみにしてるワ〜」

イツテラツシャイイという元気な声に見送られながら控え室を出る。燦々と輝く日光に照らされながら、グラウンドの中央へ急いだ。

レヴィに見送られながらグラウンドに出たエクス。そのエクスは今、レヴィの姿を見ながら頭を抱えていた。

「いや何これ気まず! カッコつけなきやよかった…!」

先程グラウンドに集められたエクス達。そこで、最終種目となる競技が発表された。競技は剣持の言っていた用にトーナメントだったのだが、トーナメントで直ぐに戦いが始まる訳もなく。順番が発表されただけでメンバーは解散となったのだった。

「(え、この空気感やば…。シンプルに吐きそうなんだけど)」

頭を悩ませながら、4つほど空いた席を挟んだ先に座るレヴィを盗み見る。当のレヴィは楽しそうにスタジアムへ声援を送っている。

「おーうい、なにレヴィちゃんのことジロジロ見てんだよう」

「うわ、なんか顔でかいやつがいる…。え、師匠力よわ。全然痛くないですよ?」

「うっぎ」

「普通の悪口やめてください」

後ろの席からひよっこ顔を覗かせながらエクスの頭を肘で殴りつけているのは、数分前まで廊下で赤面発狂していたアルスだった。

「もう復活したんですね」

「うん。ちよつと憂さ晴らしていうか、仕返ししたからね」

不穏な言葉で何があつたかを察したエクスはキョロキョロと周りを見渡す。

だが、上鳴と峰田は見当たらない。

「…何しました?」

「燃やした」

「燃やした!」

簡単に何が起きたかを教えてくれる一言にエクスは心の中で超絶ビビリまくる。

そんなエクスをよそに、アルスは平然と話を続ける。

「ちよーつと呼んでみたらはいはい着いてきたからさあ、物陰に連れて行って死なない程度に炙ったわ。火傷はちゃんと治したから気絶してるだけだよ」

「ちよつとこれからの師匠との距離感考え直しますわ」

「なつ、なんでだよぉー！」

頬を膨らませてポカポカとエクスを殴りつけるアルスの姿にエクスは爆笑する。アルスの非力な拳ではエクスに痛みを与えることは出来ないのだ。

「師匠の顔今めちやくちやでかいっすよ。これを師匠に見せられないのは残念だわ」

「顔でかくないわぁ！おまえ、髪むしるぞ!」

「え、何この人なんか怖いこと言ってる…」

エクスの髪をつかんでグイグイと引っ張るアルスと、それを必死に止めようとするエクス。観客席にいるにも関わらず、試合を見ずにじゃれあうアホ2人はかなり目立っていた。

「それで？なんでレヴィちゃんの事ジロジロみてたの？」

「ジロジロって言い方やめませんか？そしたら教えてあげましょう」

「はぁ？なんつか言い方腹立つなあ」

ぶつくさ言いながらも、結局は分かったよう、仕方ねーなあとエクスの言う通りにするアルス。…まあ、現時点で本当にアルスが言うことを聞いたかは分からないのだが。

しかしそれに気が付かないエクスは、アルスがちゃんと約束を守ったと確信しながら事の顛末を話した。

「くっつ、ま、まって…お腹痛い…!」

のだが、何故か話の途中からアルスがお腹を抱えて笑っているのだ。

馬鹿にされたと感じたエクスはむっと顔を歪ませる。

「なんで笑うんですか。こっちは真剣なんですよ」

「しっ…んふふ、真剣だから面白いんだよお、っ!」

体をぶるぶると震わせ、エクスの座る席の背もたれに寄りかかり涙目で顔を赤くするアルス。

あまりにもアルスに笑われるものだからエクスは全く面白くない。

「いい加減にしないと流石に聖人の僕でも怒りますよ?」

「えびせんぱいが聖人って…んんっ、あー、ちよつと落ち着いた」

深呼吸をして自分を落ち着かせるアルス。だが、未だに顔は赤く息も荒い。

「もー、えびせんぱいのせいであつと見逃したじゃん!」

「は?言つとること無茶苦茶やん…」

アルスの理不尽な言葉にエクスは言い返す気力も失つていく。

そんな時、突然誰かがエクスの左肩を叩いた。

「ん?…あ、レヴィさん。どうしました?」

左をむくと何やら切羽詰まった様子レヴィ。何が起きているのか分からず首を傾

げるエクスに、レヴィはスタジアムの中心を指さした。

「遅刻だよエクスくん！早く行かないと棄権になっちゃウー！」

「……ええ!?は、嘘でしょ!?!」

レヴィの指の先を見れば既に対戦相手はステージに立っており、プレゼント・マイクが何かのカウントを数えていた。

『残り15秒！エクスは早く来ないと失格になっちゃまうぞ?!?!』

「師匠！俺をぶっ飛ばしてください！全力で！」

エクスが叫ぶ。それを聞いたアルスは、エクスの言う通り今出せる最大出力の風魔法をエクスの背中に展開する。

そして、失言に気がついたエクスは顔を強ばらせた。

「ちよつと待つて師匠、やっぱ全力じゃなくて3分の1くらい『メガウィンド!』でえええええ!!?!」

止めようとするが時既に遅し。魔法で起こった風により物凄いスピードで吹き飛ばされるエクス。そして、丁度スタジアムの中心付近を狙うように減速を始めた。

「あれちよつと待つてこれ死ぬくない!?!うおおあ高さが高い!」

高所からの落下で死を覚悟するエクス。だが、衝撃が体を襲うことは無かった。

うつすらと目を開ければ、自分の足の少し下に地面があるのが見える。

「はー、絶対死んだと思った…。吐きそうだな」

ゆっくりと体が落下して優しく地面に下ろされる。つまり、アルスが魔法でエクスを受け止めたという事なのだろう。

地面にへたり込んだままのエクスに、金属製の手が差し伸べられる。

「エクスさん大丈夫ですか？」

「…大丈夫です。気にしないでください」

全身に金属製のスーツを着込んだ加賀美。エクスの1回戦目の相手は彼だ。

明らかにアイアンマンを模したであろうスーツはこの最終種目まで取っておいた切り札らしい。

『まさかの上から登場エクス・アルビオ！待ちに待った第2回戦の選手紹介に行くぜエー！』

「2人とも、自分の立ち位置に立って頂戴？」

審判のミッドナイトに促され、ステージの端に立つ。

『現代に生きるアイアンマン！技術の力で優勝を狙う！サポート科、加賀美ハヤト！』

「アイアンじゃなくて金とチタンの合金なんですけどね。…言ってみたかったこのセリフ！」

『対するは！ヒーロー科A組から推参！生徒たちの間で話題の人物【エビオ】とは彼のこ

と！エクス・アルビオ！」

「はあ!?なんでここでそんな事いうん!?余計広まるやん！」

プレゼント・マイクの口上でテンションを上げる加賀美とテンションを下げるエクス。

『時間も押ししてるし早速いくぜ！レディ：』

体を適当に動かして違和感が無いかを確認する。

『ゴー！』

合図が出たと同時に走り出すエクス。まずは小手調べをと左の拳を握る。

「ちよつと！ちよつとだけ待ってください！」

握った拳を振り抜こうとしたところで突然待ったをかけられ、加賀美に放とうとした拳を止める。

「あの、ご提案があります。出来れば聞いて欲しいんですが……」

敵対の意志を見せない加賀美に、エクスもひとまず拳を収める。

「なんですか。もう始まつてるんですけど」

「本当は始まる前に言うつもりだったんですが、エクスさんが中々来なかったの言えなかつたんですよ」

「すみませんでした」

気がつけば土下座をしていたエクス。その速さに若干引きながら加賀美が一本指を立てる。

「このスーツ、燃料とかの問題で1分しか全力を出せません。なので戦うのは1分だけにしませんか。どちらにせよ、1分経てば私は負けが確定しますの〜」

加賀美の提案を聞いてエクスは考える。互いにこれと言ったデメリットもないように感じる。加賀美らしくフェアな条件という事だろうか。

「分かりました。さつき勝たせてもらったですし、そのくらいなら」

「ありがとうございます!」

『ここで予想外の展開! 1分間だけってスピード勝負すぎて流石のウルトラマンもびつくりだ!』

アナウンスを聞きながら改めて距離をとる2人。

「すみませーん、スタートの合図お願いしまーす」

『オウ任せとけ! んじゃ改めて。レディイイー…!』

「システム起動。出力100%」

加賀美の纏うスーツ、その目に当たる部分や胸の中心などが青白い光を放つ。

『ゴーーー!!!』

「エクスさん、頑張つて耐えてくださいいね」

次の瞬間、鋼鉄の拳がエクス目の前まで迫っていた。

「っ！」

上半身を右に傾けて拳をかわし、がら空きの胴体に向かって左足を振り上げる。

「甘い！」

その蹴りを受け止め、逆にエクスを投げ飛ばす。エクスは何とか空中で身を捻って着地した。

「エクスさん。騎馬戦が始まる前に、私の夢…教えましたよね？」

「…言ってみましたね」

「そのために私はここで、全力をもってエクスさんを倒します」

「……出来るなら、良いですよ」

息を吐き出し、拳を構える。僅かな動きでも見逃すまいと加賀美を真っ直ぐ見据える。

「ありがとうございます！」

またもや目の前に居る加賀美。横薙ぎの蹴りを両腕で受け止めるものの、圧倒的な威力で吹き飛ばされてしまう。

地面に足を擦りつけながら威力を殺すものの、既に加賀美は接近している。

「はあっ！」

放たれた拳は頭を下げる事で回避し、下から加賀美の顎に向けて拳を振り上げる。加賀美は若干よろめいて1歩下がる。だが、それだけだった。

「嘘やん……」

「まだまだ戦いはこれからです、よっ!」

再度放たれた拳。こんどは避けずに左手で受け流し、伸ばされた右腕を右肩に担ぐように体を半回転させる。

そして、背負い投げの要領で全体重をもって加賀美の体を投げ飛ばした。

地面に叩きつけられた加賀美からは、小さいながらも確かに肺の中の空気を吐き出したような声漏れる。

「なるほど。硬いものは硬いものにぶつけろって事ですな」

「……まさか4回目の攻撃で対応されるとは思ってもみませんでした」

起き上がる加賀美から距離を取ったエクススの言葉に、加賀美はどこか嬉しさを滲ませたような声を出す。

「まだまだここからです。場外負けなんてことはさせないので安心してください」

「僕が負けるとか面白いこと言いますね。言っておきますけど僕最強なので」

自信満々のエクススに、スーツの中で頬を緩ませる加賀美。だが、直ぐに表情を引き締めて脚裏のブースターで加速する。

「はっ！」

加賀美の突き出すような蹴りを振り下ろした拳で叩き落とし、所謂ヤクザキックで逆に蹴りをいれる。更に、ジャンプしてからの回し蹴りで加賀美の首を強制的に右に向かせる。

今度は明らかによろめいて数歩後退する加賀美。だが、そこまでダメージが通っているようには見えない。

「そのスーツ硬すぎませんか？全然攻撃通ってるように見えませんけど」

「それはこっちのセリフですよ。なんでこのスーツの動きについて来れるんですか」
互いに軽口を叩きあいながら今一度衝突する。

戦いはまだ、始まったばかりだ。

社長とタイマン張ります!勝ちます!【#雄英体育祭決勝戦】

繰り出した右拳を防がれ、反対に脇腹へ鋼鉄の蹴りが叩き込まれる。

予想以上の衝撃によるめきかけるが足に力を込めて踏みとどまり、裏拳でスーツの顔を撃ち抜いた。

「おおおっ!」

よろける加賀美にラリアットで追撃。加賀美の首に腕をかけ、地面に叩きつける。

地面がヒビ割れ、スーツが軋んだ音が聞こえてくる。同時に拳や腕に鈍い痛みが走り、エクスは顔を顰めた。

かなりの強度を誇るスーツを生身で殴れば、柔らかい肉体の方がダメージを受けるのは当然だ。

「まだまだ!」

起き上がった加賀美が拳を振るう。最低限の接触で受け流しつつ、もう一度加賀美を投げる為に腕を掴む。

「同じ手は食らいません!」

加賀美が強く地面を踏みしめると、加賀美の足が地面に沈みこんだ。そしてエクスの腕を逆に掴み返し、勢いよく投げ飛ばす。

背中から地面に叩きつけられたエクスはその衝撃と痛みで意識が飛びかける。

一進一退の攻防。だが、攻撃力防御力共に高い加賀美の方が優勢なのは明らかだった。

「つくそ…そのスーツぶっ壊れじゃないですか」

ふらふらと立ち上がるエクスが愚痴にも似た事を呟く。

「私の持てる全ての力の結晶なので」

『残り時間30秒!』

「時間も少ないですし、終わらせましょう」

地面から軽々と足を引き抜き、エクスへと歩み寄る。エクスも拳を構えて真正面から加賀美を見据える。

睨んでいるわけではないにも関わらず、圧倒的な迫力を与えてくるエクスの瞳に冷や汗を流しながらも、加賀美の口の端はつり上がっていく。

「いきますー!」

「っ!!」

地面を砕きながら加賀美がエクスに接近する。加賀美が拳を引いたのを見てエクス

は体を屈め、足払いをかける。瞬時に足を止める加賀美。

「しまった!」

生まれた明確な隙を逃さず、両手で体を持ち上げてスーツの胸部を蹴りあげるエクス。更にその反動を利用してエクスが立ち上がり、ストレートに攻撃を受けた加賀美が少し離れた位置で膝をつく。

だが、加賀美は膝をついた体制を即座にクラウチングスタートの構えに変えて再び走り出す。

「おらあつ!」

助走をつけたエクスの拳は、的確にスーツの顔部分が来るであろう場所に向かって進んでいく。このまま進めば明らかに攻撃を受ける状況。だが、加賀美は加速を止めなかった。

「ああああつ!」

エクスの拳にぶつけるように左手を突き出す。ペキリという軽い手応えが加賀美の手に伝わり、エクスが顔を歪める。

「ふっ!」

エクスの攻撃を打ち破ったのもつかの間、薙ぎ払うように振るわれた右脚が加賀美の脇腹を直撃した。

不意をつかれてよろめく加賀美をエクスは力いっぱい蹴り飛ばす。

「こほっ、こほっ……。あー、スーツじや衝撃は防げないのは難点ですね」

軽く頭を振り呼吸を整える加賀美と苦痛を顔に滲ませながら右手の中指を抑えるエクス。

「硬すぎですよそれ……。ダメージ通ってる気がしないんですけ……。どお！」

喋りながらも一瞬で距離を詰め、下から拳を振り上げる。加賀美はそれを一歩後ろに下がることで回避する。

「はっー！」

すかさずエクス目掛けて右拳を放つ。

真正面から受ければ先程のように指が折れかねないと判断したエクスは体を僅かに横へ逸らし、左手で加賀美の右手首を掴む。

「おらー！」

お返しとばかりに右拳を突き出す。が、加賀美はこれを左手で受け止めた。

ギリギリと押し合うものの、力をそのものは拮抗している為に全く手が動く気配がない。

これでは無意味だ、そう悟ったエクスは息を吸い込み――

「づっー！」

「んな……っ!?」

額を加賀美の顔部分に思い切り叩きつけた。予想外の行動とエクスの額から流れる血に気を取られる加賀美。

その隙をつき、拳を引き戻して加賀美の腹部に思い切り突き立てる。

エクスの拳からまた軽い音が響く。そして、強固な加賀美のスーツに僅かながら罅が入った。

肺の中の空気を無理やり押し出され、動きを止める加賀美にエクスの追撃の嵐が降り注ぐ。

体を縮めてなんとか耐えようとする加賀美にエクスは容赦なく攻撃を浴びせる。

「っ、うああー!」

加賀美が体を縮めたまま、エクスに体当たりする。鋼鉄の直撃をもろに食らったエクスは後ろに倒れ込んだ。

「はあっ!」

起き上がるとうとするエクス目掛けて突き出された脚を両手のひらで受け流しつつ、立ち上がる勢いで後ろに下がる。

『残り10秒!』

プレゼント・マイクの声がスタジアム中に響く。エクスの大振りな拳を姿勢を低くす

ることで避け、逆にエクスの顔めがけて拳を放つ加賀美。

エクスはそれを両手で受け流しつつ加賀美の腕をがっちりと掴む。

「うおおおおっ！」

そしてそのまま、加賀美を横振りに投げ飛ばした。

地面に叩きつけられるのを避けるために受身をとって、膝立ちになる加賀美。

エクスにまた近づくと顔を上げると、既にエクスは目の前まで来ていた。

咄嗟に腕を交差させて防御の姿勢をとる。その防御を意に介さないエクスのヤクザキックが加賀美の体を更に後方へ突き飛ばした。

「つぐ…… まだまだ！」

更なるエクスの攻撃に対し、加賀美はスーツで強化された身体能力をフルに使った【腕の力で体を跳ね上げる】という荒業で回避する。

『残り5秒！カウンタースタート！』

躲かれたと気づいた瞬間、エクスが即座に方向を変えて加賀美へ距離を詰める。そして、地面が碎けるほど強く踏み込んだ。

「シッ！」

見るからに持てる力の全てを込めたエクスの右ストレート。

それを見て、加賀美はスーツ中で微かに笑みを零した。

それはまるで、その全力の拳を打ち破り決着をつける秘策があるかのようで。

「はぁッ!」

エクスの拳が突き出された瞬間、その腕に絡みつかせるように加賀美も拳を放つ。時が遅くなったような錯覚の中、2人の拳が伸びる。

エクスの拳は絡みついた加賀美の腕に動きを誘導されるように加賀美のスーツ胸部を掠り、加賀美の拳はエクスの顎を捉えた。

『クロスカウンター』。エクスさんがご存知かは知りませんが、この技は間違いなく必殺の一撃になりうるものです」

加賀美の拳を受け、仰向けに倒れたエクス。

審判役のミッドナイトがエクスに近づき、安否確認を行っている。

「はつきり言って、上手くいくかは五分五分でした。このスーツの身体能力をもつてしてもあそこまでの確なカウンターを打てるかはわからなかった。何せ、最低でも自分と同等以上の相手に対する技ですから」

スーツの下で加賀美は小さく息を吸い込み、キツと鋭い視線をエクスに向ける。

安否確認を済ませたミッドナイトが手に持った鞭をしながら声を上げた。

「エクス君戦闘不能!加賀美君2回戦進出!」

「私の勝ちです。貴方の敗因はただ一つ、貴方はひたすらに強かった」

ワツと特大の歓声が湧き上がる。

『まさかまさかの番狂わせ！勝者、サポート科！加賀美ハヤト!!』

「よっしやああああ!!」

拳を突き上げ雄叫びを上げる。ちょうどそのタイミングで、スーツの放っていた光が消える。

それをスーツの内部から見ていた加賀美は笑顔のまま肩を落とす。

「ただ、これ以上の戦いは無理でしょうね。サポートアイテムも使い果たしましたし、優勝は無理か…」

ぼつりと呟く加賀美。優勝という目的を掲げてはいたものの本気でそれを達成するのが難しい事を加賀美は理解していた。

「これで、1人でも夢を諦めない子供が増えてくれたら良いんですけどね」

そう言つてくすりと笑い、加賀美はステージを降りた。

「全く…これで何度目か分かってるのかい？流石に怪我が多すぎるよ」

「すみません…」

リカバリーガールの説教を受け、土下座するエクス。加賀美の見事な一撃で無事に氣絶したエクスは保健所で治療を受けていたのだ。

「確かに、相手の子の思いに全力で応えたい気持ちは分かるけどね、それにしたって骨折した手であのスーツを殴り続けるのは良くなかった」

「いやもうほんと…すみません」

「顔を上げな。男が簡単に土下座なんかするもんじゃないよ」

「はい…」

言われた通りに顔を上げる。リカバリーガールは既に怒ったような表情ではなくなっていた。

「痛むところはあるかい? ないならクラスの席へ戻りな」

「はい…。ご迷惑おかけしてすみませんでした…」

「なるべくウチには来ないようにね」

失礼します、と頭を下げて保健所を出る。廊下は全くといっていいほど生徒がおらず、しんと静まりかえっていた。

「喉乾いたな」

観客席に戻る前に、飲み物とスマホを取りに控え室へやってきたエクス。スマホを見ると、メッセージアプリに十数件の通知が来ていた。

控え室のベンチに座ってメツセージアプリを開く。

ふれん（ アルビオ、エビオって呼ばれてんの草なんだが ）

イブラヒム（ これからはエクスさんじゃなくてエビさんで良くね？ ）

メリー（ 草 ）

イブラヒム（ え、エビさんの相手の人めちやめちやかっこいいんですけど ）

メリー（ いやあれ、どう見てもアイアンマン… ）

イブラヒム（ 手からビームとか出んのかな ）

ふれん（ アルビオ強くな？ ）

メリー（ 何気にエクス先輩が本気で戦ってるの初めて見たかもしれない ）

ふれん（ アルビオ見た目弱そうだしね ）

イブラヒム（ エビさんより俺の方が強い ）

ふれん（ は？ ）

メリー（ それは無い ）

イブラヒム（ うわ、超否定するじゃん。具合わる ）

覗いて見れば、いつの間に作られていたのか中学時代に仲の良かった後輩3人とエクス
スのグループが新たに追加されていた。

話がコロコロ変わるトークに笑を零しながら、エクスもグループに参加する。

(このグループなに?) < エクス

ふれん < アルビオく!お疲れ様! >

イブラヒム < 乙 >

メリー < 惜しかったですね >

(いや、本気出せば勝てたよ? ただ滅茶苦茶お腹痛かっただけで) < エクス

イブラヒム < はい、言い訳 >

ふれん < うわ、アルビオそういうことするんだ >

メリー < 先輩最低ですね >

(メリッサさんのが1番心に来る!) < エクス

(嘘です。嘘つきました。ごめんなさい) < エクス

イブラヒム < (草)

メリー < (なんか…ごめんなさい)

ふれん < (謝れてえらい!)

(で、このグループなに?) < エクス

ふれん < (いや、アルビオと最近連絡取ってなかったじゃん?)

ふれん < (だからみんな寂しいねーって言うたら)

ふれん < (いぶちゃん「俺エクスさんの連絡先知ってるよ」って言ったから)

ふれん < (アルビオと話すためにいぶちゃんに作ってもらった)

メリー < (フレン入力早くない?)

(ヒムさ、なんで呼びかけ変えたの? エクスさんでいいじゃん) < エクス

イブラヒム < (エビスさんのせつかくの渾名じゃん? だから)

(俺あの渾名認めてないからね!?) < エクス

メリー < (草)

ふれん < (草)

イブラヒム < (何事も慣れって大事よ?)

（慣れたくねえ……!）
（ ）
エキス

メリー（ ）
（ ）
「つていうか、エキス先輩トックしてていいんですか？」

イブラヒム（ ）
（ ）
「それな」

（ ）
「やばいかもしれん。戻るわ」
（ ）
エキス

ふれん（ ）
（ ）
「いってらー」

イブラヒム（ ）
（ ）
「がんば」

メリー（ ）
（ ）
「……何を頑張れなんだろう」

スマホをポケットに入れ、ペットボトルのお茶を飲みながら観客席へと向かう。
フィールドでは常闇と葛葉が戦っていた。

「む、エクス君。怪我は大丈夫なのかい?」

「つす、大丈夫です」

「そうか。いい戦いだつたぞ」

「ありがとうございます」

隣の席に座る飯田に返事を返しながらか試合を見る。ちょうど今は葛葉が作り出した

赤い槍や剣を常闇のダークシャドウが弾き返しているところだ。

地面に落ちたら消えるところを見ると、あの武器類は葛葉の血を操って作り出したものなのかもしれない。

未だに謎が多い葛葉の個性についてエクスが考えていると、後ろから突然肩を組まれた。

「さっきの試合みただぞ！ めちゃくちゃ熱かったな！」

「ありがとうございます。…そんなに面白いとこありました？」

「だってお前、逃げれば勝てるのに本気で向かっていったら？ すげーかつこよかつたぞ」

「ああ、まあ…。ありがとうございます」

「お、エクス！ さっきの見たぞ！ 凄かったな！」

思ったよりも褒められて戸惑うエクスに、クラスの面々が次々と賞賛の言葉を浴びせていく。

「なんですか、皆めっちゃめっちゃ褒めるじゃないですか僕のこと」

「それだけエクス君が凄かったって事じゃないかな。エクス君、凄くかつこよかつたし。…それにしても、スーツか…。強い個性を持った人がヒーローになるのが普通だけど、

ああいうのがあれば無個性でもプロヒーローに…」

「前から思ってたんですけど、緑谷さんって何書いてるんですか?」

「うええっ!? そ、そんな、人に見せるものじゃないって言うか…」

ノートらしきものに何かを書き始めた緑谷にエクスが以前から疑問に思っていたことをぶつけてみる。

緑谷は慌てたように両手を動かしてノートを庇う。

「ただ将来ヒーローになる為の研究っていうか、その…。分析、みたいなの?」

「そんな凄いもん書いてるんですか!? 僕にも見せてください!」

自分のオタク趣味に顔を赤くする緑谷。だが、そんなことお構い無しにエクスが瞳を輝かせて詰め寄っていく。

じりじりと寄ってくる子犬のような瞳に緑谷はうぐつと表情を固め、

「う…、ちよつとだけなら…」

「!… まじですか!」

純粹無垢なエクスの瞳に根負けした緑谷がノートを手渡すと、エクスは新しいおもちゃを買ってもらった子供のようにはしやぎ出す。

「僕あんまりヒーローに詳しくないんで、これ書いてる緑谷さん凄いですよ!」

1ページ1ページを丁寧に読みながらエクスが言った。

「そんな事ないよ。多分誰でも出来るし!」

「まあ、確かにそうかもしれないですけど。でもやってるのは緑谷さんだけじゃないですか」

「そうでしょう？と首を傾げるエクスに緑谷は目を見開く。

「出来る出来ないじゃなくて、今やってるかどうかだと思えますよ。僕はね」

ノートに視線を戻しながらエクスの呟いた言葉。それが、僅かながら緑谷の心にあつたモヤモヤを晴らした。

「エクス君って凄いや」

「あ、気づきました？ 僕この世界でいっちゃん強いんですよ。多分オールマイトの次の次くらいに」

「それ一番かな…？」

のほほんとした空気のエクスに思わず苦笑し、緑谷は自分の考えを改める。

見た目的に自分とは話が合いそうにないと思っていたけど、そんなことは無さそう
だ。

楽しそうにノートを読み進めるエクスに、緑谷はそんな感想を抱くのがあった。

超絶イカしたヒーロー名を決めます!

エクスが敗退した後も多くの人々が見守る中、体育祭は順調に進んでいった。

最終的に準決勝に残ったのは轟、飯田、葛葉、爆豪の4名。

轟 v s 飯田の試合は轟が飯田のエンジンを停止させたことにより、轟の勝利。

葛葉 v s 爆豪の試合は葛葉の放つ武器類を吹き飛ばしつつ、最大威力の爆撃を直撃させた爆豪の勝利となった。

そして決勝戦。

互いに実力が拮抗した五分五分の試合だったが、爆豪の切り札を受けた轟がステージ外に出たことにより爆豪の勝利となった。

結果として、1位が爆豪。2位が轟。3位タイが飯田と葛葉という結果に終わった。

そして…

「終わったあゝゝ」

無事に閉会式まで終わらせたメンバー達は、疲れた体に鞭打って帰宅の準備をしていた。

「ありえんくらい疲れた…。ふあ……。あ」

「でつけえ欠伸だな。でもまあ、……。ふ、分かるぜその気持ち」

カバンを肩に担ぐように持ちながら欠伸をするエクス。それを見た切島も、エクスのが移ったのか欠伸をしながら応える。

「切島さんって誰に負けたんですか？」

「俺は爆豪にやられた。やつば特訓が足りてなかったわ」

「特訓ってマジで言ってます？」

切島の言葉にうへえと顔を歪ませるエク스에、切島が笑いかける。

「エクスもやろーぜ！ 今以上に強くなって、来年は優勝だ！」

やる気に満ちた声と共にガッツポーズをする切島を見たエクスはまた顔を歪ませる。

「なんでそんな元気残ってんすか」

「すげー楽しかったからな！」

笑顔を見せる切島を見て、自然とエクスの口角も上がっていた。

「来年は僕が優勝かあ。楽しみですね」

「おう、負けねえからな！」

「……それで、理由は？」

「ちゃんと7時には準備終えてて、二度寝して起きたら8時半でした」

「反省文。 10枚だ」

「なんでですか！ 謝ってるじゃないですか！」

「騒ぐな。 あんまり五月蠅いようだと、明日からうちのクラスの生徒が1人減るぞ」

体育祭が終わった次の日。 当然のようにエクスは遅刻していた。

相澤から容赦のない罰を受け、渋々席につく。

「んじゃま、話を戻して。 指名が本格化してくるのは経験を積み即戦力として判断さ

れる2、3年から……。 つまり今回来た『指名』は将来性に対する『興味』に近い」

相澤の話聞いていたエクスが手を上げる。

「何の話ですか」

「遅刻したお前が悪い。 あとで周りのやつに聞け」

ギロリと睨まれ、エクスは身を縮こまらせた。

「それで、だ。 今回で得られた興味が卒業までに削がれたら一方的にキャンセルなん

て事はよくある。で、その指名集計結果がこうだ。例年はもつとバラけるんだが今回は二人に偏った」

相澤がリモコンのようなものを操作すると、教室に設置されているモニターに画像が映し出される。

そこには映っていたのは、数名の生徒の名前と棒グラフだった。

【轟】 3854件

【爆豪】 3375件

【葛葉】 590件

【常闇】 314件

【飯田】 298件

【エクス】 227件

【上鳴】 166件

【八百万】 97件

【切島】 62件

【麗日】 23件

【瀬呂】 14件

移さ出されたグラフを見てクラスの生徒達は様々な反応をみせた。喜ぶもの、落ち込むもの、特に反応を示さないもの等。

だが、エクスだけは違った。

「これなんの数だ……。クレームの数的なやつか？ うわありそー。オリンピックの代わりらしいしなー」

ブツブツと見当違いの推理をして、間違っているのに納得する。

エクス自身の地頭は悪くない。なんならかなり良い方なのだが、いかんせん情報が少なすぎたのだろう。

そんなエクスを見かねてか、アルスがノートに簡単な説明を書いて、個性を使ってエクスへ飛ばした。なんだかんだアルス師匠は優しいのだ。

エクスは受け取ったノートで何が起きているのかを理解する。

「なるほどな、つまり227人が俺をスカウトしてんのか。うわ迷うなー。やつば収入が良いところがいいな。オールマイトからスカウト来んかなあ」

椅子を後ろに傾け、両手を後ろに伸ばすエクス。そのエクスの言葉に相澤が反応する。

「エクスお前話聞いてたか？」

「まあまあまあ…。そこは捉え方次第みたいなどこありますよね」

「はあ…」

質問の答えをはぐらかすエクスに相澤がため息をつく。相澤からすれば、エクスは

『成績は優秀だが所々不真面目な生徒』といったところだろう。

「お前、地頭は良いんだからもう少し真面目にやれ」

「なんで真面目にやってない前提かわかんないです」

「真面目な奴は何回も遅刻しねえだろうが」

「俺、遅刻するやつとか許せねえっすわ」

「あ？」

言い逃れようとするエクスをまた睨みつける。睨みつけられたエクスは目を逸ら

して無駄に上手い口笛を吹いた。

「…話を戻すが、要するに君達には職場体験でヒーローの仕事を経験してもらう。そ

の為に今から君達には『ヒーロー名』を決めてもらう」

ヒーロー名という単語にクラス中の生徒が一斉に反応する。

「まあ、仮ではあるが適当なもんは…「付けたら地獄を見ちゃうよ！」」

謎の声と共に教室の扉が勢いよく開かれ、体育祭で司会をしていたヒーロー、ミッド

ナイトが教卓へと歩いてくる。

突然のミッドナイト登場に少しザワつく生徒達にミッドナイトは話を続ける。

「学生時代に付けたヒーロー名が世に認知されそのままプロ名になっている人多いからね!」

「まあ、そう言う事だ。その辺ミッドナイトさんに査定してもらおう。俺はそう言うのはできない」

そう言つて相澤は懐から寝袋を取り出した。

「将来自分がどうなるのか、名を付けることでイメージが固まりそこに近づけていく。

それが『名が体を表す』つてことだ。例えばオールマイトとかな」

それだけを伝えると、目を閉じて眠ってしまった。

代わりにミッドナイトがペンと小さいホワイトボードをクラス全員に配り、授業の概要を説明した。

曰く、みんなでヒーロー名を決めて発表するそうだ。

何名かの生徒はヒーロー名を発表という事実には震えた。

レヴィの机の前にエクスがしゃがみこみ、体重をかけるようにして両肘をついている。

「なんかあります?」

「ナンデ席立つてるノ?」

「え、駄目なんですか?」

エクスが教卓へ振り返る。ミッドナイトは難しい顔をしていたが、やがて無言で親指を立てた。

「大丈夫みたいですね」

「エエ〜…」

この学校大丈夫か?とレヴィは思った。

「なんかカツコイイやつ考えてくれませんか?」

困惑を隠しきれないレヴィ。そんなことお構い無しにエクスが机に頭も乗せる。

「自分で考えなヨ…」

「僕が考えたら『絶対無敵エクスアルビオ!』とか『ヴォルデモート』とか『エクス・メ

ロディ』とかになりますよ?」

「ン???」

「お互いに考えるのどうですか。めっちゃめっちゃイカした名前つけますよ」

「信憑性ないワ。ゼツタイふざけるデショ」

レヴィが疑うようにエクスを見る。エクスは不本意だというように机を両手で叩いた。

「僕が! ふざけると思えますか!? この僕が!」

エクスが周りに迷惑がでないボリュームで叫ぶ。

「さつき自分で言ったヒーロー名思い出せる?」

「ちよつと何言ってるかわかんないです」

「ほら見ろ」

レヴィに言い負かされたエクスがぐぬぬと唸る。

「でも、割とまじで悩んでるんですよ。僕が考えるとふざけちやうんで」

「ふざけなきやアいいジャン」

「…無理だ…ッ!」

苦しむような声で拳を震わせるエクス。演技が微妙に上手い分余計に腹が立つ。

「ンジャ、『英雄 エクス・アルビオ』にしたラ? 個性からとつテ」

片腕で頬杖をつきながらレヴィが言った言葉を聞いたエクスは腕を組んで上を見上げる。

「あく、英雄かあ。いいな、じっくり来るわ。それにしますね」

レヴィの机に突っ伏し、英雄かあ…と呟いているエクス。結構気に入ったらしい。

「ボクはちゃんと考えたんだシ、エクスくんもボクのヒーロー名考えてヨ」

『『亜人ヒーロー レヴィ』とかでいいんじゃないですか？ レヴィさん名前カッコイイですし』

「無難だネエ」

実際、名前をそのままヒーロー名にしても違和感の無いエクスやレヴィはかなり考える上で有利だろう。

「決まった子からそろそろ発表していきましようか。 エクス君は席に戻って？」

「っす」

席に戻り、ボードにヒーロー名を書くエクス。 ついでに自分の似顔絵も書いた。

自信の出来だ。

「それじゃあ発表してもらいましようか。 最初にやりたい人はいる？」

ミッドナイトが教室内を見渡す。すると、一番端の人物が手を挙げた。

『『輝きヒーロー I c a n n o t s t o p t w i n k l i n g !』

「短文！」

青山のヒーロー名にクラスの殆どが思ったことを誰かが代弁した。

ちなみに、エクス、アルス、葛葉の3名は英語が苦手なので分からなかった。

次に出てきたのは芦田三奈。

『『エイリアンクイーン!』』

「2!? 血が強酸性のアレをめぎしてんの!? やめときな!」

今度はミッドナイトが直々に突っ込んだ。

ちなみに、エクス、アルス、葛葉の3人は元ネタが以下略。

「それじゃあ次、私いいかしら」

蛙吹梅雨が手を挙げた。

「小学生の時から決めていたの。『FRIPPY』」

このヒーロー名にクラス中が沸いた。エクスには理解出来なかったが、何かしらが

起こったのだろう。

「次、いっすか…」

続けて手を挙げたのは葛葉。

「えー、『ヴァンプヒーロー ラグーザ』」

またもやクラスが沸いた。普通にカツコイイヒーロー名だった。

「はい、僕行きます」

この気を逃すまいとエクスが手を挙げる。今の雰囲気なら行けると確信していた。

『『英雄 エクス・アルビオ』です』

「ちよつと名前が長いわね。もう少し短くした方がいいかも」

「ツスー…、まじですか。じゃあエクスでいいです」

「それなら呼びやすくして良いわね」

予想外の反応で焦ったが無事に対処出来たエクス。

席に座ると、アルスから紙切れが送られてきた。

『エビオでいいじゃんw』

エクスは紙切れを握りつぶし、ごみ箱に投げた。

その後も順調に発表は進んだ。

問題も、強いていえば爆豪のヒーロー名が何度か書き直しにはなった程度。

無事に全員のヒーロー名が決定した。

時刻は午後8時。

生徒達が全員帰宅している時間に、雄英高校の教師達は会議室に集っていた。

「それで、本当ですか。その話は」

オールマイトの問いに根津は両手を広げて答える。

「ああ本当さー！　ようやく解読できた暗号には、明らかに『雄英高校にヴィラン襲撃。A組ヒーロー基礎学。目的オールマイト』と書いてあった」

今日この時間に教師達が集められたのは、先日のヴィラン襲撃に関して何者かが警告を発していたことが分かったからだだった。

「その暗号が届いたのは？」

「襲撃の3日前。その時はただのイタズラだと思つて解読しなかつたんだけどね。

襲撃の後に何か手がかりは無いかと思つてダメ元で解読したらこれだったのさ」

根津の返答に相澤は肩をすくめる。

「という事は、雄英高校にもヴィラン連合にも内通者がいる可能性があるって事ですか」

「そりゃいいぜ！　互いに内通者が居たらプラマイゼロだ！」

「まだいると決まったわけじゃない」

皮肉のように声を上げたプレゼント・マイクに相澤は目線を鋭くする。

「確かに内通者がいるかは確かめる必要がある。だが、それは今回じゃない。問題は次に暗号が送られてきた時の対処だよ！」

根津の言葉に教師達が押し黙る。

「私は信用するべきだと思います。今回警告をくれた以上、敵対心は無いと思われま

す。それに、人を信じなくてはヒーローは務まりません」

「だが、今回ので信頼を得てから次の暗号でオールマイトを罠に嵌めるといふ可能性も0じゃない。ヒーローなら最善を考えながら最悪を想定するべきです」

「難しく考えないでいいんじゃない？ オールマイトが嵌められる可能性があるならオールマイトを一人にしなきゃいいし？」

「私も花畑先生に賛成ね。この件を大きく見すぎるのもどうかと思うわ」
様々な教師がプロヒーローとして話し合う。

暗号の主が敵か味方か、どういう意図があるのかなど次々と話題が出てくる。

「はわわ……。わ、私はとりあえずは信用してみるべきではないかと思えますう」

「信用するのには賛成ですけど、全面的に信じるのも危険ですから様子見でいいんじゃないですかね。私的には文面に敵意は感じませんでした」

「神田先生の意見で、相澤先生の仰った通り警戒をしておく。というのが今のところ一番無難ではあるね。どうだい？」

教師達の反応を見る限り、特に反対意見は無いようだ。

ひとまず様子見をしつつオールマイトが孤立させられないように警戒することで話を落ち着ける。

「まだまだ話すことはある。この暗号の送り主についても情報は欲しいし、そもそも

ただのイタズラが的中しただけの可能性も無くは無いかからね!」
そうして、その日のプロヒーローによる会議は深夜まで続いた。

体育祭登場ライバー十？α？まとめ

剣持 刀也
けんもち どうや

所属：雄英高校 ヒーロー科 1年B組

個性【研磨】

手で触れたものを研いだり削ったりする個性。元ネタはリスナーから送られた砥石。

空間を極限まで削ることで、一時的に『虚空』を作り出し、擬似的なワープも出来る。が、虚空を使ったあと暫くは個性が使えなくなる。

効果範囲は最大20m弱。

個性で木刀や鉄の棒を剣や刀へ変化させて戦う。

入試の際、実技筆記ともに高得点をたたき出した優等生。

星川 サラ
ほしかわ さら

所属：雄英高校 ヒーロー科 1年B組

個性【流 星】
シューティングスター

その名の通り、星をうちだす。大きさを速度も自在に変えることが出来る。星は最大で10個まで展開可能。

移動から戦闘、救助と様々な事に使える万能個性。

ちなみに、出現するのはリアルな星ではなく☆↑この形。

オタクをバカにしたような態度をとるメスガキに見えて、実は普通にいい子だったりする。

実技試験の際、他の参加者を助ける姿がよく見られた事で、レスキューPを大幅に獲得した。

ヤミクモ ケリン

所属：雄英高校 普通科 1年D組

個性【ミサイル】

ミサイルを発射する個性。大きさは変えられるが、最大でも自分が乗れる程度。

ミサイルは発射から50秒経過するか、着弾で爆発する。火力は普通に出る。だ

が、最大1つしか打ち出せない上に、1度使うと24時間は使用できなくなる。

よく分からない生命体とおじさんの人形を使って遊んでるヤベー奴。実際は悪い奴ではないが、あまりにも奇行が目立つ。

ぶちとばしたが筆記・実技共にダメだった。

鷹宮 たかみや リオン りおん

所属：雄英高校 普通科 1年C組

個性【知能デバフ】

任意の対象の思考力を、時間経過とともに徐々に奪っていく個性。最終的に相手は棒立ちしたまま何も出来なくなる。

最大補足は1人と集団戦には向かないが、タイマンなら逃げ回るだけで勝てる。ただし、射程を15mから離れると解除される。

少し抜けたところのあるお嬢様。特徴的な言葉を使う。めっちゃめっちゃかわいい。半沢直樹見た？

デバフがロボットに効かなかったため、実技失敗。筆記も成績が振るわなかった。

ジヨー・力一
じょーりきいち

所属：雄英高校 普通科 1年C組

個性【幻像】

相手に幻覚を見せる個性。そこまで強力なものではなく、せいぜい見えるものを弄れるくらい。視覚をまるまる操ることは出来ない。

元々ヒーロー志望ではなく、普通科から進学するつもりで雄英高校に来た。何気に普通科トップクラス成績を誇る。話が上手くて面白い。

竜胆りんだう尊みこと

所属：雄英高校 普通科 1年C組

個性【鬼姫】

身体能力が高い異形系の個性。酒を飲むとより強くなるが、未成年飲酒禁止法があるから飲めない。母親や祖母も同じ個性。

鉄をパンチで曲げたり、キックでコンクリにヒビを入れたりできる。

将来は実家の老舗酒屋を継ぐと決めているので、勉強の為に雄英にやってきた。リ

オンや力一と仲がいい。

みんなのママ的な立ち位置。

舞元まいもと 啓介けいすけ

所属：雄英高校 普通科 1年E組

個性【炎上】

小さな種火をつけ、その火をどんどん大きくする個性。 炎上は緩やかに進むのだ。 周りが油を注ぐようなことを言うと、火が大きくなる速度が上がる。

将来の夢は農家。 雄英に来たのは勉強の為。 経営科志望だったのだが落ちてしまいい、普通科に来た。

社やしろ 築きずく

所属：ヒーロー事務所・YASHIRO

個性【オーバーワーク】

仕事などに対する圧倒的な処理能力を発揮する。 その力はなんと一般会社員の7倍！ ただし、一般会社員の3倍の疲労も味わうことになる。

この個性をゲームなどにも使っていたりする。

ヒーロー事務所・YASHIROのリーダーとして、事務仕事の大半をこなしている。また、ヴィランが出現すると、無数のドローンやロボットを操作して戦闘や救助を行う。

葛葉の父であり、雄英で葛葉に友達が増えたようで安心している。

ドローラ

所属：ヒーロー事務所・YASHIRO

個性【ファイアードレイク】

身体性能と口から吐き出す炎が強力。

普段はそこまで強くはないが、戦闘を始めると体内の発熱器官の温度が上がり始め、徐々に強くなっていく。

戦いが長引くと、コンクリートが熔け、地面が燃えるような温度になることもある。

社のサイドキック兼最高戦力として、社のバックアップを受けながらヴィランに対峙する。

ヒーローランキング第8位。

葛葉の母として学校生活を心配していたが、話を聞く限り楽しそうに安心している。

鈴鹿 すずか 詩子 うたこ

所屬：???

個性【古の腐女子】

腐の妄想をしている間は絶対無敵。

リアルなBL的状况を見ると怪物並みの速度

で動くようになる。

みんなの歌のお姉さん(?)。恐怖の象徴であり、腐女子をかなり極めている。

パワードスーツ《KAGAMI》 式式

耐久性と補助機能、身体強化を改善したもの。ただしエネルギーの消費も激しい

為、1分しか稼働できない。

モチーフはアイアンマン。リパルサーも撃てる。ユニ・ビームは撃つとエネルギー

ギーが殆ど底を突く。

式式はアイアンマンスーツで言うMk-3に相当する。

今日はなんかやるく

リストをパラパラと捲る。知らない顔、知らない顔、知らない顔。

……

「何してんの?」

「職場体験どこ行くか迷ってます」

「あー。俺も全然決まんねえわ」

エクスをリストを覗き込みながら、上鳴が大きくため息をつく。

「将来に関わるって考えると、やっぱり込みしちやうよなあ」

「有名な事務所が絶対良いって事でもないですしね」

リストを机の中に放り込み、天井を仰ぐ。有名どころの事務所からも数件指名が来ているものの、ヒーローについて一般程度の知識しか無いエクスには判断がつかなかった。

「……あ」

「どした?」

エクスが脳に電流が走る。

知識が無いなら、有るものに借りればいい。

「緑谷さんってこういうの詳しいじゃないですか？」

「おー！ それだいたいブナイスアイデアじゃね!？」

善は急げ。

再びリストを引つ張り出しながら、金髪コンビは緑谷の席へ突撃した。

アホが2人活発になったのを見て、クラスの何人かは心の中で緑谷に手を合わせた。

「緑谷さんってヒーロー好きですよね？」

「えっ…？ うん、そうだけど…」

「指名来てる事務所で、俺らに合いそうなどこ教えて欲しいんだけど！」

「お願いします！ と、両手を合わせて頭を下げる。」

頼まれた側の緑谷はそんな2人をみて、案の定首を横に振った。

「む、無理だよ！ 僕なんて好きなかただけで対して詳しくないし…」

「ヒーローノート持つてるじゃないですか」

「そ、それはそうだけど…」

「このクラスで1番ヒーローに詳しいのはお前なんだからさ！ 頼む！」

今にも土下座をしそうな2人。というか、既にエクスは土下座していた。

緑谷は、机の中のノートを僅かに引き出す。

それは無個性だった自分が必死に積み重ねた研究の証であり、自分の憧れを象徴する大切なもの。

かつては馬鹿にされ、ぞんざいに扱われていたそれが今、必要とされている。

「…分かった」

「！ マジで!?!」

「うん。自信はそんなに無いけど、出来る限り協力するよ」

「やっぱ緑谷さん最高っすわ。同じクラスでほんと良かったです」

純粹に喜ぶ上鳴とエクスを見て、緑谷は小さく吹き出す。

裏表のない人達だな、と。心からそう思った。

「それじゃアリストを見せて。全ヒーローは流石に無理だけど、有名な人や事務所な

ら役に立てると思うよ」

自慢げに机に置かれたノートを見て、2人はリストを差し出す。

「お願いします」「お願いします!」

恭しく差し出されたリストを受け取り、パラパラと捲る。

どちらのリストにも膨大な数の事務所が書かれており、中にはヒーローランキング上位の名前もある。

指名数0の緑谷は、自分の師匠のように血を吐きそうになった。

「ふ、2人とも凄いな…。指名の量も質も…」

「まあまあまあ、僕ならこれくらいは当然ですよ」

「緑谷、なんかスマン」

気を取り直して、続きに目を通す。

暫く経った後、緑谷がリストを閉じた。

「うん。それじゃ、どっちからがいい？」

2人で顔を見合わせる。

そして、上鳴がエクスを指さす。

「じゃあエクスだな。発案者だし」

「じゃあ僕からで。お願いします」

「分かった。それじゃ、エクスクンだけど」

エクスの指名リストを開き、予め目星をつけていたページを見せる。

そして、当該ヒーローのことが書かれたノートのパージも開いた。

「実績も相性も考えたら、イチオシはここかな。『リゼ・ヘルエスタ』」

写真に写っているのは水色の髪をした女性で、どこか気品を感じさせる風貌をしていた。

「このリゼさんは剣使いとして有名なヒーローだし、この事務所にはバンケンさんって

言う肉弾戦が得意なヒーローも居るから、良い経験になると思う」
「なるほど」

緑谷のレポートによれば、リゼというヒーローは『ヘルエスタセイバー』なる剣を振るうらしく、過去には、飛来するトラックを一太刀で真つ二つにした実績もあるようだ。

「あとはここ、『紅頼雄斗』！ 武闘派ヒーローと言ったらやっぱり彼かな！」

「切島さんが好きなヒーローでしたっけ」

「そう！ 戦闘スタイルは拳で戦う時のエクスクンによく似ているから、ここでもきつとレベルアップに繋がるよ！」

切島に近い髪型と髪色の彼は、いかにも硬派といった出で立ちだ。

エクスクンも切島経由とは言え名を知っているほどなので、確かに実力も実績も十二分に
あるようだ。

「エクスクンの得意なところを伸ばせて実績も豊富なところなら、とりあえずこの2つ
が僕のオススメかな。 逆に苦手なところを克服したいなら、そつちでも2つほど候補
があるけど……」

「いや、大丈夫です。 めちゃくちゃ参考になりました。 ここ以外で探すならポイン
トとかありますか？」

「やっぱり無難に、有名な事務所は選んで損をしないと思う。 それと、剣的な物か肉弾

戦が得意なヒーローだよ。スマホで調べれば、ヒーローの戦闘スタイルは直ぐに出てるよ」

「うわ、もう神。後光が差してるやん。ホントにありがとうございます」

ペコペコと何度も頭を下げる。自分に合う事務所と、探すコツを教えて貰えたのは、ヒーローの知識が薄いエクスには大きなプラスだった。

次に上鳴向けの講座が始まったのを聞いて、エクスは体験先選びに戻るのだった。

「ここバッテリーあるよ」

「んあー、貰っとく」

その日の夜。

宿題を早々に切り上げたエクスは、パソコンでゲームに勤しんでいた。

「そういえばさー、イブラヒムってどんなヒーロー知ってるの？」

「えなんで？」

「なんとなくだけど」

中学時代からの親友であり、1学年下の後輩『イブラヒム』。今日は久々の2人でオ

ンラインプレイだ。

画面の中で特にやる事も無くなったエクスは、スコープで敵の位置を見ながら話題を振る。

「でも、いざ誰を知ってるか？　つて聞かれたら難しいよね。最近だとMt、レディとか有名じゃない？」

「え誰それ。知らんわ」

「エクスアルビオヒーロー志望じゃないの？」

「一応これでもヒーロー志望だけだね。こつち敵来てるね。3人」

ピンを指して見えた敵の位置を知らせる。

「突っ込む？　俺ウルトあるよ」

「おけ、虚空いる？」

「まだいい」

ヒヤッホーウと叫び声を上げながら、エクスが画面の中のキャラクターを操作し、それに追従するようにイブラヒムのキャラクターも走る。

そして響く、連続した銃撃音。

「ウルト投げた！　右の方見て！」

「おけおけおけ、1人やった。2人！」

「ナイスウ！ ……ラスト一人アーマー割った！ 肉当てた激ロー！」

「ナイスナイス、やった！」

「ナイツスウ！ イブラヒム強すぎ！」

倒した敵の物資を漁り、削れた体力を回復する。

他のパーティが来ている音は聞こえない。

「いや、今日エイム良いかもしれん。めっちゃ当たったわ」

「当ててたねえ。今日もしかして調子良い？」

「めっちゃ良い」

嬉しそうなイブラヒムの声に、エクスの頬も自然と緩む。

索敵を済ませ、新しい目的地向移動を始める。

「それで話戻すけどさあ、イブラヒムはどんなヒーローになりたいとかある？」

「え、俺ヒーロー志望じゃないよ？」

「え、え、え?!?!? そうなの!?!」

ふと問いかけた質問に対する予想外の答えに、エクスは声を張り上げた。

エクスの叫びに軽く笑いながら、イブラヒムは答える。

「うん。だって俺、普通に実家の温泉継ぐし」

「だって前ヒーローになりたいって言ってたじゃん」

エクスの中学期時代、イブラヒムは確かにヒーローに憧れているといった趣旨の話をしていたはずだ。

「なりたいはなりたくないけど、実際やるとなると一歩引けちゃうんだよね」

「あー…」

イブラヒムの言うことも、分からなくはない。実際、エクスもヒーロー科に行くことを長いこと悩んだからだ。

それでもヒーロー科に入ったのは、個性がヒーロー向きなことと、シンプルにトップヒーローの年収が凄かったからだ。

「てことは、イブラヒムってもう一生安泰じゃん」

「まあ、割と楽に生きれる感はあるよね」

イブラヒムの実家の温泉は全国で知らないものは居ない程の有名どころであり、海外からその温泉目当てにやってくる人も決して少なくない。

幼い頃からその手伝いをしていたイブラヒムは、まさしく、中学3年生にして人生の勝ち組だった。

「うわー！俺も楽しんで生きてえー！イブラヒムのとこで居候してえよ」

「別にいいけど、働いては貰うぞ。言っとくけど、サービス業マジ大変だからな」

「だよなあ。好きなこととして生きるのって難しいわ」

「な」

エクス・アルビオ16歳。

この日、世界の不平等さの片鱗を知った。

友達と遊びに行きます！全力で！

金曜日の放課後。まばらに生徒が残った教室で、エクスはバン！と机を叩いた。勿論、自分の机ではない。

「師匠！ 特訓しますよー」

ホームルームが終わるなり自分の席へ来たエクスに、アルスは胡乱気な瞳を向ける。

「ほんとお？ 前は結局、1回走っただけだったじゃん」

「そうですね。だから、今回はちゃんとやります」

鞆をゴソゴソと漁り、2枚のプリントを取り出す。

「スポーツジムとラウンドワン、どっちがいいですか」

その一言で、アルスの顔が思い切り歪んだ。

しばし悩んだ後、絞り出すようにアルスが口を開く。

「ラウンドワンって何するの…」

「他にも何人が誘って、サッカーとかバスケットか。体動かすスポーツを片っ端からや

ります」

再びアルスの顔が歪む。

「ジムは?」

「筋トレですね。ランニングマシンとかありますよ」

アルスは額を机に打ち付けた。

あくまで自分は最低限、近接の心得的なものを学べればよかった。なのに、どうしてこうなってしまったのか。

まあ、致命的にアルスには体力が無いからなのだが。

「ぶっちゃけどっちでもいいですよ。まずは師匠に体力付けたところからなんで」

顔を上げ、2枚のプリントを見比べる。唸り声を上げ、やがて、片方のプリントを指さした。

「こつち…」

「分かりました。日曜空いてますか?」

「うん…」

「じゃあ後で連絡します」

それじゃ、と、プリントを片付けて帰っていくエクス。

アルスは過去の発言を死ぬほど後悔した。

日曜。

朝から呼び出されたアルスは、悩みに悩んで選んだ洋服で集合場所にやって来た。

集合時間にはまだ時間はあるが、見慣れた顔が幾つか見える。

「おはよー(ぎ)ごーまー」

「おー アルスちゃん！ おはよー！」

挨拶した途端、芦戸に抱き抱えられる。

悲しいかな。 同い年のはずの2人には、10cm以上の身長差があった。

「うわー、ほっぺモチモチだー」

当然、アルスに抵抗など出来るはずもなく、頬ずりをただ受け入れるしか出来なかった。

「おはよう、アルスちゃん。 今日を楽しみね」

「梅雨ちゃんあーよー。 三奈ちゃんそろそろそれ辞めてよ、喋りにくいんですけどー」

「はーい」

蛙水に挨拶を返そうとして、頬ずりされていては思ったように言葉が出ないことに気

づく。

不満を訴えると、芦戸は大人しくアルスを離した。

「アルスちゃんオハヨー!」

息つく間も無く、再び抱き上げられるアルスの体。

後ろから抱き上げて来たのはレヴィであり、アルスとの身長差は脅威の15cm以上。

アルスはもう何も言わないことにした。

「おーつす、もう結構揃ってんな!」

「うおおお! 女子の私服! 普段の制服とはまた雰囲気違い!」

「アンタってホント、そういうところ」

手を挙げながらやって来たのは切島。その後ろから、上鳴と耳郎が歩いてくる。

「おはよー! 3人で来たの?」

「おう、さつきそこで会ったんだよ」

「上鳴ちゃん、耳郎ちゃん、おはよう」

「おはよう梅雨ちゃん! 私服似合ってるねえ!」

「ケロ、ありがとう。上鳴ちゃんもかっこいいわ」

「梅雨ちゃん、コイツのことは無視していいから」

「酷くね!？」

切島達が合流した事で、人数も7人になり、一気に騒がしくなる。

アルスも挨拶しようとして、動けないことを思い出した。

「レヴィちゃん、ゴー!」

「アイアイサー!」

アルスを抱えたレヴィが3人に突撃する。

「みんな、オハヨー!」

「おはよおー」

「おお、レヴィ! と、アルスも! おはよう!」

「おはよ。　こうやって見ると、アルスってやつば小さいね」

「おはよう!　今の2人、大きさも合わせて姉妹みたいだな!」

思わず、顔を見合わせるレヴィとアルス。　尚、アルスは上を見上げ、レヴィは見下ろす形になっている。

アルスの顔を眺めるレヴィの顔が、どんどん輝いていく。

「アルスちゃん、ボクの妹にならないイ!？」

「なりませーん。　僕は皆と同じ16歳ですうー」

べーっと舌を出すと、何が気に入られたのか、より強くレヴィに抱き締められる。

「おはようございます。皆早いですね」

「…おはようございます」

「……………」

程なくして、残りの3人も到着した。 集合時間2分前だ。

「集まりましたし、もう行きますか?」

「行く行く! ちよー楽しんで!」

「そういえば、なんで今日はこのメンバーなの? ウチとエクスって対してあんまり話した事ないからびびくりしたんだけど」

「あー、適当っすね。 LINEで上から順に聞いて、OKしてくれた10人です」

「とっつても雑だわ」

まさかの、とんでもない選び方だった。 もう少し何か無かったのか。

「オイ待て、俺は断ったぞ」

「爆豪さんは断るって分かってたんで。 絶対来てもらうって決めてました」

「テメェ……!」

青筋を浮かべた爆豪がエクスに掴みかかり、エクスが即座に逃げる。

あまり知らないが、アルスには、爆豪が本気で嫌がっているようには見えなかった。

「んじゃ、行くか! 今日アルスの体力作りだっけ?」

「らしいわ。確かにアルスちゃん、走るのも跳ぶのもダメダメだったものね」

「さつき抱えた時も軽かったからねー」

「うるせー」

怒ったように頬を膨らませると、周囲が笑い声に包まれた。視界の奥では、未だに

エクスト爆豪が鬼ごっこを続けている。

「レヴィちゃん、キツくなったら降ろしていいからね」

「ンー？ ダイジヨブ！ アルスちゃん軽いシ、ボク、チョー力持ちだからー！」

「今のは降ろしてくれーって意味だったんだけど！ 恥ずかしいよー！」

「アレ!? そうだったノ!？」

渋々といった様子で降ろされる。途端に低くなる目線。アルスは少しだけ

シヨツクを受けた。

「皆さんって、ラウンドワンとか行ったことあるんすか?」

「ウチは友達と何回か」

「俺も。そう頻繁にじゃないけど、何回かはあるぜ。葛葉は行ったことねーの?」

「無いつすね…」

そのまましばらくの間、談笑をしながら街を歩く。

今の時間帯はまだまだ人通りも多くなく、戻ってきたエクスト爆豪を入れても、歩道

の幅を気にすることなく歩くことが出来た。

そして数分。目的地へと到着する。割引込のフリータイムを選び、建物の中へと足を踏み入れる。

「えびせんばいつて来たことあるの?」

「何回もありますよ。師匠は…まあ初めてですよね」

「悪いかよお、初めてでよお」

「まあまあまあ、安心してください。難しいヤツあったら僕がちゃんとサポートするんで」

《サッカー》

「ハイパス! 俺に來い! …ナイスパス! オラア!」

「おっと、危な! レヴィさん!」

「よーシ、イケツ!」

「そう簡単に入られると思ってんじゃねえぞ! カエル女!」

「ケロツ。 任せてちょうだい！」

「おっと、行かせねえぜ梅雨ちゃん！」

「梅雨ちゃん！ アタシにパス！」

「させないっての…！ レヴィ！」

「っ、つかれた…」

「…あちい」

《バスケ》

「フツ…！ あーくそ、外した…」

「リバウンドサボんな金髪！ クソ髪イ、ボール寄越せやあ！」

「お前にはやらねえ…だあ!?!」

「がら空き。 上鳴！」

「っしや、任せ「三奈ちゃん！」 ええええ!?!」

「ナイスカット！ 梅雨ちゃん！」

「任せて。 ジャンプは割と得意なの」

「ま、待ってえ…」

「…きちい」

《ローラースケート》

「うおっ、思ってたより難しいな、コレ！」

「うわつとお!!? いっ…てえ…!!」

「大丈夫かしら、上鳴ちゃん」

「足を八の字にするとコケないよー」

「レヴィちゃん、手、離さないでね…!?!」

「ほーら、ガンバレーガンバレー」

「おい、テメエ浮いてんぞ」

「気のせいっすよ」

「あつははははは！ 師匠お！ 足ガツクガクじゃないですか！」
「そう思うんなら助けてろよおー！」

《バレーボール》

「師匠、行きますよー」

「へえっ！…あれ？」

「目閉じたらボール見えないでしょ」

「死ねえ！」

「つと危ねえ！ 流石だな、爆豪！」

「見とけよ、俺のスーパーサブ！」

「…アウトつすね」

「梅雨ちゃんつ、パス！」

「レヴィちゃん！」

「ティツ！」

「「おおー」」

………

………

…

「楽しかったー！」

「やっぱ大人数だと楽しいな、こういうの！」

「ねー！」

「爆豪も途中からめっちゃ楽しんだな！」

「うるせえ」

既に時刻は夕暮れ時。夕日に照らされた道を歩きながら、今日の思い出を語り合う面々。

その数歩後ろをエクスとアルスは歩いていった。

「師匠、どうでした？」

「めっちゃキツかったー。誰かさんは『サポートする』って言ってたのに全然助けてくれないしさあ」

「いや、特に難しいことやってないからね？ バレーは一応俺が相手したけど」

ジト目を向けられ、弁明をするエクス。そんなエクスを見て、アルスはいじけたようにそっぽを向く。

「はいはい。どーせ僕はへなちよこ雑魚饅頭ですよー」

「ひねくれてるなあ」

ツンとした態度で大股気味に歩くアルス。それを見て苦笑を零しながら、エクスが優しく声をかける。

「こんな感じなら続けられそうですか？」

「……うん」

「じゃあ、たまにこうやってみんなで遊びましょうね」

「…なんか舐められてるみたいでムカつく!」

「いや、なんでだよ!」

「いーつ!と威嚇して他のメンバーの所へ駆けていくアルス。

その後を追うようにエクスも合流する。

「おー、エクス! またこうやって遊ぼうぜ!」

「今度は他のみんなも誘いたいわ」

「良いですね、是非また遊びましょ。アルスさんは強制参加で」

「もおお! 僕そのうち死んじゃうー!」

最強のヒーロー事務所で色んなこと教えてもらおうぞ！

駅のホームに次々と現れる雄英生。

各々の職場体験先へ向かうため、自分の乗る電車を待つ生徒達の端で、エクスは緑谷と並んでいた。

「そういうわけで、ハツカさんのところにしました」

「そうなんだ。あそこの事務所のドーラさんも、近接戦においてはトップクラスだから、きつと良い経験になるよ」

緑谷と言葉を交わしているうちに実感した、知識というものの強さ。

授業は聞いているものの、知識面でスタートラインから出遅れている自分は、何よりもこれが必要だとエクスは理解した。

故に、強さと同じくらい専門的で実践的な知識を学べる事務所を選択した。

「緑谷さんのおかげです。ほんとありがとうございます」

「こちらこそ、役に立ててよかった。お互い頑張ろう！」

胸の前で両手を握る緑谷に、エクスも笑顔でガッツポーズを作る。

緑谷の助言を受け、実績や所属するヒーローを見て悩むこと数日。追加で緑谷に相

談をもちかけながらも、エクスは無事に体験先のヒーロー事務所を選ぶことが出来た。「マジで緑谷さんのおかげなんで、なんかあつたら言つてくださいね！ 絶対助けます！」

「エクスクンこそー！」

緑谷へ手を振りながら、エクスは電車に乗り込む。緑谷はこの列車では無い為ここでお別れだ。

アルスやレヴィも違う事務所であり、ここからは真正銘自分一人。雄英に入ってから、大半の時間を友人と過ごしていたエクスは、深呼吸で緊張を和らげる。

窓の外の景色は次々と後方へと流れて行き、見慣れた街をだんだんと離れていく。

今回エクスの向かうヒーロー事務所・YASHIROは、都心部から少し離れた場所に位置する場所で、雄英高校からは電車で十数分ほど。

やたらと重いコスチュームや必要な道具が入った大きなキャリアバッグを引き寄せ、エクスは少しだけ気を引き締めた。

無骨なコンクリートの中に木々の緑も混じった、美しさを感じる立派なビル。

此処こそが、ヒーローランキング8位のヒーロー『ドーラ』の所属する大手ヒーロー事務所、『YASHIRO』。

そのエントランスに入ったエクスは、自分の案内に現れた人物を見て首を傾げる。

「なんで葛葉さんなんですか」

気まずそうに首の後ろを擦りながら現れたのは、クラスメイトにして友人の葛葉。

まさしく予想外の人物が、事務所の案内役としてやってきた。

「まあその辺も後で説明するわ。こっち着いてきて」

「あ、はい……」

居心地の悪そうに歩き始める葛葉。その後が続いて、大勢の人が行き交う事務所を進んでいく。

エントランスの正面に設置されたエレベーターに乗り込み、葛葉は最上階のスイッチを押す。

いかにも最新型といったエレベーターは、一定の感覚で表示されたデジタル数字を増やしていく。

いつもとは様子の違う葛葉は口を開く様子が無く、エレベーター内は沈黙が続く。

やがて、数字が6に切り替わった時、エレベーターが停止してドアが開いた。

「……いくか」

意を決した様子の葛葉に、エクスは短く返事を返してエレベーターを降りた。

6階はワンフロア全てが1つの部屋になっており、正面の壁は全てがガラス張り、右の壁はファイルの詰まった本棚が端から端まで並べられていた。

そして。

「ん? おお、きたきた。いらっしやい。ようこそ、ヒーロー事務所・YASHIR
Oへ」

部屋の中心に設置された、社長席と思しき豪華な机と椅子。

そこに腰かけていた男性が、軽い調子で手を挙げる。

「案内してくれてありがとうとな葛葉。えっと、エクスくん、だっけ?」

「あ、はい。エクス・アルビオです」

「ヒーロー名は?」

「『英雄 エクス』です」

「おお。名前が横文字だと、そのまんまでも様になるなあ」

高そうな椅子を左右に揺らしながら、楽しそうに笑う男性。

威圧感などは全く無く、どう見ても親しみやすいおじさんでしかない。

状況を掴めないまま困惑するエクス。それを見た男性は軽く咳払いをして、机に肘

を乗せて左右の指を組んだ。

「私が、このヒーロー事務所・YASHIROの所長『ワークヒーロー ハツカ』。君を指名したプロヒーローです」

「はい。 よろしくお願ひします」

「よろしく。 まあ一旦座つてよ」

明るい声で話す男性——ハツカは、自分の机の前のソファへと手を向けた。

ソファは向かい合う形で2つ置かれており、その間には低い長机が1つ鎮座している。

エキスと葛葉が並んで左側のソファに座ると、ハツカも社長席から向かい側のソファへと移った。

「じゃあまず、2人にひとつ質問。 職場体験にここを選んだ理由を教えてください」

チラリと2人で視線を向け合う。 そして、先に葛葉が口を開いた。

「将来はここで働くつもりだし、今のうちから経験しとこうかなって」
「なるほどね」

葛葉の話聞いたハツカが、手元の書類に何かを書き込む。

「エキス君は？」

ハツカが視線を向ける。

エクスは、膝の上に置いた手を軽く握りしめた。

「はい。俺はまだ全然弱いですけど、それ以上にヒーローの事とか、色んなことを知らなすぎるので。だから、戦闘力よりも情報とかで有名になったハツカさんに、色々教わりたくてここに来ました」

「なるほど……。確かに、そういう知識的な面を求めるなら俺は適任だね。しかもウチには強いヒーローもいるからね」

社ヒーロー事務所に所属する、強いヒーロー。

緑谷から教わった名前が、咄嗟に口から出る。

「ドールさん、ですよね?」

「そうー。だからまあ、ここならエクスくんが求めるものは得られると思うよ」
頑張り次第だけだね。　　と言って、ハツカは書類からペン先を離す。

「うん。葛葉は雑だけど、まあ大目に見てやるか。じゃあ、はい。コレがスケジュール」

それぞれに差し出されるプリント。

そこには、職場体験期間中の日程が記されていた。

「書いてあるとおりだけど、基本は現場に出て、実際に色々見ながら勉強してもらいます。んで、終わるちよつと前にまとめ的な座学。途中からは実践も交えていくか

ら」

プリントにはその日に何をする予定かまで細かく記載されており、3日目からは実践の内容が追加されている。

「その辺は後から覚えてもらえばいいよ。今日はとりあえず2人の実力を見たいから、コスチュームはある？」

「あります」

「じゃあ着替えて、10分後に外集合」

ソファから立ち上がり、エレベーターへと乗り込むハツカ。それを見送って、エクスはソファに深くもたれかかった。

「これがプロヒーローか……」

学生の自分とは違う、仕事をしている雰囲気。

プロがどういふものかを再確認し、エクスは1度だけ大きく息を吐いた。

「先生達もだけどな」

気だるげに、コスチュームへと着替えていく葛葉。

手早く黒と赤の戦闘用スーツを身に纏い、上から同色のパーカーを羽織る。

「はやくしろー」

「葛葉さん早すぎるって」

サポート科によって強化された、伸縮性のあるアンダーウェアと金属製の鎧。 仕上

げに大剣を背負い、エクスはエレベーターの前で待つ葛葉へと駆け寄った。

葛葉がボタンを押し、エレベーターを2人で待つ。

「そういえば、なんでハツカさんって葛葉さんの事呼び捨てだったんですか？」

さっきのハツカとの会話の中で、エクスが抱いた疑問。

エクスは君付けだったが、葛葉は全て呼び捨てにされていた。

その疑問を受けて、葛葉は思わず頬をかく。

「ん？ あー……。 まあ親父だからな」

「……はあ!!? 親父い!!」

ピンポン、と。

エクスの叫びと同時にエレベーターが到着した。

「え、嘘でしょ!？」

「マジ。俺の親、ハツカとドローラ」

「ドローラさんもなの!？」

明かされた衝撃の事実。

エクスはその事実には驚きつつ、今日の葛葉の不自然な態度に納得する。

「そりゃ気まずいわ。 親の仕事場に職場体験来たんでしょ?」

「そくなんだよなあ〜！ まじでもっと考えときや良かった〜！」

エレベーターの密室で、頭を抱えながら葛葉は絶叫した。

多くの指名の中から偶然名前を見つけ、ほぼ即決で決めてしまった葛葉は、その選択を後悔していた。

事務所の中で出会う両親や知り合いのヒーロー達の、まるで微笑ましいものを見るような視線は、葛葉にはこれ以上なく恥ずかしいのだ。

エレベーターが1階へと到着し、扉を開く。広いエントランスは、全くと言っていいほど人が減る気配が無い。

すれ違う人に挨拶をしながら、足早にエントランスを通り抜ける。

「おーい、こっちこっち」

エクストと葛葉が並んでビルを出ると、どこからか声が聞こえてくる。

つられて視線を右へと向けると、1人の女性が手を振っていた。

葛葉が嫌そうにうめき声を上げた。

「来た来た。こっちおいで」

一見普通の人間のように見えるものの、頭には角が生え、腰からは大きな尻尾が伸びている。

人間とは違う肉体に堂々とした佇まい、そして微かに感じる熱が、その女性が何者な

のかを雄弁に物語っていた。

「今日は築と代わってワシが見るからなく」

ヒーローランキング第8位、『ドレイクヒーロー ドーラ』。

日本トップクラスにしてヒーロー事務所・YASHIROの最高戦力が、当然のようにそこに居た。

「ドーラさんが直々に、ですか？」

「そ。強さを測るだけなら、築よりもワシが適任じゃろ？」

「なるほど」

考えてみれば、当然の返答。

ハツカが来ると思っていたが故に困惑したが、実力を測るだけならばドーラの方が適任だ。

「すぐそこにウチの事務所のトレーニング施設があるから、そこに行きます。ちゃん
と荷物置く場所もあるから安心してください」

「実力測るって、要するに母さんとバトるってこと？ 嫌なだけだ」

説明を聞いた葛葉が手を挙げながら文句を言うと、ドーラは咳払いをして葛葉へと歩み寄る。

そして、笑顔でデコピンを放った。

「ぐええ!？」

豪快な音と共に、葛葉が頭からアスファルトに叩きつけられる。どう見ても5mは吹き飛んでいた。

「今は『母さん』じゃなくて『ドーラ』。それに自分でここ選んだんだから、今更文句言うな」

額を押えて悶える葛葉をみおろしながら、腕を組むドーラ。

一部始終を見ていたエクスは内心冷や汗が止まらない。

「じゃあ行きましようか？」

「はい……」

にこやかに笑うドーラに逆らう選択肢は、エクスには無かった。

トレーニング施設の一室。体育館ほどの広さのレクリエーションルームにて、エクス・葛葉コンビは、ドーラと向かい合っていた。

ドーラは髪を一つに纏め、黒い戦闘用スーツに身を包んでいる。ヒーローとしてよく知られた、鱗のようなコスチュームでは無い。

「心配しなくても、ちゃんと手加減はします」

準備運動に軽いストレッチを行うドーラ。

それを見るエクスと葛葉は目が死んでいた。

「勝てる気しないんですけど」

「まあ無理っしょ。 どうする?」

「逃げ切れると思います?」

「ゼツツタイ無理」

顔を見合せて、同時にため息。 結局やるしかないらしい。

エクスが拳を構え、葛葉は腰のホルスターから拳銃を引き抜く。

戦闘態勢に入った二人を見て、ドーラは不敵に笑う。

「じゃあ、行くぞ〜」

軽い告げられた開始の合図。 ドーラの姿が視界から消えた。

「(バ)お……っ!」

エクスの身体が吹き飛び、コンクリート製の壁に激突する。 反射的に屈んだ葛葉の

頭上をドーラの脚が通り過ぎた。

「遅い」

目の前のドーラへと拳銃を向けようとするも、襟元を掴まれて思い切り投げ飛ばされ

る。

「そおいー！」

「が」

空中で追撃とばかりに振り抜かれる右の拳。 防御も間に合わず直撃を食らい、エクストと同じように壁に叩きつけられる。

1度の攻撃で痛感させられた力の差。

トップヒーローと自分達を隔てる壁を、エクストと葛葉は身を持って理解する。

「どうした？ ワシはまだ熱くもなつとらんぞ」

「化け物すぎでしょ……」

身体を起こしながらエクスがボヤク。

ドーラの個性の真髄は、身体能力では無く圧倒的な熱。

ファイヤードレイクの力をフルに使い、体温を最大で数百度にまで上げることで、周りを火の海へと変える。 そうやって自分の有利な環境を作れるのがドーラの強みだ。

そんな強みを使うまでもなく、エクストと葛葉は一瞬で叩きのめされた。

その上、思い切り吹き飛ばされたり、壁に叩きつけられたりしたと言うのに、2人はまだ大した怪我は負っていない。

明確に手加減されている。

起き上がったエクスが、両手で自分の頬を張る。腕試しという考えを捨て、格上を倒す為に思考をフル回転させた。

そして、拳を握ってドーラへと駆け出す。ドーラは一切避ける素振りを見せない。

「挟むぞ、エクス！」

腰に翼を生やした葛葉が、反対方向から高速で接近。思い切り右脚を振るう。

正面からはエクスの拳、後ろからは葛葉の蹴り。どちらかは視界から外れる同時攻撃を前に、ドーラはまだ動かない。

「言っておくけどな。ワシ相手にその程度じゃ牽制にもならんぞ？」

鈍い音が重ねて響く。それはエクスと葛葉の攻撃が、ドーラに間違いなく当たった事を証明していた。

USJの際に襲撃してきた並のヴィラン程度なら、問答無用で再起不能に出来る程の攻撃。

それがどちらも直撃したと言うのに、2人の攻撃は、ドーラを動かすことすら出来なかった。

通じていない。1秒にも満たない時間でそれを理解したエクスは、即座に距離を取る。

しかし空中に居た葛葉は、反応がワンテンポ遅れてしまった。

「これは、思つてたよりもダメかもなあ。なあ、葛葉？」

掴まれる左腕。それを蝙蝠にしてバラそうとするも、その前に大きく投げ飛ばされる。

1度壁にぶつけられている以上、葛葉に2度目を受けるつもりは無い。

翼を使うことで体勢を整え、地面を足で削りながら勢いを殺す。

その横を駆け抜けたエクスがドーラの前へと躍り出る。

そして、打撃が効いていないなら斬ればいい。とばかりに背中の中の剣を抜き、両手で横向きに切り払った。

金属同士が擦れるような不快な音がレクリエーションルームに響き渡る。

「っ、まじか」

剣を握る手に力が籠もる。

全力で振るった剣は尻尾に容易く絡め取られており、エクスの方では押すことも引くことも出来ない。

「剣を使うのは分かったが、動きがチグハグじゃな？ 無理矢理動かされとるように見えるぞ」

見る事すら難しい速度で右肩、胸、腹へと掌底が叩き込まれ、衝撃で3m程後ろへと転がる。

痛みはあるが骨に異常は感じられない。

エクスと代わり、葛葉がドーラへと迫る。

葛葉が選んだ戦法は速攻。

「ウラァー！」

翼を2対に増やし、あらゆる方向からドーラへと蹴りを打ち込み続ける。が、相も

変わらず動かせる気配は無い。

「葛葉さん、合わせてー！」

復帰したエクスが腰だめに拳を構える。それに合わせ、背後から葛葉がドーラへと

組み付いた。

「連携はまあまあ。じゃけど、シンプルに弱いな」

尻尾で葛葉を掴み、身体を捻ってエクスへと投げつける。

葛葉は咄嗟に全身を蝙蝠にバラし、エクスへの直撃を回避。

蝙蝠の中を突っ切って、エクスの拳がドーラへと突き刺さる。

そして、お返しとばかりに放たれた蹴りで再び壁に激突した。

「ほうらどうした？ もうギブアップか〜？」

煽るように手を叩くドーラ。足元の剣もエクスの方へと放り投げてやる。

「ちなみに、あと1時間は続けるからな。初日だし」

軽く笑いながら、体を解すように準備運動をする。それは、『これからが始まりだ』と言外に告げているように。

「Plus ultra」。ワシを超えてみるか？ ガキ共
赤い竜を前に、卵2人組は微かに頬を弛めた。